
さいたま市

高木稻荷前／高木氷川

大宮西部特定土地区画整理事業地内
埋蔵文化財発掘調査報告

2016

独立行政法人 都市再生機構
公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

序

埼玉県は首都東京に隣接し、高次の都市機能と交通利便性を備えながら、ゆとりや潤いをもたらす自然環境にも恵まれています。現在、さいたま市西区では、独立行政法人都市再生機構による大宮西部特定土地区画整理事業が行われ、JR西大宮駅周辺のまちづくりが推進されています。

平成21年春にまちびらきした「Liv-Field 西大宮」は、多様な都市機能をもつ新市街地として、安心と安全、環境との共生、便利で快適な、地域の特性と文化を活かした、そしてコミュニティを育むまちづくりを目指しながら、さまざまな取り組みがなされています。

さて、大宮西部特定土地区画整理事業地内には、周知の埋蔵文化財包蔵地が多数所在します。今回発掘調査を実施した高木稻荷前、高木氷川遺跡もその一つです。発掘調査は同区画整理事業に伴う事前調査であり、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、当事業団が実施いたしました。

発掘調査の結果、高木稻荷前遺跡では縄文時代後期の竪穴住居跡や埋甕、古墳時代後期の竪穴住居跡などが見つかり、長い間人々の暮らしの舞台となっていましたことがわかりました。一方、高木氷川遺跡では、縄文時代中期の竪穴住居跡や土壙、出土した縄文土器や石器によって、谷奥の台地上に営まれた縄文のムラの風景を、思い起こさせる貴重な資料を得ることができました。

本書は、これらの発掘調査成果をまとめたものです。埋蔵文化財の保護並びに普及・啓発の資料として、また学術研究の基礎資料として、多くの方々に活用していただければ幸いです。

最後に、本書の刊行にあたり、発掘調査の諸調整に御尽力いただきました埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課をはじめ、独立行政法人都市再生機構首都圏ニュータウン本部、さいたま市教育委員会、並びに地元関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

平成28年11月

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理 事 長 塩野谷 孝志

例　言

1. 本書は、さいたま市に所在する高木稻荷前遺跡第1次調査、及び高木氷川遺跡第1次調査の発掘調査報告書である。
2. 遺跡の代表地番及び発掘調査届に対する指示通知は、以下のとおりである。

高木稻荷前遺跡第1次調査

さいたま市西区大字高木417-1他
平成26年6月20日付け 教生文第2-13号

高木氷川遺跡第1次調査

さいたま市西区大字高木948-1他
平成27年4月2日付け 教生文第2-6号

3. 発掘調査は、大宮西部特定土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財記録保存のための事前調査である。埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が調整し、独立行政法人都市再生機構の委託を受け、公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
4. 各事業の委託事業名は、下記のとおりである。

発掘調査事業（平成26・27年度）

「平成26年度大宮西部特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託」
「平成27年度大宮西部特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査委託」

整理報告書作成事業（平成28年度）

「平成28年度大宮西部特定土地区画整理事業
地内埋蔵文化財発掘調査（整理）委託」

5. 発掘調査・整理報告書作成事業はI-3に示した組織により実施した。

発掘調査は、高木稻荷前遺跡を平成26年4月1日から平成26年6月30日まで実施し、山本靖・魚水環が担当した。高木氷川遺跡を平成27年4

月1日から平成27年6月30日まで実施し、青木弘・中川莉沙が担当した。

整理報告書作成事業は、平成28年4月1日から平成28年9月30日まで大谷徹が担当し、平成28年11月25日に埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第427集として印刷・刊行した。

6. 発掘調査における基準点測量は、高木稻荷前遺跡を株式会社本州、高木氷川遺跡を株式会社ビッソ測量設計に委託した。
 7. 発掘調査における空中写真は、高木稻荷前遺跡を中央航業株式会社、高木氷川遺跡を株式会社東京航業研究所に委託した。
 8. 発掘調査における写真撮影は、高木稻荷前遺跡を山本・魚水、高木氷川遺跡を青木・中川が行い、出土遺物の写真撮影は大谷が行った。
 9. 出土品の整理・図版作成は大谷が行い、縄文土器については細田勝・上野真由美、石器については西井幸雄の協力を得た。
 10. 本書の執筆は、I-1を埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課が、VIを大屋道則、VII-2を細田、他は大谷が行った。
 11. 本書の編集は大谷が行った。
 12. 本書にかかる諸資料は平成28年12月以降、埼玉県教育委員会が管理・保管する。
 13. 発掘調査や本書の作成にあたり、下記の機関・方々から御教示・御協力を賜った。記して感謝いたします（敬称略）。
- さいたま市教育委員会 さいたま市遺跡調査会
上尾市教育委員会
青木文彦 石原祐介 小宮山克己 橋本玲未
長谷尾篤 柳田博之 山田尚友 吉岡卓真

凡 例

1. 高木稻荷前遺跡におけるX・Yの数値は、日本測地系（旧測地系）国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。また、各挿図に記した方位はすべて座標北を示す。

調査で使用したグリッドは、座標値X=-7500.000m、Y=-23400.000mを基点（A 1-A 1グリッド）とし、大宮西部特定土地区画整理事業地内全域をカバーする100×100mの大グリッドを設定し、その中を10×10mの中グリッドに細分した。

大グリッドの名称は、北から南方向にアルファベット（A、B、C…）、西から東方向に数字（1、2、3…）を付し、アルファベットと数字を組み合わせた。中グリッドは北西杭を基準に北から南方向にA～J、西から東方向に1～10とし、100グリッドに区分した。

調査区南側中央のK 3-G 1グリッド北西杭の座標は、日本測地系X=-8560.000m、Y=-23200.000m。北緯35° 55' 21.2256"、東経139° 34' 34.3865"である。

世界測地系による変換値は、X=-8204.976m、Y=-23492.453m。北緯35° 55' 32.7500"、東経139° 34' 22.7926"である。

2. 高木氷川遺跡におけるX・Yの数値は、世界測地系（新測地系）国土標準平面直角座標第IX系（原点北緯36° 00' 00"、東経139° 50' 00"）に基づく座標値を示す。

調査で使用したグリッドは、国土標準平面直角座標に基づく10×10mの範囲を基本（1グリッド）とし、事業地内全体の大グリッドとは別に、調査区全体をカバーする方眼を組んだ。

グリッド名称は、北西隅を基点とし、北から南方向にアルファベット（A、B、C…）、西から東方向に数字（1、2、3…）を付し、ア

ルファベットと数字を組み合わせた。

調査区南側中央のC-3グリッド北西杭の座標は、世界測地系 X=-7360.000m、Y=-23400.000m。北緯35° 56' 00.1755"、東経139° 34' 26.3914"である。

日本測地系による変換値は、X=-7714.9545m、Y=-23107.5716m。北緯35° 55' 48.6831"、東経139° 34' 38.0957"である。

3. 遺構の略号は以下のとおりである。

S J…豎穴住居跡 S D…溝跡 S K…土壙
P…ピット

4. 本書における挿図の縮尺は、以下のとおりである。ただし、一部例外もあり、それについては図中に縮尺とスケールを示した。

全体図 1/300

遺構図 1/60・1/30

遺物実測図・拓影図 1/4・1/3・1/2

5. 遺構断面図に表記した水準数値は、すべて海拔標高（単位m）を表す。

6. 遺物観察表の表記方法は以下のとおりである。

- ・口径・器高・底径はcm単位である。
- ・（ ）内の数値は復元推定値、〔 〕内の数値は残存高を示す。
- ・胎土は特徴的な鉱物等を記号で示した。

A：雲母 B：片岩 C：角閃石 D：長石

E：石英 F：軽石 G：砂粒子

H：赤色粒子 I：白色粒子 J：針状物質

K：黒色粒子 L：その他（小礫）

・焼成は良好・普通・不良の3段階に分けた。

・残存率は器形に対する大まかな遺存程度を%で示した。

7. 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の1/50,000地形図（大宮）、さいたま市発行の1/2,500都市計画図を編集・使用した。

目 次

序

例言

凡例

目次

I	発掘調査の概要	1
1.	発掘調査に至る経過	1
2.	発掘調査・報告書作成の経過	2
(1)	発掘調査	2
(2)	整理・報告書作成	2
3.	発掘調査・報告書作成の組織	3
II	遺跡の立地と環境	4
1.	地理的環境	4
2.	歴史的環境	5
III	遺跡の概要	11
1.	事業地内の遺跡の概要	11
2.	高木稻荷前・高木氷川遺跡の概要	17
IV	高木稻荷前遺跡の調査	20
1.	縄文時代の遺構と遺物	20
(1)	竪穴住居跡	20
(2)	グリッド出土遺物	26
2.	古墳時代の遺構と遺物	30
(1)	竪穴住居跡	30
3.	近世の遺構と遺物	34
(1)	溝跡	34
(2)	土壙	36
(3)	ピット	47
(4)	グリッド出土遺物	50
V	高木氷川遺跡の調査	51
1.	縄文時代の遺構と遺物	51
(1)	竪穴住居跡	51
(2)	土壙	72
(3)	グリッド出土遺物	72
2.	近世の遺構と遺物	77
(1)	土壙	77
(2)	ピット	86
VI	石器の石材分析	87
VII	調査のまとめ	88
1.	調査の成果	88
(1)	高木稻荷前遺跡の調査成果	88
(2)	高木氷川遺跡の調査成果	88
(3)	滝沼川流域右岸の遺跡群	88
2.	縄文時代について	90
(1)	高木氷川遺跡住居跡出土土器	90
(2)	高木稻荷前遺跡住居跡出土土器	91
3.	古墳時代について	93
(1)	高木稻荷前遺跡出土土器の年代	93

写真図版

挿図目次

第1図 埼玉県の地形	4
第2図 周辺の遺跡（旧石器・縄文）	6
第3図 周辺の遺跡（弥生以降）	8
第4図 大宮西部特定土地区画整理事業地内の遺跡分布	12
第5図 基本土層	13
第6図 遺跡調査地点位置図（1）	14
第7図 遺跡調査地点位置図（2）	16
第8図 高木稻荷前遺跡全体図	18
第9図 高木氷川遺跡全体図	19
高木稻荷前遺跡	
第10図 第2号住居跡（1）	21
第11図 第2号住居跡（2）	22
第12図 第2号住居跡出土遺物（1）	23
第13図 第2号住居跡出土遺物（2）	24
第14図 第4号住居跡（1）	25
第15図 第4号住居跡（2）	26
第16図 第4号住居跡出土遺物	26
第17図 グリッド出土遺物（1）	28
第18図 グリッド出土遺物（2）	29
第19図 第1号住居跡（1）	31
第20図 第1号住居跡（2）	32
第21図 第1号住居跡出土遺物	33
第22図 第3号住居跡	34
第23図 第1・2・3号溝跡	35
第24図 第3号溝跡出土遺物	36
第25図 第4・5・6号溝跡	37
第26図 土壙（1）	39
第27図 土壙（2）	40
第28図 土壙（3）	41
第29図 土壙（4）	43
第30図 土壙（5）	44
第31図 土壙出土遺物	45
第32図 ピット分布図（1）	47
第33図 ピット分布図（2）	48
第34図 ピット分布図（3）	49
第35図 グリッド出土遺物	50
高木氷川遺跡	
第36図 第1号住居跡（1）	51
第37図 第1号住居跡（2）	52
第38図 第1号住居跡出土遺物（1）	53
第39図 第1号住居跡出土遺物（2）	54
第40図 第1号住居跡出土遺物（3）	55
第41図 第2号住居跡	56
第42図 第2号住居跡出土遺物	57
第43図 第3号住居跡（1）	58
第44図 第3号住居跡（2）	59
第45図 第3号住居跡出土遺物（1）	61
第46図 第3号住居跡出土遺物（2）	62
第47図 第3号住居跡出土遺物（3）	63
第48図 第4号住居跡（1）	65
第49図 第4号住居跡（2）	66
第50図 第4号住居跡出土遺物（1）	67
第51図 第4号住居跡出土遺物（2）	68
第52図 第4号住居跡出土遺物（3）	69
第53図 第4号住居跡出土遺物（4）	70
第54図 第4号住居跡出土遺物（5）	71
第55図 土壙	73
第56図 土壙出土遺物	74
第57図 グリッド出土遺物（1）	76
第58図 グリッド出土遺物（2）	77
第59図 土壙（1）・出土遺物	79
第60図 土壙（2）	80
第61図 土壙（3）	81
第62図 土壙（4）	83
第63図 土壙（5）	85
第64図 X線回折のプロファイル	87
第65図 高木氷川遺跡縄文土器変遷図	90
第66図 高木稻荷前遺跡出土土器関連図	92

表 目 次

第1表 周辺の遺跡一覧表	9
高木稻荷前遺跡	
第2表 第2号住居跡出土石器観察表	24
第3表 グリッド出土石器観察表	30
第4表 第1号住居跡出土遺物観察表	33
第5表 第3号溝跡出土遺物観察表	36
第6表 土壙出土遺物観察表	46
第7表 土壙一覧表	46
第8表 ピット一覧表	50
第9表 グリッド出土遺物観察表	50

高木氷川遺跡

第10表 第1号住居跡出土石器観察表	56
第11表 第3号住居跡出土石器観察表	64
第12表 第4号住居跡出土石器観察表	71
第13表 グリッド出土石器観察表	77
第14表 第8号土壙出土遺物観察表	79
第15表 土壙一覧表	86
第16表 ピット一覧表	87
第17表 X線回折装置の設定	87

写 真 図 版 目 次

図版1 1 高木稻荷前遺跡・高木氷川遺跡遠景	
(南東から)	

高木稻荷前遺跡

2 高木稻荷前遺跡遠景 (北東から)	
--------------------	--

図版2 1 高木稻荷前遺跡近景 (西から)	
2 高木稻荷前遺跡全景	

図版3 1 調査区南側 (西から)	
2 調査区南側 (東から)	

図版4 1 調査区東側 (南から)	
2 調査区東側 (北から)	

図版5 1 第2号住居跡	
2 第4号住居跡	

図版6 1 第2号住居跡埋甕1検出状況	
2 第2号住居跡埋甕1	
3 第2号住居跡埋甕1半截状況	

図版7 1 第2号住居跡埋甕2	
2 第2号住居跡埋甕2土層断面	
3 第2号住居跡炉跡	
4 第4号住居跡埋甕1	
5 第4号住居跡埋甕1半截状況	
6 第4号住居跡埋甕2	
7 第4号住居跡炉跡	

8 第4号住居跡炉跡土層断面	
----------------	--

図版8 1 第1号住居跡	
--------------	--

2 第1号住居跡遺物出土状況	
----------------	--

図版9 1 第1号住居跡カマド	
2 第1号住居跡カマド遺物出土状況	
3 第1号住居跡遺物出土状況	

4 第3号住居跡カマド	
-------------	--

5 第1・2・3号溝跡	
-------------	--

6 第4・5号溝跡	
-----------	--

7 第5号溝跡	
---------	--

8 第6号溝跡	
---------	--

図版10 1 第1号土壙	
--------------	--

2 第2号土壙	
---------	--

3 第3号土壙	
---------	--

4 第4号土壙	
---------	--

5 第5号土壙	
---------	--

6 第6号土壙	
---------	--

7 第7号土壙	
---------	--

8 第8号土壙	
---------	--

図版11 1 第9号土壙	
--------------	--

2 第10号土壙	
----------	--

3 第11号土壙	
----------	--

4	第12号土壤	高木氷川遺跡
5	第13号土壤	図版19 1 高木氷川遺跡遠景（北から）
6	第14号土壤	2 高木氷川遺跡近景（北東から）
7	第15号土壤	図版20 1 高木氷川遺跡全景
8	第16号土壤	2 調査区全景（北東から）
図版12	1 第17・18号土壤	図版21 1 第1号住居跡
	2 第19号土壤	2 第1号住居跡遺物出土状況（1）
	3 第20号土壤	図版22 1 第1号住居跡遺物出土状況（2）
	4 第21号土壤	2 第1号住居跡遺物出土状況（3）
	5 第22号土壤	3 第1号住居跡遺物出土状況（4）
	6 第23号土壤	4 第1号住居跡遺物出土状況（5）
	7 第24号土壤	5 第1号住居跡炉跡（1）
	8 第25号土壤	6 第1号住居跡炉跡（2）
図版13	1 第26号土壤	7 第1号住居跡炉跡（3）
	2 第27・34号土壤	8 第1号住居跡炉跡（4）
	3 第28号土壤	図版23 1 第2号住居跡
	4 第29号土壤	2 第3号住居跡
	5 第30・35号土壤	図版24 1 第3号住居跡遺物出土状況
	6 第31号土壤	2 第2号住居跡遺物出土状況
	7 第32号土壤	3 第3号住居跡炉跡
	8 第33号土壤	4 第3号住居跡炉跡土層断面
図版14	1 第2号住居跡埋甕1出土遺物	5 第3号住居跡ピット3・5
	2 第2号住居跡埋甕2出土遺物	図版25 1 第4号住居跡遺物出土状況（1）
	3 第4号住居跡埋甕1出土遺物	2 第4号住居跡遺物出土状況（2）
	4 グリッド出土遺物	図版26 1 第4号住居跡遺物出土状況（3）
	5 第2号住居跡出土遺物	2 第4号住居跡遺物出土状況（4）
	6 グリッド出土遺物	3 第4号住居跡遺物出土状況（5）
図版15	1・2 第2号住居跡出土遺物	4 第4号住居跡
	3 第4号住居跡出土遺物	5 第29号土壤
図版16	1～3 グリッド出土遺物	6 第31・33号土壤
図版17	1～12 第1号住居跡出土遺物	7 第41号土壤
図版18	1～4 第3号溝跡出土遺物	8 第41号土壤遺物出土状況
	5 第13号土壤出土遺物	図版27 1 第1号土壤
	6 第16号土壤出土遺物	2 第2号土壤
	7 第22号土壤出土遺物	3 第3・4・5号土壤
	8・9 第23号土壤出土遺物	4 第6・7号土壤
	10～12 グリッド出土遺物	5 第8号土壤

6	第8号土壙遺物出土状況	4・5	第2号住居跡出土遺物
7	第12号土壙	6～8	第3号住居跡出土遺物
8	第13号土壙	図版31	1・2 第3号住居跡出土遺物
図版28	1 第14号土壙	3～10	第4号住居跡出土遺物
2	第15号土壙	図版32	1 第1号住居跡出土遺物
3	第16・17・18号土壙	2	第2号住居跡出土遺物
4	第19・20・21号土壙	3	第3号住居跡出土遺物
5	第22・23号土壙	図版33	1～3 第3号住居跡出土遺物
6	第24号土壙	図版34	1 第3号住居跡出土遺物
7	第25・26号土壙	2～4	第4号住居跡出土遺物
8	第27号土壙	図版35	1～4 第4号住居跡出土遺物
図版29	1 第28号土壙	図版36	1 第29・33号土壙出土遺物
2	第32号土壙	2・3	第41号土壙出土遺物
3	第34号土壙	図版37	1・2 グリッド出土遺物
4	第36・37・38号土壙	3	第1号住居跡出土遺物
5	第39・40号土壙	図版38	1～3 第1号住居跡出土遺物
6	第42号土壙	4～6	第3号住居跡出土遺物
7	第43・44号土壙	7	第4号住居跡出土遺物
8	第43号土壙遺物出土状況	8・9	グリッド出土遺物
図版30	1～3 第1号住居跡出土遺物	10	第8号土壙出土遺物

I 発掘調査の概要

1. 発掘調査に至る経過

独立行政法人都市再生機構（旧都市基盤整備公団埼玉地域支社／のち住宅都市整備公団 以下「公団」という）は、さいたま市（旧大宮市）北西部で大宮西部特定土地区画整理事業を施行している。

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課では、このような施策の推進に伴う文化財の保護について、従前より関係機関との事前協議を重ね、調整を図ってきたところである。

本事業の計画段階における埋蔵文化財の所在及び取扱いについては、昭和63年8月17日付けし21-21号で、公団首都圏都市開発本部開発本部長（当時）より埼玉県教育委員会教育長あて照会があった。文化財保護課（当時）では、平成元年1月14日付け教文第1106号で、計画地内には埋蔵文化財包蔵地が15箇所所在することから、取扱いについて別途協議が必要である旨、回答した。

区画整理事業地内の埋蔵文化財については、公団埼玉地域支社長（当時）より平成10年7月9日付けさ25-4号で教育長あて「埋蔵文化財の所在及び取扱い」について照会があった。以後、事業の進捗に合わせ取扱いを決定するための試掘調査を文化財保護課（当時、現在は生涯学習文化財課）が実施してきた。

高木稲荷前遺跡は平成25年12月24日に試掘調査を実施し、記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答を行った。

高木氷川遺跡は平成27年1月19日付けし業042

-31で試掘調査の依頼を受け、平成27年1月27、28日に試掘調査を実施した。その結果を受けて、平成27年2月18日付け教文第2335号で記録保存のための発掘調査が必要である旨の回答を行った。

発掘調査については、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団（現在は公益財団法人 以下、「事業団」）と独立行政法人都市再生機構、当課の三者により、調査方法、期間、経費等の問題を中心に協議が行われた。その結果、高木稲荷前遺跡は平成26年4月1日から平成26年6月30日まで、高木氷川遺跡は、平成27年4月1日から平成27年6月30日までの期間で発掘調査を実施することになった。

文化財保護法第94条の規定による埋蔵文化財発掘通知は、平成12年9月1日付けさ24-11号、平成13年3月26日付けさ24-27号で公団埼玉地域支社地域支社長から県教育長あて提出され、それに対する保護上必要な勧告は平成12年9月26日付け教文第4-426号、及び平成13年4月9日付け教文第4-986号で行った。また、第92条の規定による発掘調査届が事業団理事長から提出された。

発掘調査に対する県教育長からの指示通知番号は次の通りである。

高木稲荷前遺跡

平成26年6月20日付け 教文第2-13号

高木氷川遺跡

平成27年4月2日付け 教文第2-6号

(埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課)

2. 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

高木稻荷前遺跡・高木氷川遺跡の調査は、大宮西部特定土地区画整理事業に伴い平成26年度及び平成27年度に実施した。調査面積は高木稻荷前遺跡が1,359m²、高木氷川遺跡が559m²である。

調査の経過は以下のとおりである。

高木稻荷前遺跡

平成26年4月上旬に、調査予定地内の工事用ガードフェンスの移設工事を行った後、重機による表土除去作業を開始した。並行して、現地に休憩棟兼器材棟を設置した。

4月中旬から人力による遺構確認作業を開始し、5月初旬には遺構測量用の基準点測量及びグリッド杭打設作業を実施した。確認作業の結果、縄文時代後期の住居跡や埋甕、古墳時代後期の住居跡などの多数の遺構が検出された。直ちに精査を開始し、順次土層断面、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。6月上旬に航空機による空中写真の撮影を実施した。

6月中旬までに遺構の精査・記録作業を終了し、器材の撤収、発掘事務所の撤去を行い、6月末にすべての作業を終了した。

高木氷川遺跡

平成27年4月上旬に発掘事務所を設営するとともに、調査区の保護と安全確保のため囲柵工事を行った。その後、重機による表土除去作業を開始した。並行して人力による遺構確認作業を行い、縄文時代中期の住居跡をはじめ、近世の土壌など多数の遺構を検出した。

直ちに精査を開始し、順次土層断面、遺構平面図、写真撮影等の記録作成作業を行った。6月初旬に空中写真撮影を行い、6月中旬までに遺構の精査・記録作業を終了した。

6月下旬に発掘器材や出土遺物を撤収した後、

発掘事務所・囲柵等を撤去し、6月末にすべての作業を終了した。

(2) 整理・報告書作成

整理・報告書の作成作業は、平成28年4月1日から平成28年9月30日までの6箇月間実施した。

対象遺物は27ℓ入りコンテナで、高木稻荷前遺跡が6箱、高木氷川遺跡が10箱の計16箱である。

4月から7月上旬まで出土遺物の水洗・注記を行い、引き続き遺物の接合・復元作業に着手した。並行して、遺物の実測や拓本を7月末まで実施した。実測は、大型のものは機械実測で素図を作成し、小型のものや土製品などは手作業と写真実測を併用して行った。土器片については、拓本と断面図とを組み合わせて実測図を作成した。

同時に、発掘調査で記録した遺構の断面図や平面図等は照合し、修正を加え第二原図を作成した。その後、第二原図をスキャナでコンピュータに取り込み、画像編集ソフトを用いて遺構ごとにトレースし、土層説明等を組み込んで、印刷用の版下とした。

実測が終了した遺物は順次トレースを進め、仕上がった遺物トレース図はスキャナでコンピュータに取り込み、8月まで遺物挿図の版下を作成した。

6月から原稿の執筆を開始し、並行して編集作業を実施した。7月下旬に遺物の写真撮影を行い、8月末にかけて遺構写真とともに写真図版を作成した。9月末に原稿を印刷業者に入稿した。

報告書は、10月上旬から11月中旬にかけて3回の校正を経て印刷を行い、11月末に事業団報告書第427集『高木稻荷前／高木氷川』を刊行した。

なお、図面や写真などの記録類や遺物は、9月末に整理・分類のうえ、埼玉県文化財収蔵施設の収蔵庫へ仮収納した。

3. 発掘調査・報告書作成の組織

平成26年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	昼 間 孝 志
常務理事兼総務部長	大 嶋 紳一郎	調 査 部 長	昼 間 孝 志
総務部		調 査 部 副 部 長	富 田 和 夫
総務部副部長	瀧 瀬 芳 之	主 幹 兼 調 査 第 二 課 長	木 戸 春 夫
総務課長	藤 倉 英 明	主 査	山 本 靖 環
		主 事	魚 水 環

平成27年度（発掘調査）

理 事 長	樋 田 明 男	調査部	金 子 直 行
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	富 田 和 夫
総務部		調 査 部 副 部 長	田 中 広 明
総務部副部長	瀧 瀬 芳 之	主 幹 兼 調 査 第 二 課 長	青 木 弘 弘
総務課長	安 田 孝 行	主 事	中 川 莉 沙
		主 事	

平成28年度（報告書作成）

理 事 長	塩野谷 孝 志	調査部	金 子 直 行
常務理事兼総務部長	木 村 博 昭	調 査 部 長	細 田 勝 靖
総務部		調 査 部 副 部 長	山 本 靖 靖
総務部副部長	黒 坂 賢 二	主 幹 兼 整 理 第 二 課 長	大 谷 徹
総務課長	曾 川 浩 二	主 幹	

II 遺跡の立地と環境

1. 地理的環境

高木稻荷前遺跡と高木氷川遺跡は、さいたま市北西部の西区大字高木に所在する。前者はJR川越線西大宮駅から約0.8km北西に、後者はさらにその約600m北に位置する。両遺跡とも大宮台地の西縁にあたり、周囲には宅地と畠が混在する景観が広がっている。

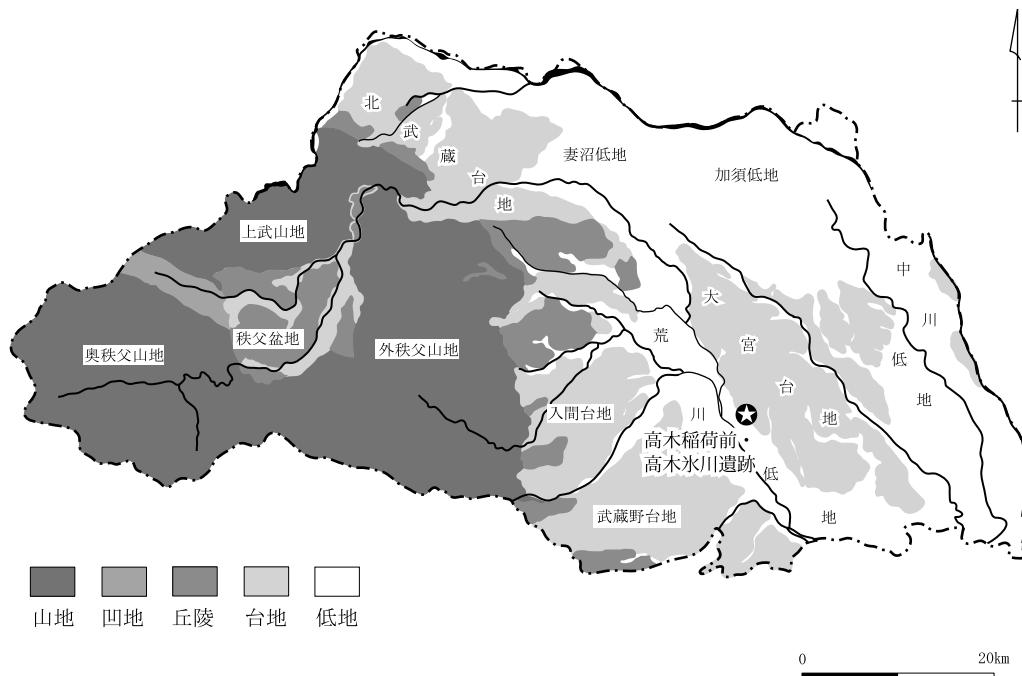
埼玉県は起伏の有無で大きく三つの地形環境に分けられる。すなわち、盆地と周辺の山地からなる秩父地域、それに連なる丘陵と台地からなる中部地域、荒川・中川両低地帯と低台地が展開する東部地域（いわゆる埼玉平野）である。

大宮台地は、埼玉平野の中央に位置する荒川と中川の両低地に挟まれた南北約25km、東西約18kmの低台地である。その中心を貫流する元荒川を境として西側に大宮主台と安行支台、東側は蓮田・岩槻・白岡・慈恩寺の各支台に大別される。標高は大宮主台北方の北本市高尾周辺が最も高く、関

東造盆地運動の影響により北と東に向かって緩やかに傾斜している。そのため、荒川低地に面する西側縁辺部は明瞭な崖線が見られるのに対し、東側は低地との比高差がほとんどなく、崖線が不明瞭なまま低地へと移行している。

高木稻荷前遺跡と高木氷川遺跡は、荒川に注ぐ滝沼川と中釤川に挟まれた、馬の背状の細長い台地の付け根付近に位置している。

清河寺付近を水源に南流してきた滝沼川が、大きく流れを西に変える地点を見下ろす、標高約15mの台地先端部に高木稻荷前遺跡が立地する。その北側には、高木稻荷下遺跡、高木道下遺跡、高木道下北遺跡、高木小明遺跡が、小支谷によって半島状に分断された台地上に連なっている。さらに、中釤川によって開析された谷奥に面するよう高木氷川遺跡が立地している。



第1図 埼玉県の地形

2. 歴史的環境

高木稻荷前遺跡（1）と高木氷川遺跡（2）の位置する大宮台地周辺には、旧石器時代から近世に至る遺跡が数多く分布している（第2・3図）。

旧石器時代

大宮台地における旧石器時代の登録遺跡はおよそ250箇所にのぼる。ほとんどが後期旧石器時代後半の遺跡であり、その多くは荒川に近い地域で発見されている。後期旧石器時代後半期の岩宿Ⅱ期（武蔵野台地第V～IV層下部段階）では、殿山遺跡（44）で黒曜石製のナイフ形石器と共に玉髓製の国府型ナイフ形石器が複数出土し、埼玉県指定文化財となっている。天沼遺跡（28）や西大宮バイパスNo.4～6遺跡（9・7・6）でも、横長剥片を素材とする国府型ナイフ形石器に類似する製品が出土している。

これに対し、砂川期及びナイフ形石器終末期（武蔵野台地第IV層上部）の遺跡は、鴨川や滻沼川、中堀川などの中小河川によって開析された台地内陸に分布している。前戸崎遺跡（61）からは、ナイフ形石器や抉入削器等、チャート製の石器群が出土しており、剥片類と石核の接合資料が注目される。在家遺跡（38）では、複数の石器集中が検出され、黒曜石やガラス質黒色安山岩からなるナイフ形石器・槍先形尖頭器・削器・彫器等多様な石器が出土している。B-53号遺跡（64）からも石器集中が1箇所検出されている。

そのような中、後期旧石器時代前半の遺跡群が滻沼川流域に集中して発見されていることは、特筆される。西大宮バイパスNo.5遺跡（7）では、ガラス質安山岩を主体とする石器群に台形様石器が伴って出土している。同No.6遺跡（6）では、ガラス質安山岩の剥片類や石核の接合資料が出土している。清河寺前原遺跡（12）では、台形様石器を多数含む黒曜石主体の石器群が発見されており、大宮台地で最初に人が住み始めた場所のひとつと考えられている。

縄文時代

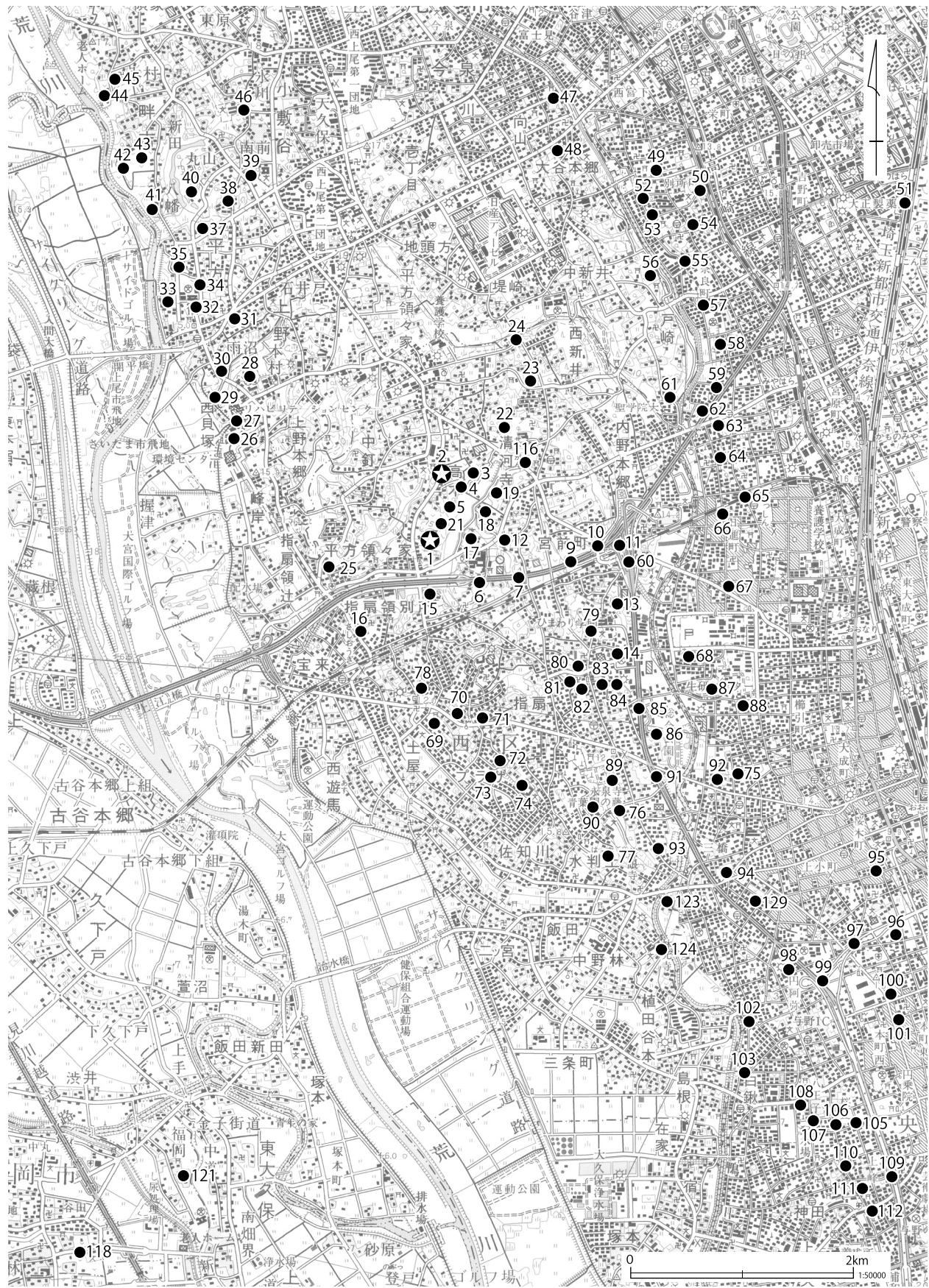
草創期の遺跡は少ないものの、西大宮バイパスNo.4遺跡（9）では、栃木県高原山産と推定される黒曜石製の槍先形尖頭器と未製品が、直径1.5mの範囲から7点、その北東約2mの地点からも1点が見つかっている。ほかの石器群からは隔たっており、単独の埋置遺構（デボ）と考えられる。そのほかにも大丸山遺跡（73）からは、撲糸文を横位施文した多縄文系の土器が出土しており、縄文時代の開始段階から人々が活動していたことがうかがわれる。

早期の遺跡では、大丸山遺跡（73）で撲糸文系と押型文系土器群が、西大宮バイパスNo.4遺跡（9）で撲糸文系・沈線文系・押型文系土器群の良好な資料が出土しているが、遺跡の分布が希薄で、かつ住居跡も認められないことから、遊動性が高かったものと推定される。

早期末の本遺跡周辺では、古入間湾の海進とともに地点貝塚が形成されている。その中には、学史的にも貴重な調査が行われたものが見られる。

昭和3年（1928）には、大山史前学研究所による縄文土器編年研究目的の調査として、五味戸貝塚（74）が調査された。出土した資料から「指扇式」が提唱されたが、支持は広がらず、その後「茅山式」に含められるようになった。

昭和45年（1970）には、榎木金之丞・佐藤達夫の両氏により、縄文海進の上限を明らかにする目的で平方貝塚（29）が調査された。貝層は淡水産のヤマトシジミを主体とし、鹹水産のハイガイ、マガキ、ハマグリなどが含まれており、出土土器は茅山上層式と花積下層式をつなぐものとして注目された。早期末の地点貝塚としては、薬師耕地前遺跡（26）があり、住居跡の覆土から貝ブロックが検出されている。また、殿山遺跡（44）や稻荷台遺跡（27）では、この時期の住居跡が検出されており、定住的な集落を形成し始めた様子がう



第2図 周辺の遺跡（旧石器・縄文）

かがわれる。しかし、西大宮バイパスNo.5遺跡(7)やB-53遺跡(64)、下加遺跡(68)などのように炉穴のみを検出する遺跡も多い。

この地域の貝塚形成は、前期前半にも続くものの、大宮台地東部の綾瀬川流域や荒川対岸の武藏野台地に比べると遺跡数は極端に少なく、貝塚の形成は停滞してしまう。しかし、その一方で比較的規模の大きな集落の展開も見られるようになる。箕輪II遺跡(35)では、花積下層式期の住居跡、琵琶島貝塚(70)では、関山式期の住居跡2軒、稻荷台遺跡(27)と宿北II遺跡(34)でも関山式期の住居跡が調査されている。

前期の後半には、氷川遺跡(56)で関山式期に加えて諸磯a式期の住居跡が5軒、上加遺跡(65)と指扇下戸遺跡(72)では、諸磯b式期の住居跡が検出されている。また、荒川低地を隔てた対岸の鷺森遺跡(118)では、諸磯a・b式期の土壙墓群を伴う集落跡が調査されている。しかし、前期終末から中期初頭になると、在家遺跡(38)や高木道下遺跡(5)で住居跡が検出されているが、台地上での活動の痕跡はやや希薄となる。

中期中葉になると、関東地方の他地域と同じように、遺跡数や住居跡軒数の増加が顕著となる。勝坂式期から加曽利EⅢ式期の住居跡が40軒調査された鴨川流域の下加遺跡(68)が、周辺では最も規模の大きな集落と考えられる。そのほかに雨沼I遺跡(30)では、同時期の住居跡が8軒、西大宮バイパスNo.4遺跡(9)では、勝坂式期の住居跡、指扇下戸遺跡(72)では、同時期の土壙、前戸崎遺跡(61)と白鍬宮腰遺跡(103)では、加曽利EⅢ式期の住居跡がそれぞれ調査されている。今回報告する高木氷川遺跡(2)でも、加曽利EⅢ式期の住居跡4軒と土壙3基が調査されている。

中期後葉から後期前葉にかけては、この地域に遺跡が集中する時期で、特徴的な柄鏡形住居跡が数多く検出されている。B-53号遺跡(64)では、中期の住居跡と後期初頭の柄鏡形住居跡が検出さ

れ、包含層から特異な瓢形注口土器が出土した。西大宮バイパスNo.5遺跡(7)では、後期初頭の柄鏡形住居跡2軒とともに石鏡の製作工程を復元できる良好な資料が出土している。下加遺跡(68)では、大型石棒がまとまって出土した住居跡を含む加曽利E式終末期から堀之内式期にかけての柄鏡形住居跡10軒が調査されている。

後期前葉の集落跡は、ほかにも多く調査されている。指扇下戸遺跡(72)では柄鏡形住居跡を含む集落、天沼遺跡(28)では、住居跡・集石・土壙等が検出されている。区画整理事業地内でも、低地部から豊富な漆製品が出土した大木戸遺跡(6)をはじめ、高木稻荷前遺跡(1)や高木道下遺跡(5)でも柄鏡形住居跡が検出されている。

後期後半から晩期にかけては遺跡数が激減してしまうが、一つ一つの遺跡(集落)が拠点的な性格を帯びるようになる。代表的な遺跡として、奈良瀬戸遺跡(53)が挙げられる。また、在家遺跡(38)では、晩期終末期の大洞A式・千綱式期の住居跡と土壙が検出されている。

弥生時代

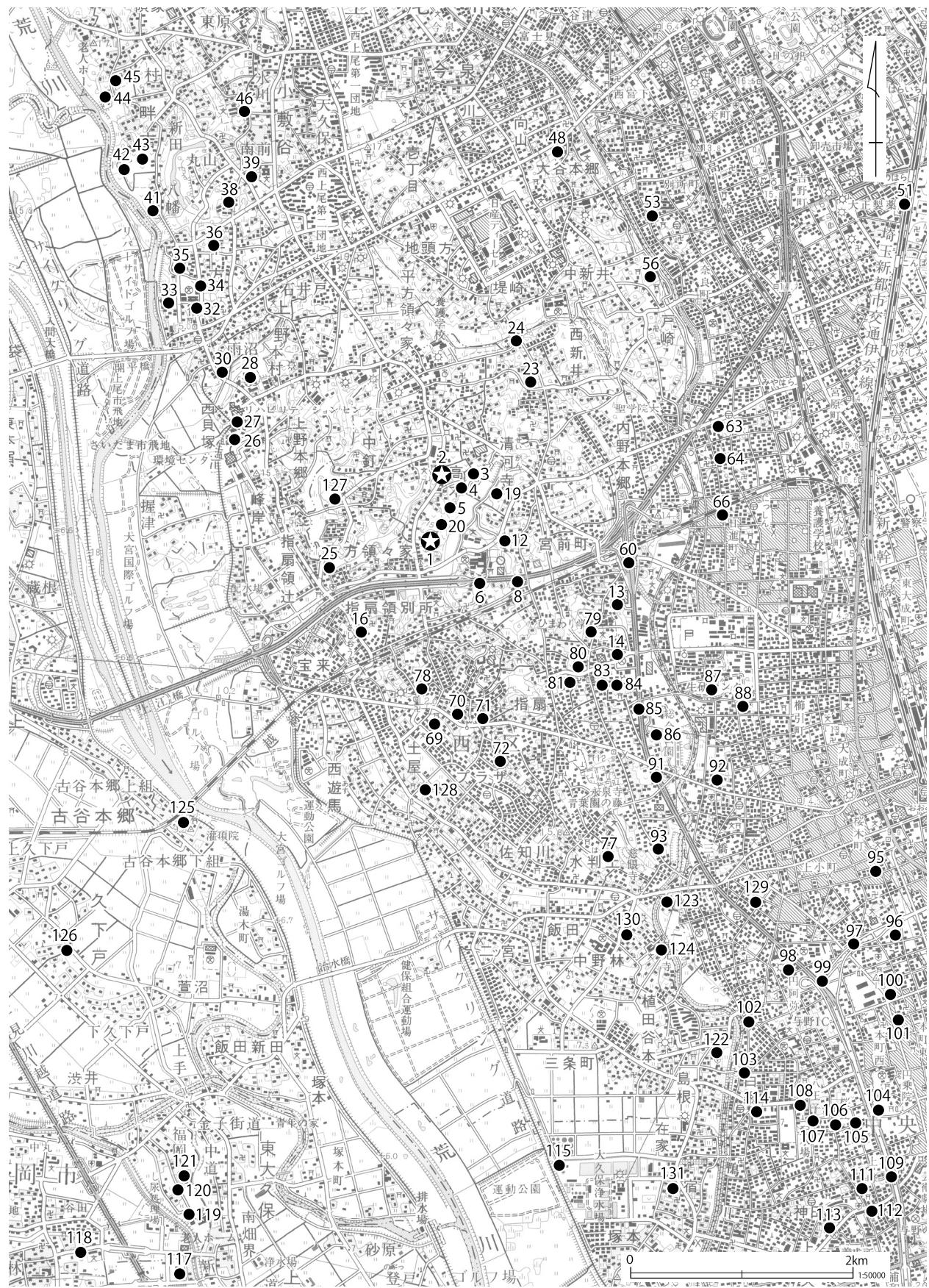
周辺地域における弥生時代の遺跡は少ない。中期は、内道西遺跡(111)と諏訪坂遺跡(112)から、住居跡が検出されている。

続く後期初頭から前半の遺跡は、大宮台地周辺では知られていない。後期後半には、自然堤防上の土屋下遺跡(128)で住居跡49軒・方形周溝墓1基・環濠などが検出され、大規模な集落が形成されている。さらに、下流域の大久保条里遺跡(115)に隣接する神田天神後遺跡・外東遺跡でも、後期の住居跡や方形周溝墓が検出されている。

対岸の伊佐島遺跡(117)では、後期の住居跡と断面V字状の大溝が検出されている。

古墳時代

弥生時代終末期から古墳時代前期にかけて、大宮台地西縁の荒川低地に面する台地上には、雲雀遺跡(45)・畔吉遺跡(42)・稻荷台遺跡(27)な



第3図 周辺の遺跡（弥生以降）

第1表 周辺の遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	S:高木稻荷前	旧、繩、近	44	A:殿山 殿山古墳	旧、繩、古
2	S:高木氷川	繩、近	45	A:雲雀	繩、古、近
3	S:高木小明	繩、古	46	A:西通 I	繩、中、近
4	S:高木道下北	繩、中	47	A:向山	繩
5	S:高木道下	旧、繩、中、近	48	A:後耕地	繩、中、近
6	S:大木戸 (西大宮BPNo6)	旧、繩、弥、古、平、 中、近	49	S: B-37号	繩
7	S:西大宮BPNo5	旧、繩	50	S: B-44号	旧、繩
8	S:大塚古墳	古	51	S:三番耕地	繩、古、近
9	S:西大宮BPNo4	旧、繩	52	S:山王	繩
10	S:西大宮BPNo2	旧、繩	53	S:奈良瀬戸	繩、平
11	S:西大宮BPNo1	旧、繩	54	S: B-43号	繩
12	S:清河寺前原	旧、繩、古	55	S: B-45号	繩
13	S: C-16号	繩、古	56	S:氷川	繩、奈、平
14	S: C-66号	繩、平	57	S: B-46号	繩
15	S: C-39号	旧、繩	58	S: B-47号	繩
16	S:滝沼	繩、弥、古、平	59	S:西谷裏	繩
17	S: C-98号	繩	60	S:宮前	繩、平
18	S:清河寺丸山	繩	61	A:前戸崎	旧、繩
19	S:清河寺西原	繩、古	62	S:日進西谷	繩
20	S:福田館跡	近	63	S: B-50号	繩、平
21	S:高木稻荷下	繩	64	S: B-53号	旧、繩、古
22	S: C-23号	繩	65	S:上加	繩
23	S: C-92号	繩、古、平	66	S: B-55号	繩、古
24	S: C-93号	繩、古、平	67	S: B-56号	繩
25	S:辻	繩、古	68	S:下加	旧、繩
26	A:薬師耕地前	繩、弥、古	69	S:琵琶島古墳	繩、古、近
27	A:稻荷台	繩、弥、古、奈、平	70	S:琵琶島貝塚	繩、古
28	A:天沼	旧、繩、古、中、近	71	S: C-73号	繩、古
29	A:平方貝塚	繩	72	S:指扇下戸	繩、中
30	A:雨沼 I	旧、繩、弥、古、中、 近	73	S:大丸山	繩
31	A:東谷	繩	74	S:五味貝戸貝塚	繩
32	A:宿北 I	繩、古	75	S: B-92号	繩
33	A:箕輪 I	旧、繩、中、近	76	S:青葉園東	繩
34	A:宿北 II	繩、古、中、近	77	S:原	旧、繩、弥、古、奈、 平
35	A:箕輪 II	繩、古	78	S: C-45号	時期不明、塚
36	A:小塚	古	79	S: C-67号	繩、平
37	A:小塚 II	旧、繩	80	S: C-65号	繩、平
38	A:在家	旧、繩、古、中、近	81	S: C-64号	繩、平
39	A:小林	繩、平	82	S: C-63号	繩
40	A:平方丸山	繩	83	S: C-62号	繩、古
41	A:畔吉貝塚	繩、古	84	S: C-15号	繩、古、平
42	A:畔吉	旧、繩、古	85	S:八幡耕地	繩、古
43	A:八幡 (江川山古墳)	繩、古	86	S: C-12号	繩、古、平
			87	S:下加貝塚	繩、弥、古

※ S: さいたま市 A: 上尾市 K: 川越市 F: ふじみ野市

どの大規模な集落が出現する。それに対応するよう、薬師耕地前遺跡（26）・殿山遺跡（44）では方形周溝墓群が造営されている。また地域的統合の進展に伴って、江川山古墳（43）や殿山古墳（44）などの前・中期の古墳が出現している。

薬師耕地前遺跡では、古墳時代前期の住居跡と7基の方形周溝墓が検出されている。方形周溝墓の主体部にはガラス小玉・管玉・鉄劍等が副葬されており、周溝からは底部穿孔された壺形土器も出土している。薬師耕地前遺跡の北側に近接する稻荷台遺跡では、古墳時代前期の住居跡が多数検出されている。

荒川低地を眼下に望む殿山遺跡では、方形周溝墓が4基検出され、隣接して直径約40mの円墳である殿山古墳が所在する。殿山古墳の周溝からは、壺・埴などの土器と鉄鎌が出土し、5世紀初頭の築造とされ、方形周溝墓から古墳への変遷過程をうかがうことができる。

近隣には、2面の倭製鏡を出土した前期古墳の江川山古墳が所在し、威信財の授受に大和王権との結びつきの強さが推定されている。

同じく大木戸遺跡（6）でも、弥生時代終末期から古墳出現期にかけて、4基の方形周溝墓が営まれ、周囲には同時期の住居跡が展開している。

中期から後期にかけて再び遺跡数が減少し、集落の形成はやや低調となる。周辺では、高木稻荷前遺跡（1）をはじめ、雨宮Ⅰ遺跡（30）・宿北Ⅱ遺跡（34）・天沼遺跡（28）など、6世紀末から7世紀にかけて、数軒程度で構成された小規模な集落が内陸部に点在する傾向が見られる。

古墳群の分布は、荒川と鴨川との合流点付近に集中し、植水古墳群・側ヶ谷戸古墳群・大久保古墳群など、河川沿いに連続して営まれている。

奈良・平安時代

根切遺跡（122）は旧入間川の流路によって形

成された自然堤防上に立地し、奈良・平安時代の住居跡や掘立柱建物跡のほか、大規模な運河遺構なども検出されている。周辺の宿宮前遺跡（131）からは、「川津」と墨書された土器が住居跡から出土しており、付近に足立郡の郡津が存在した可能性を示している。

さらに、根切遺跡の南西側の低地に広がる大久保条里遺跡（115）では、平安時代から中世の地割に伴う溝跡が多数検出されている。

中・近世

中世の様相については不明な点が多いが、中世開基と伝わる寺院が点在している。中でも清河寺は室町時代初頭に建立された古刹で、足利基氏開基とされ、足利氏や大田氏関係の文書が残されている。一方、高木稻荷前遺跡の南西側に所在する法願寺跡と伝えられる高木本地蔵堂には、鎌倉時代から室町時代にかけての板碑のほか、寛文四年（1664）銘の鰐口が所蔵されている。また、高木氷川遺跡の東側にある阿弥陀寺も、中世開基と口伝されている。高木道下北遺跡（4）では、室町時代の屋敷地を構成する遺構群が検出され、出土した鍋鉄型の存在から、近隣での鉄製の日常雑器類の生産が想定されている。

当地は、江戸時代には差扇領に属し、高木稻荷前遺跡は法願寺村、高木氷川遺跡は木下村にそれぞれあたっている。元和九年（1623）から元禄二年（1689）までは旗本山内領、同年以降は上知され幕府領となったが、法願寺村は幕末まで幕府領であったのに対し、木下村は宝永二年（1705）、旗本戸田中務少輔の領地として与えられ、幕末まで同家が知行した。

事業地内の各遺跡では、江戸時代の区画溝や掘立柱建物跡、井戸等が検出されており、土地利用の実態が明らかにされつつある。在地支配の拠点としての福田館跡（20）との関連が注目される。

III 遺跡の概要

1. 事業地内の遺跡の概要

大宮西部特定土地区画整理事業は、独立行政法人都市再生機構により、平成10年度から事業が開始された。大宮西部地区は、JR川越線に沿った一帯の秩序ある発展のため、多様な都市機能をもつ新市街地として位置づけられている。東京都心から北西に約30km、大宮の中心部からは約4kmに位置する約115haの地区である。

国道16号西大宮バイパスやJR川越線西大宮駅の開設により、便利さや快適性を備えた魅力ある都市機能と、豊かな自然環境との調和を目指したまちづくりが進められている。

事業地内の遺跡

当事業地内の中央を貫流する滻沼川を境として、右岸には高木氷川・高木小明・高木道下北・高木道下・高木稻荷下・福田館跡・高木稻荷前の7遺跡、左岸には清河寺西原・清河寺丸山・清河寺前原・C-98号・大木戸・西大宮バイパスNo.5・大塚古墳の7遺跡、合計14箇所の遺跡の所在が確認されている（第4図）。いずれも滻沼川、もしくはそれに注ぐ小支谷に面して立地している。

これまでに、当事業団が本事業に伴って調査した遺跡は、高木稻荷前（本書）・高木氷川（本書）・清河寺前原（事業団報告書366集）・大木戸（同355・405集）・高木道下（同406集）・高木道下北（同406集）の6遺跡である。

なお、大木戸遺跡に関しては、まだ未報告分があり、順次、報告書を刊行する予定である。

調査の方法とグリッドの設定

大宮西部特定土地区画整理事業地内の発掘調査は、平成12年度の大木戸遺跡を端緒に、当事業団が継続的に調査を実施してきた。

まず調査にあたり、事業地内全体を覆うようにグリッドの設定を行った。グリッドは、日本測地系（旧測地系）のX = -7500.000m、Y = -

23400.000mを基準（A1-A1グリッド）に、100×100mの大グリッドを設定し、北から南にA・B・C…、西から東に1・2・3…として設定した。

さらに、大グリッドの中を10×10mの中グリッド（基本グリッド）とし、北から南にA～J、西から東に1～10とし、100区画に分割し、事業地内における相対的な位置の把握に努めた。

周辺の地形と基本土層

事業地内の地形は、滻沼川によって樹枝状に開析された台地部と低地部（宝来谷底平野）が織り成す、起伏に富んだ景観を呈している。

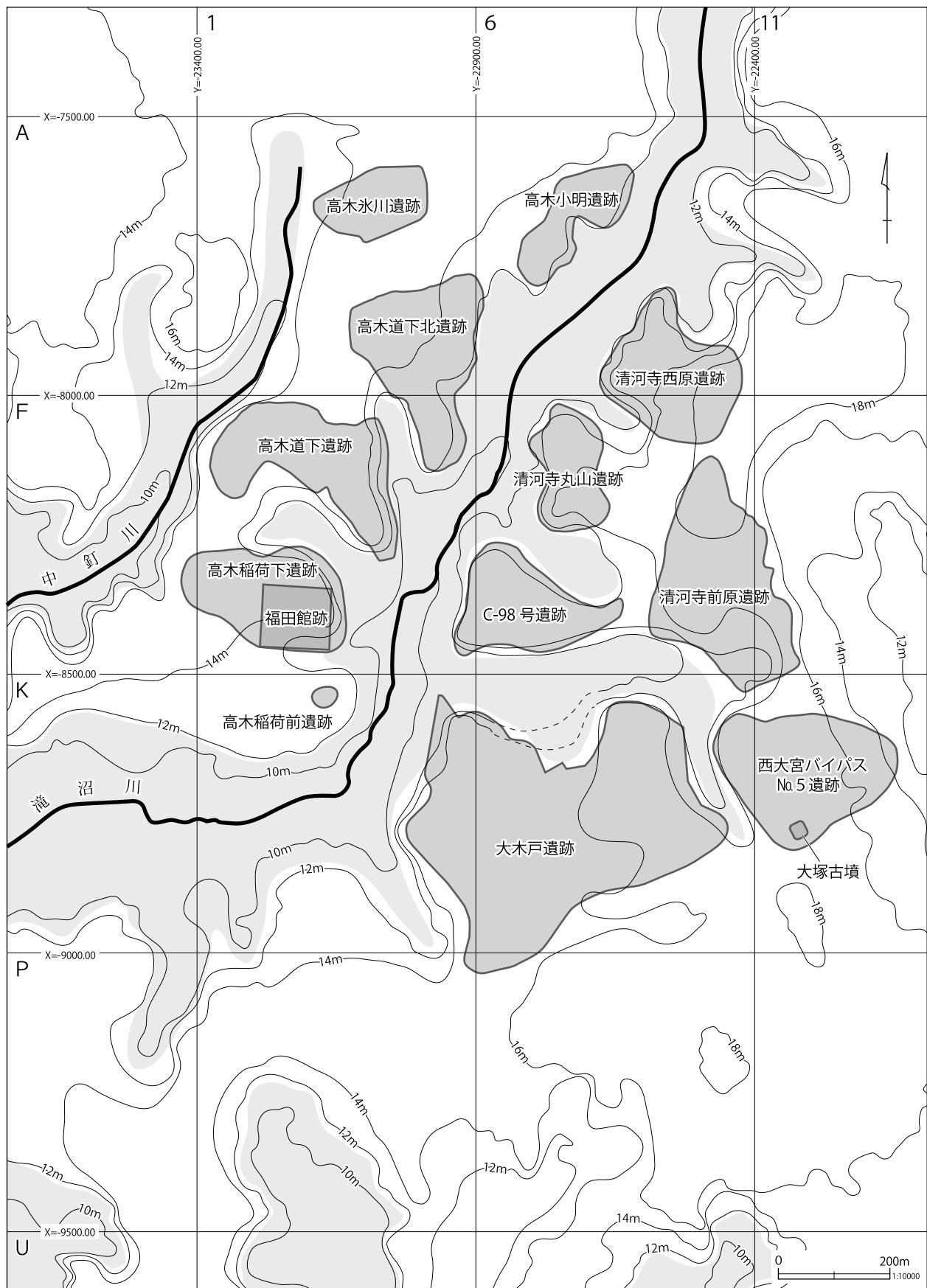
現地表面から、確認面としたローム面までは20～30cmと浅く、腐食土壌はあまり発達していない。確認面の標高は、右岸の高木氷川遺跡が約14.3m、高木道下北遺跡が約13.5m、高木道下遺跡が約15m、高木稻荷前遺跡が約14.8m、左岸の清河寺前原遺跡が約16m、大木戸遺跡が14～16mである。台地部と低地部の比高差は、4～5mである。

右岸の標高は、南側の高木稻荷前・高木道下遺跡の所在する台地先端部の方が高く、北側の中釤川の谷奥に向かって緩やかな勾配が見られる。それに対し、左岸は標高が全体に高く、台地上には広範囲にわたる平坦面を残している。

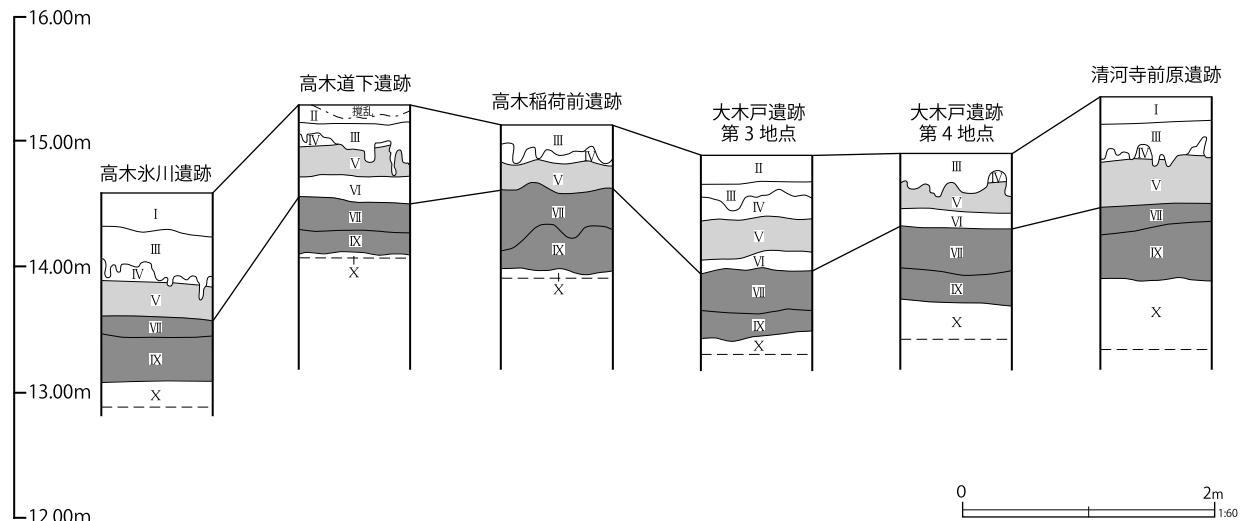
各遺跡の基本土層は、第5図のとおりである。立川ローム層は基本的には武藏野台地の標準層に対比が可能である。各遺跡の第Ⅲ層まではソフト化が進み、第1暗色帯に対比される第V層まで一部達している。第VII・IX層は立川ローム第2暗色帯に対比され、明瞭に分離できない地点も多い。

既往調査の概要

本事業に伴って調査された清河寺前原・大木戸・高木道下・高木道下北の各遺跡の概要は次のとおりである。



第4図 大宮西部特定土地区画整理事業地内の遺跡分布



第5図 基本土層

清河寺前原遺跡

清河寺前原遺跡は、滝沼川左岸のやや奥まった箇所に立地している。調査は、平成12年度から平成14年度にかけて、4次にわたって実施された（西井2009）。調査では、旧石器時代の石器集中18箇所、縄文時代早期の炉穴25基、後期の集石土壙1基・土壙5基、近世の掘立柱建物跡1棟・土壙76基・溝跡36条が検出された。

旧石器時代では4時期の文化層が検出された。第1文化層は槍先形尖頭器を主体とする石器群（立川ローム第Ⅲ層）、第2文化層はナイフ形石器終末期の石器群（同第Ⅲ～Ⅳ層）、第3文化層は岩宿Ⅱ期の石器群（同第Ⅳ層）、第4文化層は後期旧石器時代前半の石器群（同第Ⅶ～Ⅸ層）である。

第4文化層では、径15mの範囲に11箇所の石器集中が密集する環状ブロック群が検出された。出土した1,400点の石器の内1,000点が良質な黒曜石である。関東地方において、黒曜石原産地との関係を検討する上で貴重な資料である。

縄文時代早期の炉穴群は、台地の南西側縁辺部に集中して25基検出されている。

近世は、第2地点で掘立柱建物跡・溝跡・土壙群と共に、整然とした区画溝を伴う畑跡が検出され、土地利用の一端が明らかにされた。

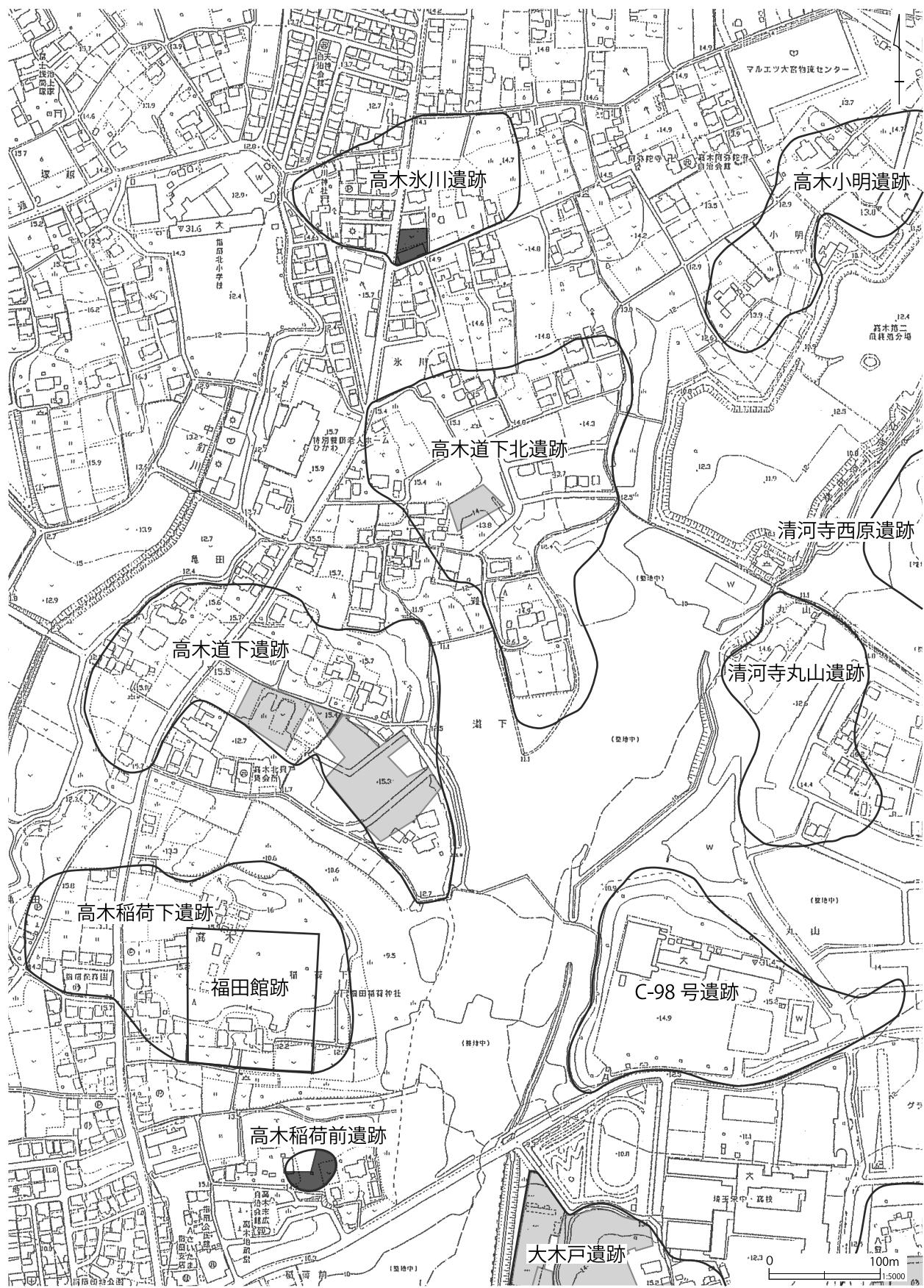
大木戸遺跡

大木戸遺跡は滝沼川左岸、清河寺前原遺跡の南側に位置する。遺跡の広がりは、南北480m、東西600mの広範囲に及んでいる。昭和61年の大宮市遺跡調査会（当時）による西大宮バイパスNo.6遺跡の調査（第1次調査）が最初で、平成12年から平成27年まで、21次にわたって実施された。

既報告分（第2～5次調査：西井・鈴木2008、第7～9次調査：新屋ほか2013）の調査では、旧石器時代の石器集中7箇所、縄文時代早期の炉穴23基、中期末～後期の住居跡46軒・掘立柱建物跡3棟・集石土壙13基・土壙222基、弥生時代後期から古墳時代初頭の住居跡19軒・方形周溝墓4基・土壙1基、中・近世の掘立柱建物跡28棟・土壙549基・溝跡150条・井戸跡7基が検出された。

旧石器時代では、清河寺前原遺跡と同様に3時期の文化層が検出された。第1文化層は砂川期の石器群（立川ローム第Ⅲ層）、第2文化層は岩宿Ⅱ期の石器群（同第Ⅳ層）、第3文化層は後期旧石器時代前半の石器群（同第Ⅶ～Ⅸ層）である。

縄文時代の遺構は、早期の炉穴、中期末葉から後期前半の住居跡・掘立柱建物跡・集石土壙・土壙が調査区全体に分散している。柄鏡形住居跡の中には、敷石住居跡が1軒含まれている。第7～



第6図 遺跡調査地点位置図（1）

9次調査では、斜面の包含層より早期から後期の夥しい量の土器や石器が出土した。

弥生時代終末から古墳時代初頭では、盛土を残す4基の方形周溝墓が調査され、埋葬施設から鉄釧やガラス小玉などの副葬品が出土している。

このほかに未報告分（第6・10～21次調査）には、平成26・27年度にかけて実施された第18・20次調査で、低地部分から縄文時代後期の木組遺構や土壙などが検出され、木製品や漆製品などの有機質の遺物が数多く出土している（大谷2016）。

高木道下遺跡

高木道下遺跡（C-99号）は、滝沼川右岸の支谷に面した台地上に位置する。平成19・20年度に調査が実施され、旧石器時代の礫群2箇所、縄文時代の住居跡10軒・埋甕1基・炉穴1基・集石土壙3基・土壙60基、中世の井戸跡4基、近世の溝跡31条・土壙52基・ピット210基が検出された（福田ほか2013）。

旧石器時代では、立川ローム第Ⅲ・Ⅳ層に相当する層位から礫群2箇所が検出された。

縄文時代の遺構は、台地中央部から前期末の住居跡が単独で検出された。中期後半の住居跡5軒は、支谷に面する台地南側縁辺部に帶状に分布している。後期初頭から前葉の住居跡4軒は、台地南東端部の低地寄りに集中して検出された。いずれも柄鏡形住居跡である。

中・近世の遺構は、調査区全体に広く分布している。17世紀初頭の織部平向付・志野皿などの茶陶が含まれ、遺跡の性格を考える上で注目される。

高木道下北遺跡

高木道下北遺跡は、小支谷を隔て、高木道下遺跡の北東約200mの台地上に立地する。平成18年度に調査が実施され、中世末の竪穴状遺構1基・地下式壙3基・溝跡6条・井戸跡2基・土壙32基・ピット222基が検出された（福田ほか2013）。

遺物は15世紀後半から16世紀前半を中心とする青磁の破片・常滑焼の甕・古瀬戸や瀬戸美濃の天

目茶碗・灰釉小皿・折縁鉢・擂鉢などの陶磁器、かわらけ・焙烙などの在地産土器、石臼・砥石・板碑などの石製品、錢貨がある。

鋳造関連の遺構は検出されていないが、土壙から鍋の鋳型が出土しており、近傍での鉄製品生産をうかがわせるものとして注目される。

このほかに区画整理事業地内を横断する一般国道16号西大宮バイパスの建設工事に先立ち、路線内の4遺跡が大宮市遺跡調査会によって昭和58年度以降、平成5年度まで調査が実施されている。

調査された4遺跡のうち、事業地内には西大宮バイパスNo.5遺跡と現在、大木戸遺跡に名称変更された西大宮バイパスNo.6遺跡が所在している。

西大宮バイパスNo.5遺跡

滝沼川右岸に位置し、小支谷を隔てて大木戸遺跡の東側に対峙している。昭和60・62年度に調査が行われ、旧石器時代の石器集中箇所や炭化物集中箇所のほかに、縄文時代後期初頭の柄鏡形住居跡2軒、早期の炉穴15基、集石土壙3基、土壙49基、近世の溝跡8条が検出された（田代ほか1989）。

西大宮バイパスNo.6遺跡（大木戸遺跡）

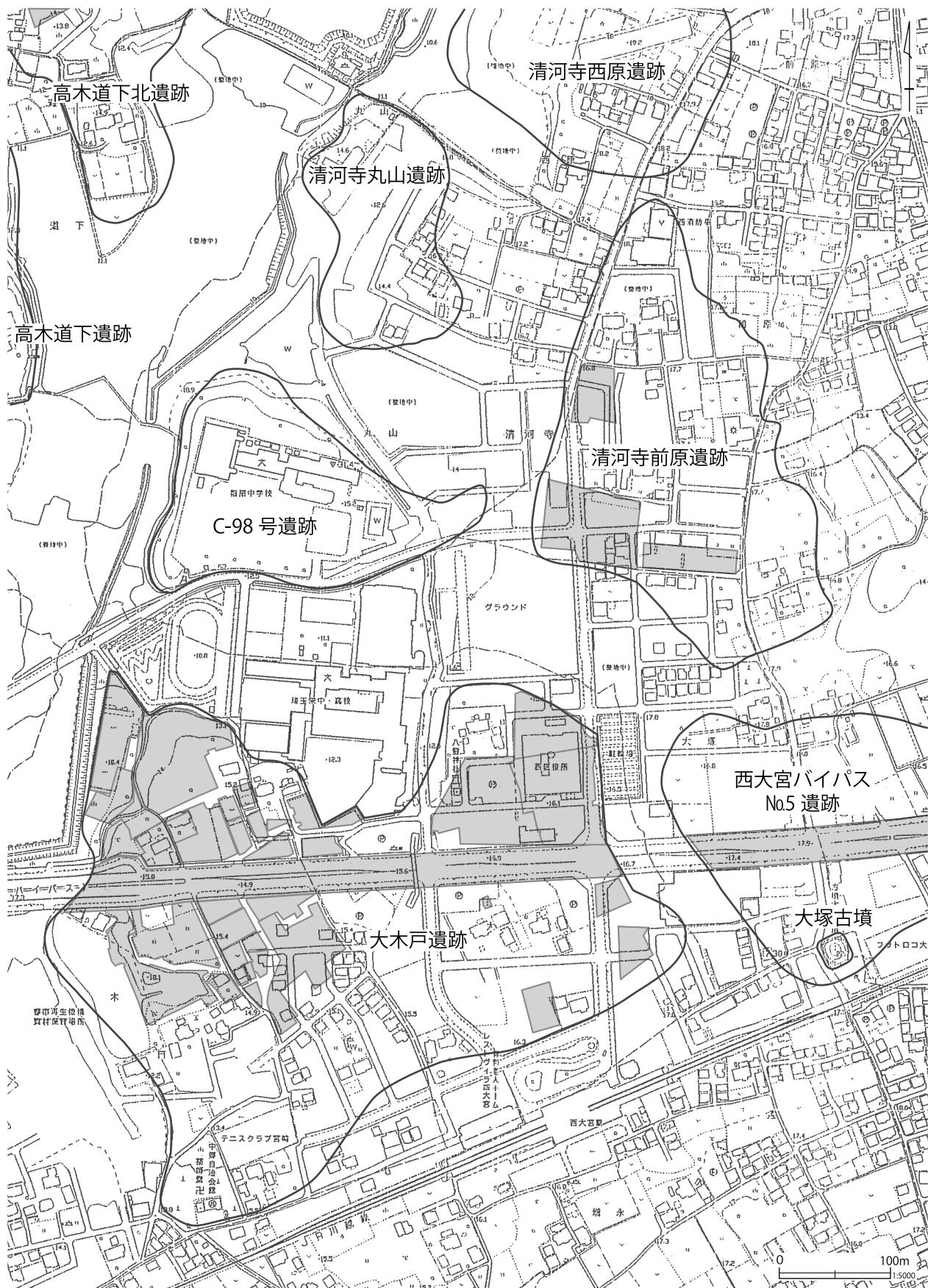
大木戸遺跡の中央部を東西に横断するように、昭和61・62年度、平成5年度と3箇年にわたって断続的に調査が実施された（田代ほか1995）。

旧石器時代では、遺跡の東側と西側の台地縁辺部から石器ブロックと礫群が検出された。第Ⅲ層から第Ⅴ層に3時期の文化層が確認され、ナイフ形石器などが出土した。

縄文時代では、中期後半の住居跡3軒、後期中葉の住居跡1軒、早期の炉穴4基、土壙144基が検出された。後期中葉の住居跡は、方形プランのもので、注口土器が出土している。

このほかに弥生時代後期の住居跡1軒、近世の掘立柱建物跡4棟・土壙23基・柵列2列・溝跡16条・竪穴状遺構・ピット群が検出された。

以上、既往調査の概要について記してきた。こ



第7図 遺跡調査地点位置図（2）

れら以外にも事業地内には遺跡の所在が確認されていることから、その概要について列記する。

高木小明遺跡

西区大字高木に所在する。現況は畠である。縄文時代、古墳時代後期の集落跡で、縄文土器・土師器片が採集されている。

高木稲荷下遺跡

西区大字高木に所在する。現況は山林・畠である。縄文時代の集落跡で、縄文時代早期の炉穴が発見されている。

福田館跡

西区大字高木に所在する。高木稲荷下遺跡に包括され、福田稲荷神社の社叢の中に位置する。

『新編武蔵風土記稿』によると、福田左衛門惟康が築いた江戸初期の陣屋跡と伝えられている。

清河寺西原遺跡

西区大字清河寺に所在する。現況は山林・畠・

宅地で、縄文土器・土師器が採集されている。縄文時代、古墳時代の集落跡と考えられる。

清河寺丸山遺跡

西区大字清河寺に所在する。現況は山林・畠である。縄文時代の集落跡と考えられる。

C-98号遺跡

西区大字清河寺に所在する。現況は畠・宅地である。縄文時代早期の土器片が採集されている。

大塚古墳

大塚古墳は、西大宮バイパスNo.5遺跡内に所在し、西大宮駅の北東約350mに位置する。昭和33年に埼玉県指定史跡に指定されている。墳丘の規模は、底部で21×25mの方形、墳頂は一辺9.5mの正方形、高さ4mである。出土遺物などの伝承はない。かつて、周辺には数基の円墳が群集していたが、現在は破壊されてしまい所在不明となっている。

2. 高木稲荷前遺跡・高木氷川遺跡の概要

高木稲荷前遺跡

高木稲荷前遺跡は、扇通り線の北側、標高約15mの小高い台地上に位置する。遺跡の広がりは、東西約500m、南北約300mの狭い範囲と推定されている。今回の調査地点は、遺跡の南半部にあっており、調査面積は1,359m²である。

今回の調査により、縄文時代後期初頭の住居跡2軒、古墳時代後期終末の住居跡2軒、近世の溝跡6条・土壙38基・ピット44基が検出された。

縄文時代の住居跡は、調査区東側から2軒が重複した状態で検出された。第2号住居跡は、炉跡が大きく壊されていたが、円形に配列された柱穴や埋甕の位置から、南に張り出し部を備えた柄鏡形住居跡であると確認された。第4号住居跡は、東に張り出し部を備える柄鏡形住居跡で、連結部と張り出し部先端の2箇所に埋甕が埋設されていた。

古墳時代の住居跡は2軒検出された。第1号住

居跡は、北壁の中央にカマドを設置した一辺約5.6mの住居跡である。カマドの残りは良くなかったが、袖部の芯材として土師器の長胴甕が用いられていた。遺物は、土師器壊・鉢・甕、須恵器甕が出土し、7世紀中葉頃に位置づけられる。第3号住居跡は、カマドの一部を検出したにすぎないが、第1号住居跡とほぼ同時期のものであろう。

近世の遺構は、溝跡と土壙・ピットが検出された。溝跡は、近世以降に区画等の目的で掘削されたものと推定される。土壙は遺物が少なく、性格や時期については判然としなかった。

出土遺物には、陶磁器、土製品、石製品、鉄製品、錢貨がある。

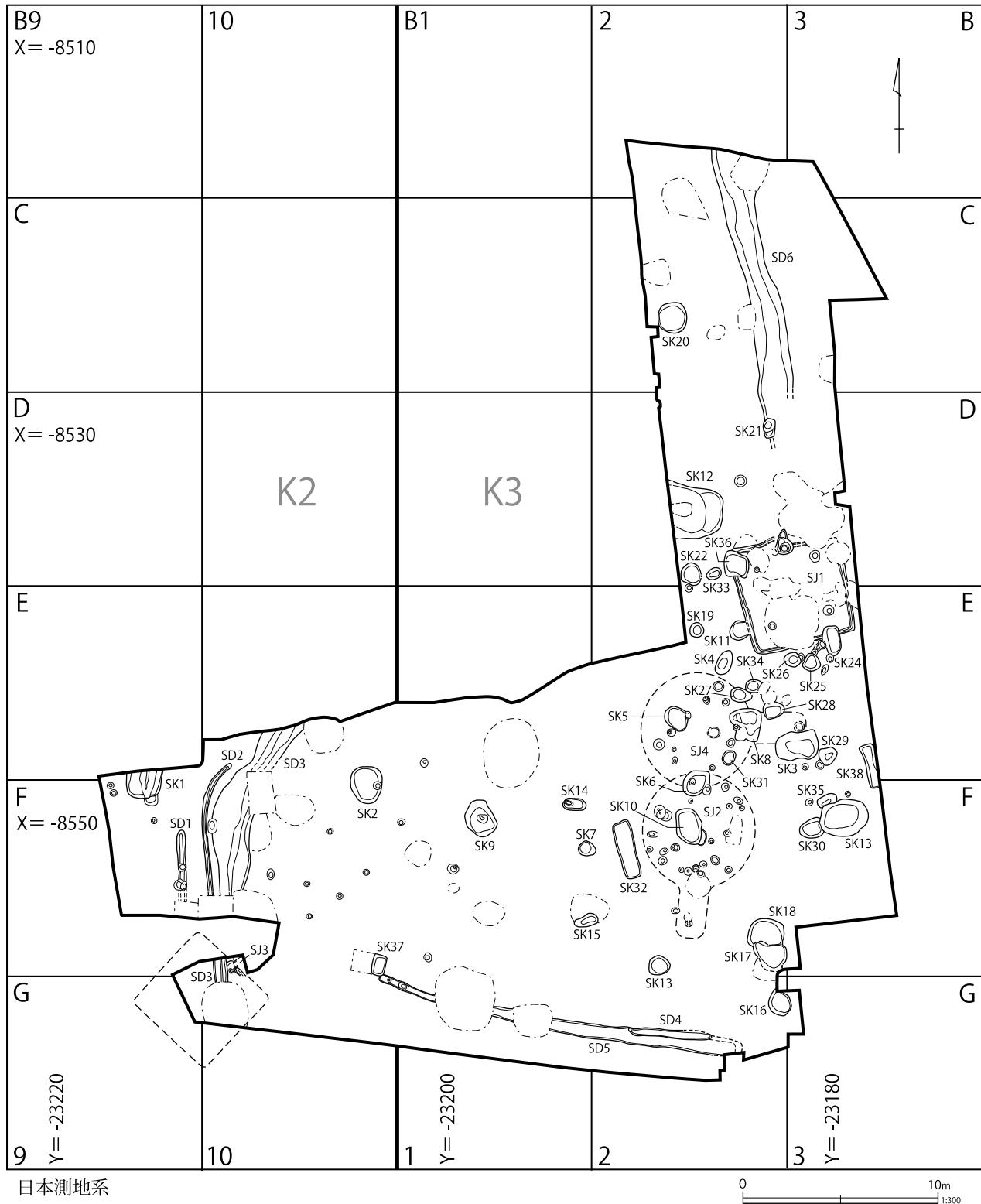
高木氷川遺跡

高木氷川遺跡は、事業地内の北西部に位置し、今回の調査地点は、事業地内全体を網羅する大グリッド（日本測地系）のB3・4、C3・4グリッドにあたり、調査面積は559m²である。

今回の調査により、縄文時代中期の住居跡4軒・土壙3基、近世の土壙41基・ピット4基が検出された。

縄文時代の住居跡は、調査区の南側中央と北西

隅、南東隅の3箇所から検出された。第1号住居跡は、土器片囲い炉を設け、主柱穴を台形に配した小型の住居跡である。第3号住居跡は、床面に地床炉を設け、壁際に4本の柱穴を配していた。



第8図 高木稻荷前遺跡全体図

第2号住居跡と第4号住居跡は、調査区の隅から検出され、一部分の調査に終始したが、覆土中からは土器や石器がまとまって出土した。

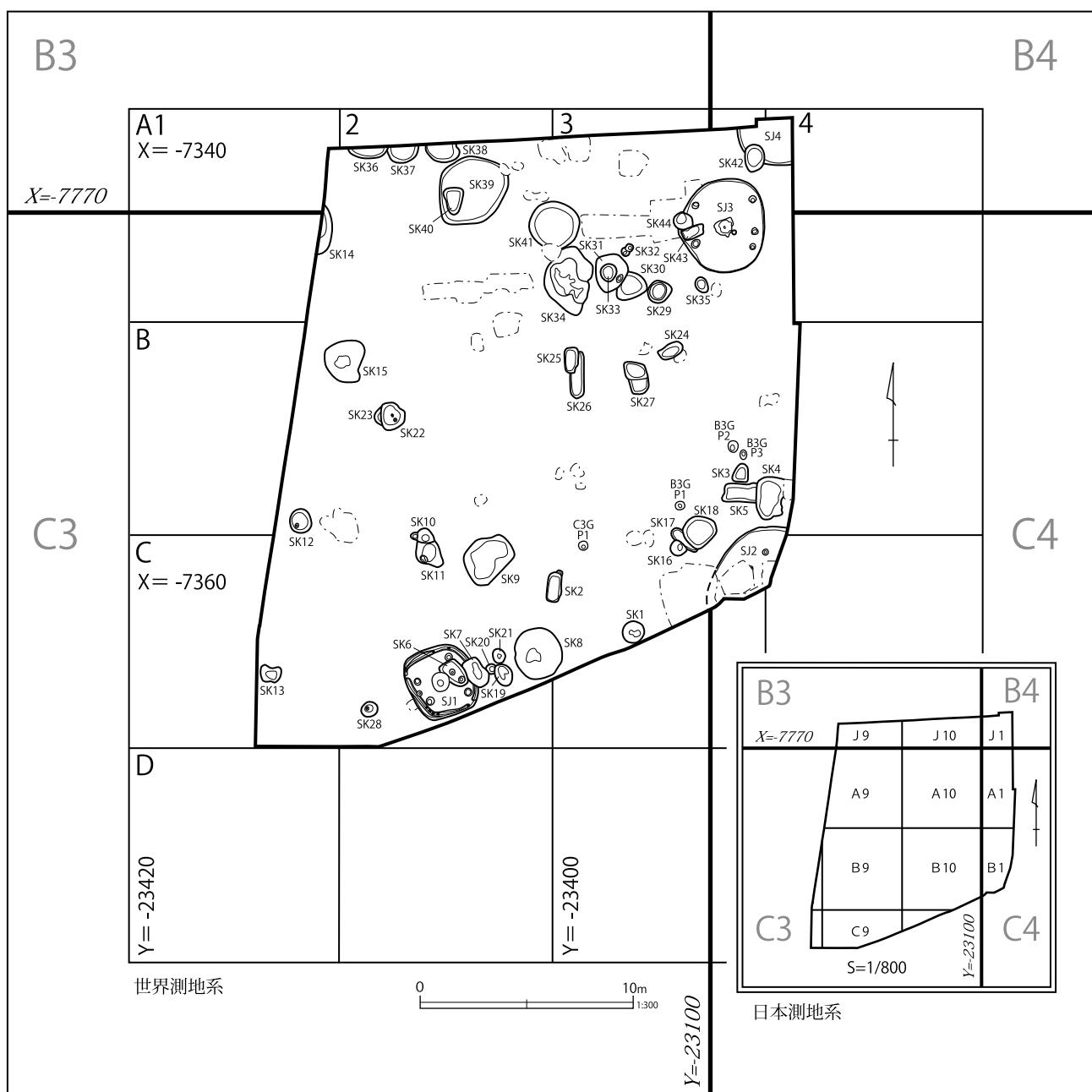
住居跡の時期は出土土器の特徴から、中期後半の加曾利E Ⅲ式期に位置づけられる。

縄文時代の土壙は、第3号住居跡の西側から見つかった。円筒形の掘り込みの第29・33号土壙は、貯蔵穴と考えられる。時期は、住居跡と同時期の中期後半と考えられる。

近世の遺構は、土壙41基・ピット4基が検出さ

れている。遺物を伴うものは少なかったが、第8号土壙からは、陶器擂鉢の破片が出土した。18世紀後半から19世紀前半の製品であり、遺構の年代の一端を知ることができる。

なお、今回の調査地点の西側約80mには、冰川神社が鎮座しているが、「高木」の地名の起こりは、明治8年（1875）に木下村・阿弥陀寺村・法願寺村・北野貝戸村の四村が合併した際、木下村にあった冰川神社の神木が天に向かって高く伸びていたことから名づけられたといわれている。



第9図 高木氷川遺跡全体図

IV 高木稻荷前遺跡の調査

1. 繩文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第2号住居跡（第10・11図）

調査区の東側中央、K 3-E・F 2グリッドに位置する。北側に第4号住居跡が隣接し、第6・10号土壙によって壊されている。重複する第4号住居跡との前後関係については、覆土が削平されてしまったため、壁の掘り込みが浅く、土層断面による把握はできなかった。

柱穴や炉跡、埋甕の配置などから、南に張り出し部を備える柄鏡形住居跡と判断した。張り出し部の軸方向と炉跡の位置から推して、主軸方位N-7°-Eを指し、規模は主軸長約8.40m、主体部径約5.50mと推定される。

検出面からは19本の柱穴が検出された。壁に沿って柱穴を巡らす構造と想定され、柱穴の配置や規模からP 1～5・7・8・12・13・19の10本が主柱穴と考えられる。連結部にあたるP 6・15は、いわゆる対ピットであろう。このほかにも単独の柱穴が多く、建て替えの行われた可能性もある。

主体部中央の張り出し部寄りから、炉跡が検出された。第10号土壙によって、西半分が削平されているため、遺存状態は良好でない。長径0.86mの楕円形と推定される地床炉で、深さは0.22mである。覆土は焼土を多量に含む暗褐色土で、壁面から底面にかけて、被熱により赤色硬化していた。

埋甕は、張り出し部の先端と連結部の2箇所から検出された。張り出し部先端の埋甕1（1）は、深鉢形土器を正位に据え置いたもので、搅乱により周囲にも土器片が散乱していた。掘り込みは、径0.42m程の円形で、深さ0.38mである。土器との間には、にぶい黄褐色土が充填されていた。

埋甕2（6）は、連結部の炉跡寄りに埋設されていた。掘り込みは、径0.38m程の円形で、深さは0.18m、断面形は逆台形である。深鉢形土器の

胴部下半の破片が正位に据え置かれ、にぶい黄褐色土を主体に充填されていた。土器の上半部を欠損しているが、後世の削平によるものか、故意に打ち欠かれたものは判断できない。

本住居跡の所属時期は、後期初頭と考えられる。

第2号住居跡出土遺物

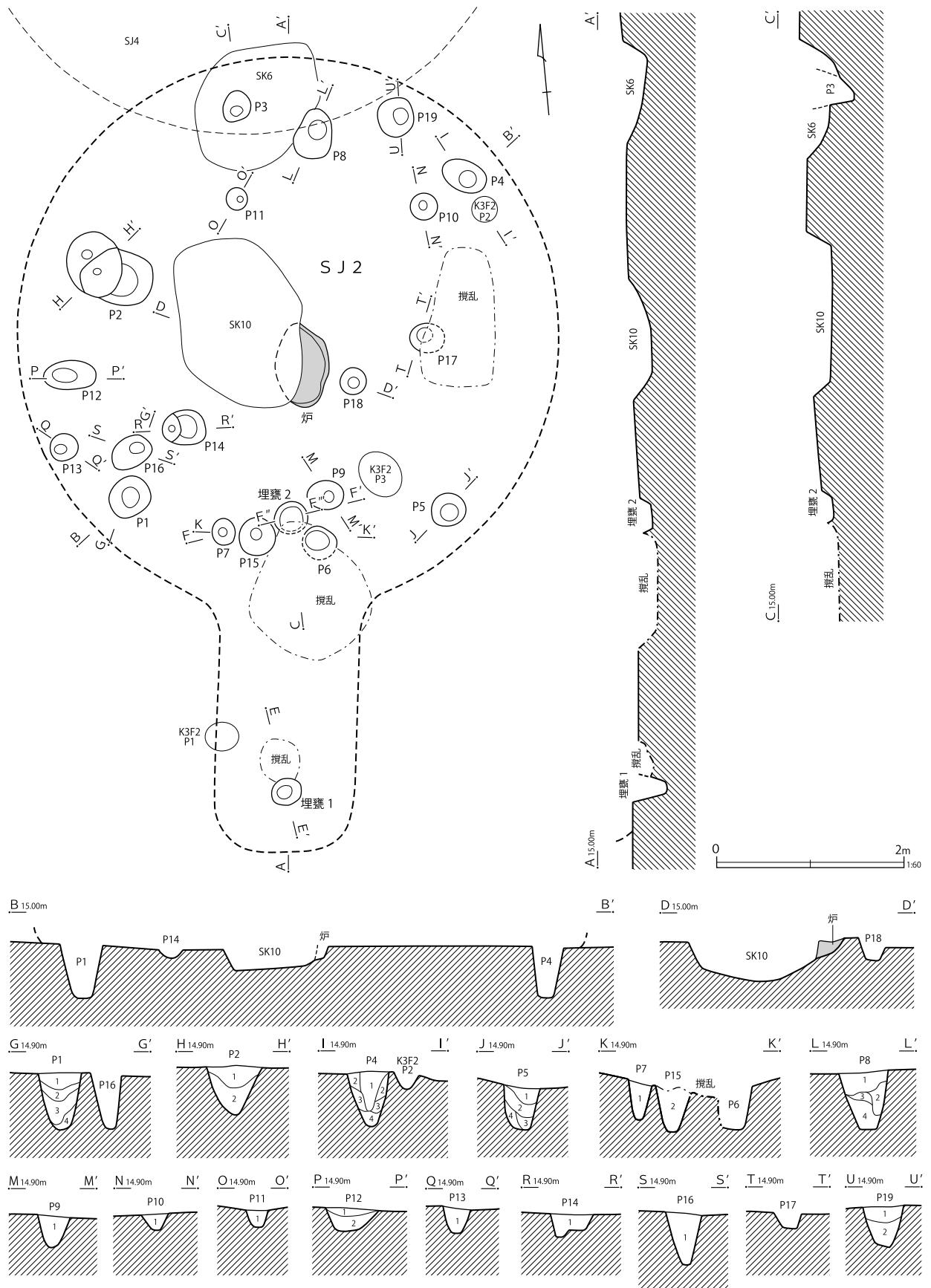
1～5は、埋甕1として調査時に取り上げたものである。1は埋甕1とした深鉢形土器、2～5は埋甕1の周囲から出土した別個体の破片である。6は埋甕2とした深鉢形土器で、7～27は住居跡検出面から出土した土器と石器である。

土器（第12・13図）

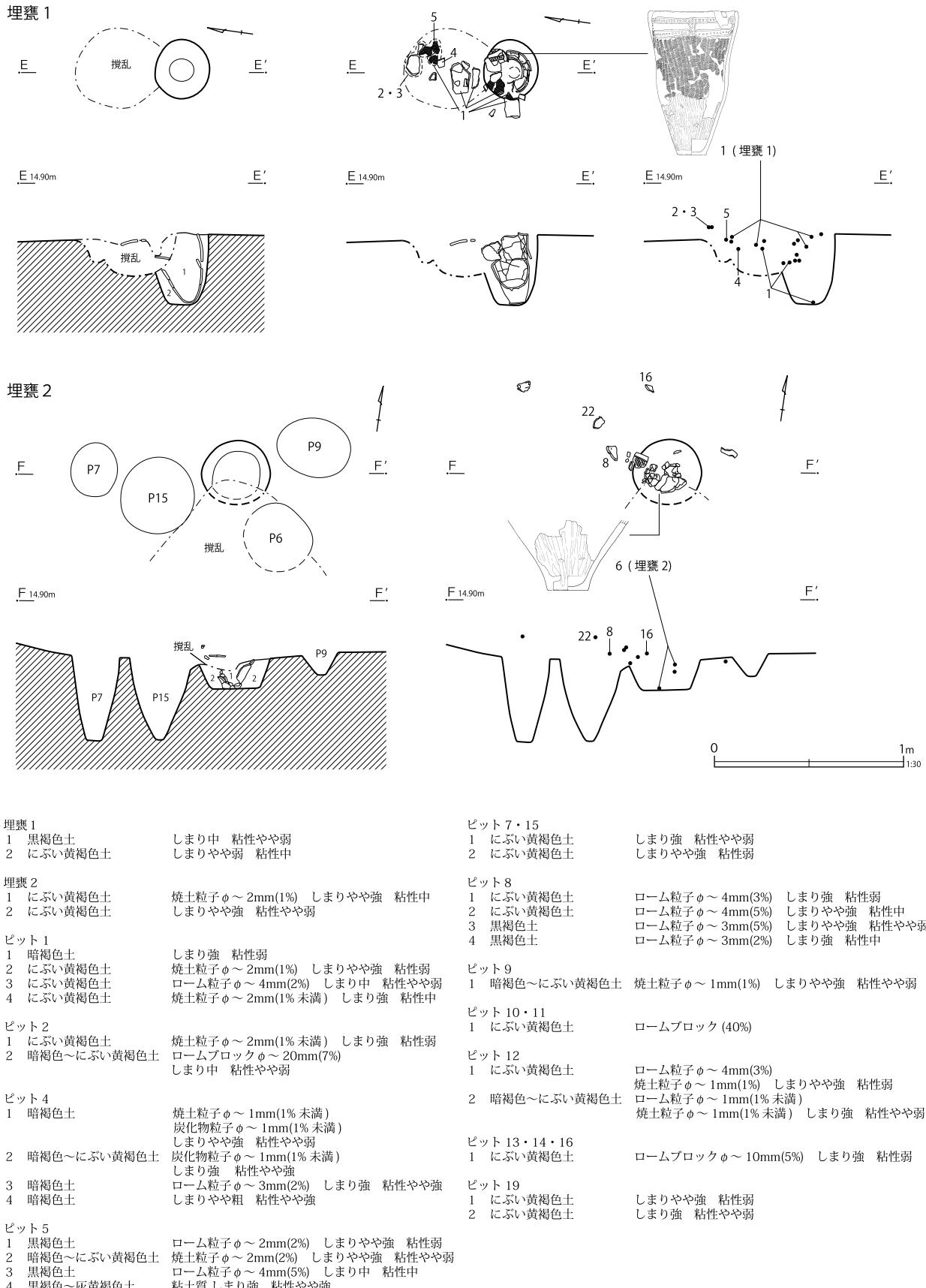
1は口縁や胴部の張りの弱い器形で、全体的に細身である。無文の口唇下には、器面を全周する平行沈線文と、その下部に5単位となる長楕円形の区画文が見られる。平行沈線文と区画文内には、円形刺突が施されている。また、平行沈線文と長楕円形の区画文間には、円形刺突が施され、このうち2箇所には弧状の沈線が垂下している。器面は地文施文後にヘラミガキが入念に施されている。底部側面には指頭によるヨコナデが見られる。平行沈線と刺突は同一工具と考えられる。原体はL-Rである。内面には丁寧なナデが施されている。口径23.4cm、器高40.5cm、底径7.8cmを測る。胎土は砂粒を少量、小礫を微量に含む。焼成は良好で、色調は明褐色である。

2～5は深鉢形土器の破片である。2・3は口縁部の破片で、2は口縁が波状となる。微隆起状の隆帯を巡らした関沢類型の土器である。3は浅い沈線で無文の口縁と胴部を区画している。地文には縄文が施文されている。4・5は胴部の破片で、地文には縄文が施文されている。

6は器面にヘラミガキが施され、内面は風化剥落が顕著である。現存高12.1cm、底径7.0cmを測る。



第10図 第2号住居跡（1）



第11図 第2号住居跡 (2)

胎土はやや多量の砂粒と小礫を含む。焼成は普通で、色調は明赤褐色である。

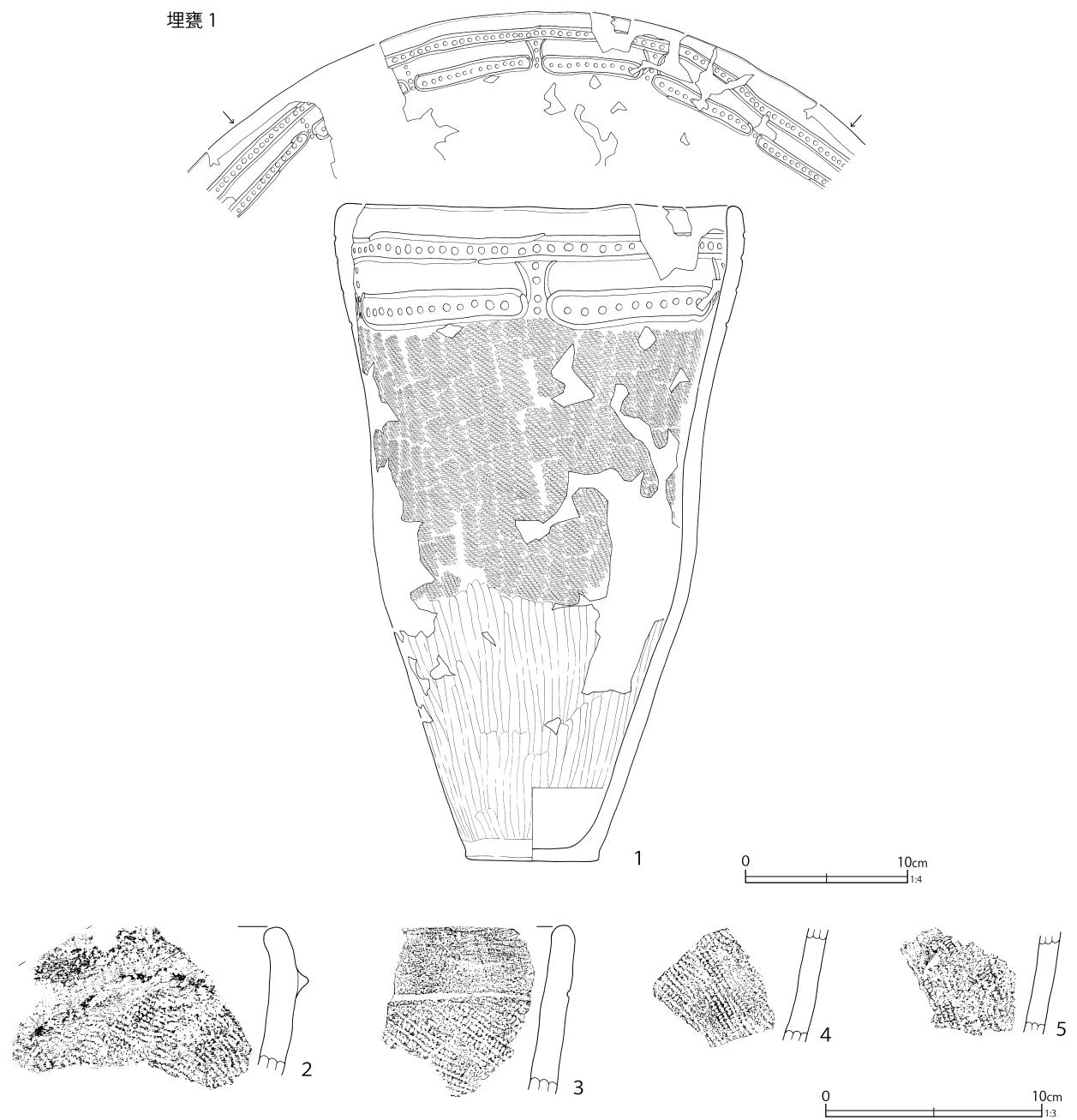
7は波状口縁の深鉢形土器の口縁部である。8～10は口縁部と口縁に近い胴部の破片である。8には補修孔が見られ、一つは途中で止まり、もう一つは貫通している。9は無文の口縁部である。10は微隆起状の隆帯で口縁部を区画する。11は微隆起で区画し、区画内に縄文が充填される。12は微隆起が施文される。地文はなく、無文である。

13～20は沈線で施文される称名寺系の深鉢形土器である。17・18は隆帯が垂下している。

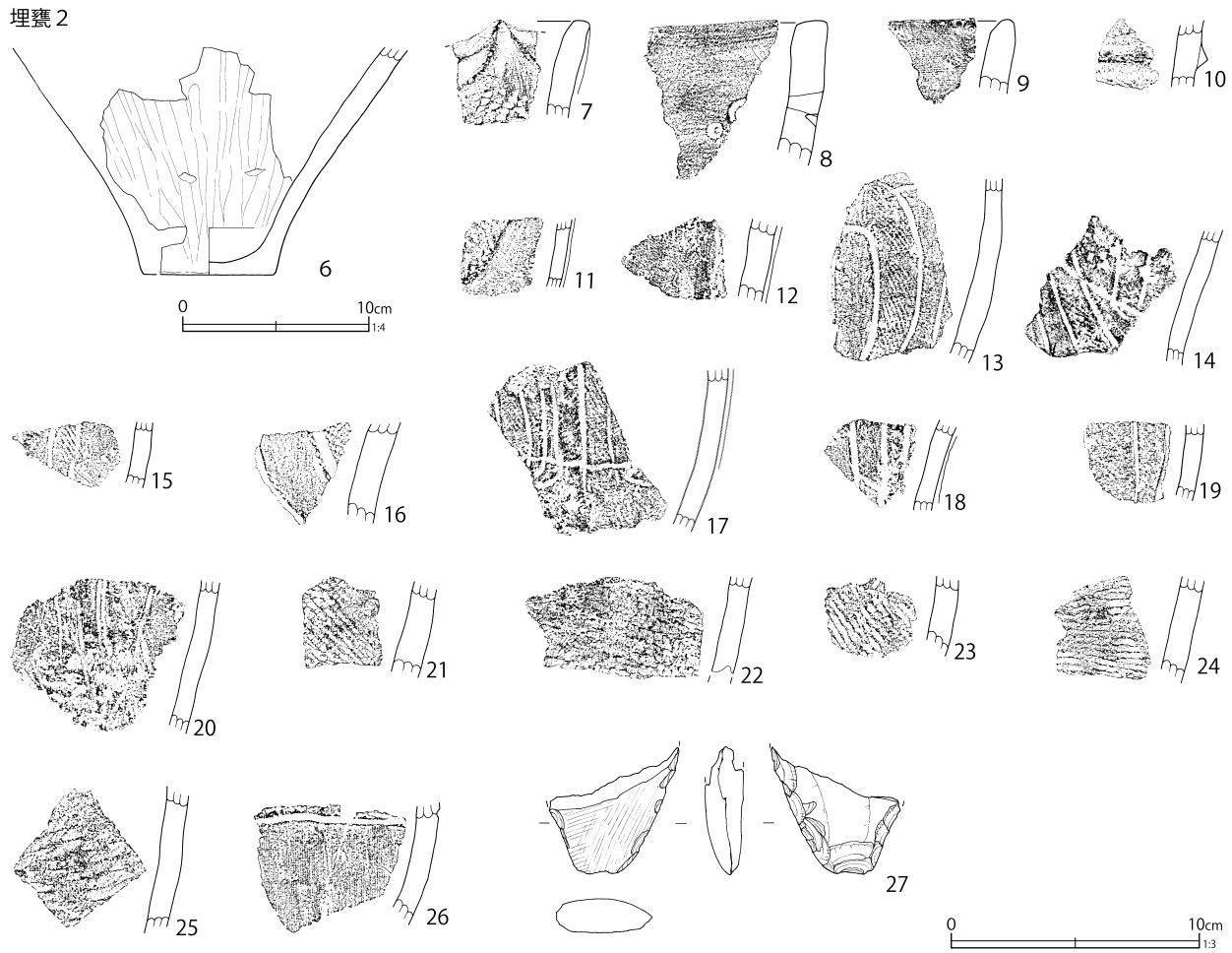
21～25は地文のみが残る鉢形土器の胴部片である。26は鉢、あるいは浅鉢であろう。

石器 (第13図)

27は打製石斧で、刃部のみを残す。正面は研磨痕が観察される。裏面は中央に分割面を大きく残し、周縁は正面方向からの剥離加工が施されている。



第12図 第2号住居跡出土遺物（1）



第13図 第2号住居跡出土遺物（2）

第2表 第2号住居跡出土石器観察表（第13図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
27	打製石斧	ホルンフェルス	[5.1]	[5.3]	1.6	29.4	SJ2	14-5

第4号住居跡（第14・15図）

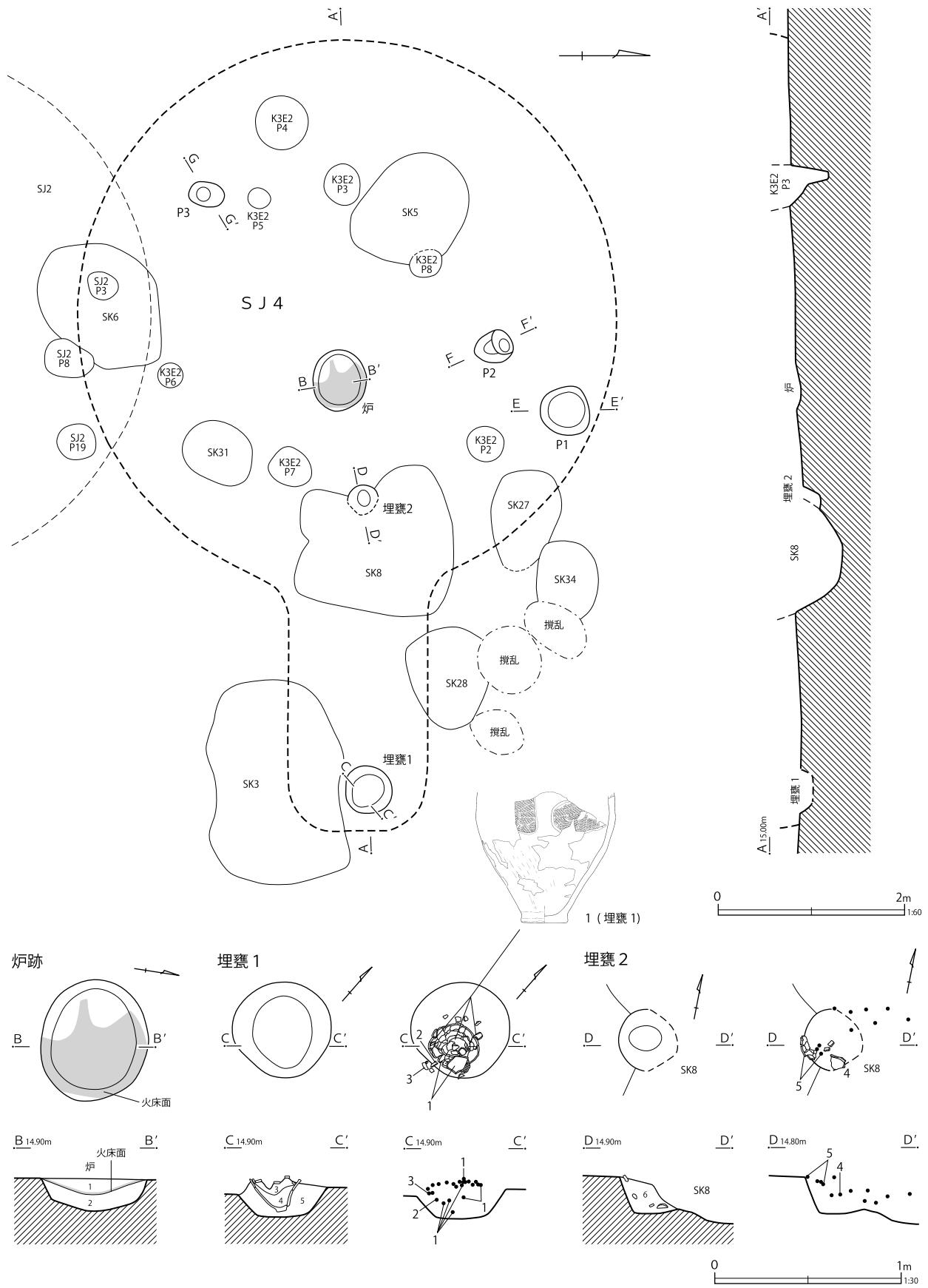
調査区の東側中央、K 3-E 2・3グリッドに位置する。第2号住居跡と重複し、第3・5・6・8・27・28・31号土壙などによって壊されている。東に張り出し部がつく柄鏡形住居跡で、張り出し部先端と連結部の2箇所に埋甕を埋設している。炉跡と2基の埋甕を通る中軸線から推定した主軸方位はN-92°-Wで、主軸長約8.5m、主体部径約5.8mと推定される。

検出面からは3本の柱穴が検出された。第2号住居跡のように、配列に規則性は見られない。掘り込みの浅いP 1は主柱穴とは考え難く、深さ0.35mを超えるP 2・3が主柱穴であろう。

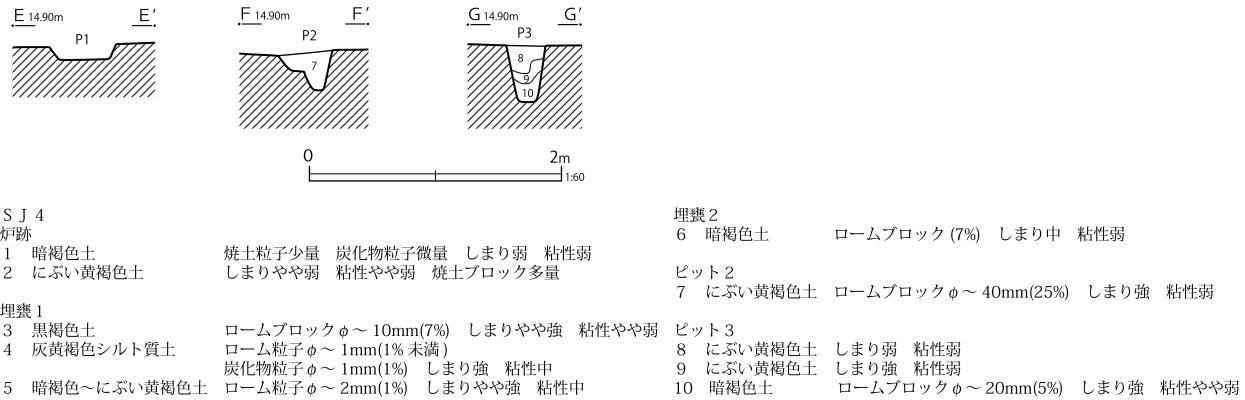
主体部の中央やや連結部寄りに地床炉が検出された。長径0.64m、短径0.57mの楕円形で、深さ0.17mである。底面の地山は被熱により赤色硬化している。

張り出し部の先端に検出された埋甕1（1）は、深鉢形土器が正位に埋設されていた。掘り込みは、径0.52m程の円形で、深さ0.19mの断面逆台形である。土器との間には、暗褐色土とにぶい黄褐色土の混合土が充填されていた。胴部上半を故意に打ち欠いたものは不明である。

連結部のやや炉跡寄りに埋甕2（4・5）が検出された。残りが悪く、深鉢形土器の胴部片が検出されただけであった。掘り込みは、径0.48m程

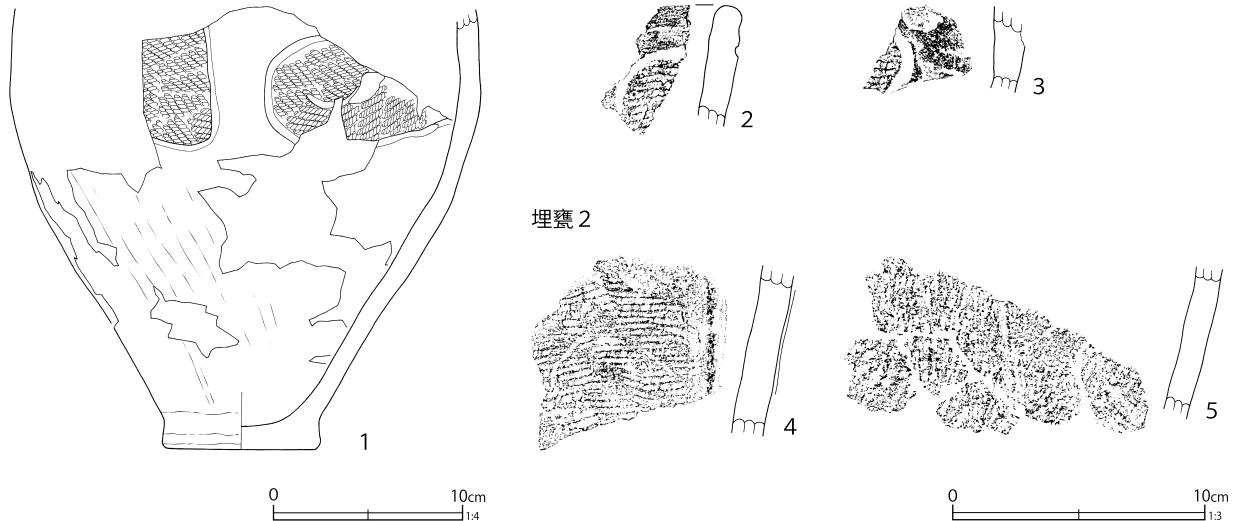


第14図 第4号住居跡（1）



第15図 第4号住居跡（2）

埋甕 1



第16図 第4号住居跡出土遺物

の略円形で、深さは0.18mである。

本住居跡の所属時期は、後期初頭と考えられる。

第4号住居跡出土遺物

土器（第16図）

1は埋甕1の深鉢形土器である。口縁部から胴部上半を欠損している。器面上半は粗いナデ整形後、沈線区画が施され、縄文が充填される。地文の原体はL Rである。胴下部が無文地で、渦巻き文を配する関沢類型であろう。器面にはヘラミガキが施されているが、風化が進み、部分的に残っているにすぎない。底部側面には指頭によるヨコナデが施される。現存部最大径22.6cm、現存高23.4cm、底径7.8cmを測る。胎土は砂粒多量、小礫少量を含む。焼成は普通で、色調は赤褐色である。

2は深鉢の口縁部で、沈線で文様が施文され、その内側に縄文が充填される。3は胴部の破片である。これらは埋甕1と同一個体と考えられる。

4・5は埋甕2とした、深鉢形土器の胴部片である。風化が進み、全体に残りが悪い。4は器面上に微隆起線を垂下している。地文は無節のLである。5は器面が荒れ判然としないが、ミガキが施されている。器面の具合から別個体と思われる。

（2）グリッド出土遺物

調査地点は宅地や竹林であったため、確認面まで搅乱が広範囲におよんでおり、遺構に帰属しない土器片や石器が多数出土した。出土土器の時期は、縄文時代早期から後期にわたるため、以下の分類に従い、概要を記すことにする。

土器 (第17図)**第I群土器**

早期の土器を本群とした。

第1類 (1~18)

早期の撚糸文系土器を本類とした。器形は口唇部が緩く外反する深鉢形土器である。頂部に丸みを持ち、外側に肥厚した口唇直下から、撚糸が密に施文されている。施文方向は縦位が主体だが、10は口唇直下が斜位に施文されている。17は口縁部に補修孔を持つものである。夏島式から稻荷台式と考えられる。

第2類 (19)

押型文土器を本類とした。山形押型文が、間隔をあけて縦位に施文されている。押型文は図示した1点のみである。

第3類 (20・21)

早期の条痕文系土器を本類とした。20は纖維を含み、内外面に粗く条痕が施されている。21は纖維を含まず、砂粒分の多い胎土である。外面には比較的密に細かな条痕が施されているが、内面には指頭によるナデ整形が施されている。

第II群土器

前期後半の諸磯式土器を本群とした。

第1類 (22)

縄文地文上に円形刺突が施されるもので、諸磯a式と考えられる。纖維は含んでいない。地文は1段3条のR Lである。

第2類 (23)

底部を本類とした。胎土や地文は第1類と同様である。

第III群土器

中期の土器を本群とした。

第1類 (24・25)

勝坂式土器を本類とした。いずれも半截竹管内面を用いた、断面カマボコ状の沈線で区画文が描かれており、同一個体の可能性がある。いずれも区画文の内外に、同一工具による押圧文や、いわ

ゆるキャタピラ文が施されている。

第2類 (26・27)

磨消縄文の土器を本類とした。26は沈線による懸垂文間の地文が磨消されている。27は細い沈線で曲線的な文様が描かれており、26よりも新しい様相を示している。

第3類 (28~33)

隆起線により区画や文様が描かれた土器を本類とした。28は無文の口唇下に隆起線が巡る土器であろう。29は渦巻き文の土器であろう。30~33は、懸垂文もしくは抱球文の土器であろう。

第4類 (34~38)

櫛状工具による条線文が施された土器を本類とした。第2・3類に伴う土器と考えられる。

第5類 (39~44)

地文に縄文を施文した深鉢の胴部片を本類とした。

第IV群土器

後期の土器を本群とした。

第1類 (45~56)

称名寺式土器を本類とした。沈線で描かれた文様内に、縄文が充填される土器群である。49は口唇部から隆帯が垂下し、器面を縦区画する土器であろう。

第2類 (57・58)

口唇直下の隆起線に押圧が施され、口唇内面に沈線が巡る堀之内2式土器である

第3類 (59)

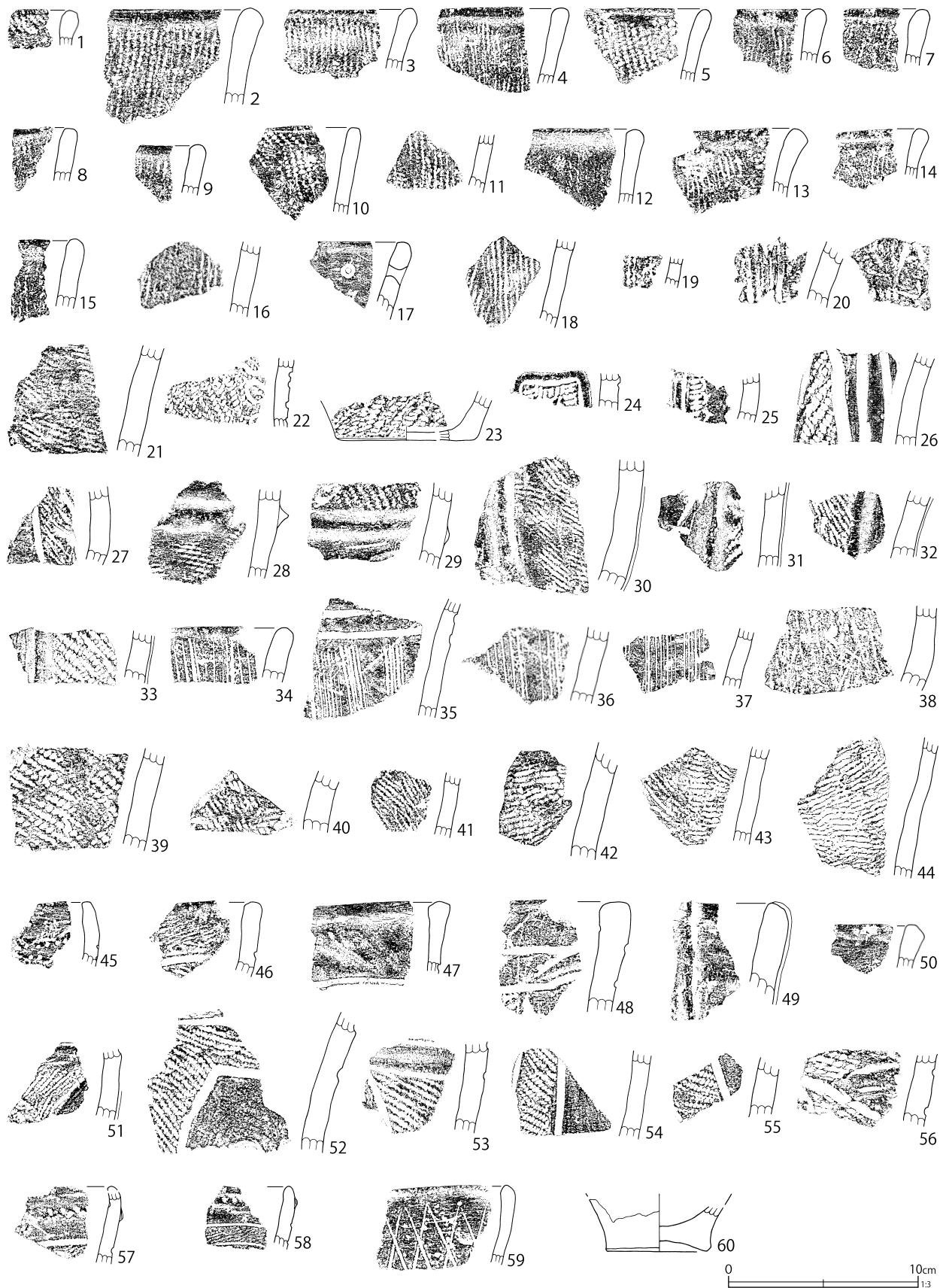
格子目文が施文される土器を本類とした。

第4類 (60)

底部破片で、底面が上げ底状となっている。

石器 (第18図)

61は石鎌である。右側脚部を一部欠損する。鎌身部の両側縁は緩く外湾している。長さと幅の比は、ほぼ1対1である。基端部の抉りは浅く、脚部の作り出しが明確でない。調整加工は丁寧で正面に施されている。横断面はレンズ状である。



第17図 グリッド出土遺物（1）

62・63は打製石斧である。62は裏面に自然面を大きく残している。調整加工は、右側面からの剥離で外形を整えている。横断面は厚手である。63は上半部を欠損する。

64は軽石製の浮子である。外形は長方形に整形しており、横断面はレンズ状を呈している。径

0.7cmの円孔を上端部寄りに両面から穿孔している。上端部の一部を欠損する。

65～72は磨石である。橢円形の礫の平坦面に研磨痕が観察される。65・66・68は閃緑岩、67・69～72は安山岩である。65は完形、ほかは一部欠損している。



第18図 グリッド出土遺物（2）

第3表 グリッド出土石器観察表（第18図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
61	石鎌	黒曜石	1.4	1.2	0.4	0.4	SD3	14-6
62	打製石斧	黒色頁岩	10.4	5.1	3.7	215.9	SK15	16-3
63	打製石斧	砂岩	[4.8]	[3.7]	1.0	24.0	表採	16-3
64	浮子	軽石安山岩	[5.5]	4.5	1.3	9.5	K3-E3グリッド	16-3
65	磨石	閃緑岩	8.2	4.8	1.95	104.2	SD3	16-3
66	磨石	閃緑岩	[7.0]	5.4	2.6	142.0	SK20	16-3
67	磨石	安山岩	[5.5]	6.3	3.5	140.7	K3-C2グリッド	16-3
68	磨石	閃緑岩	[6.8]	[7.0]	3.4	202.0	SK10	16-3
69	磨石	安山岩	[5.2]	6.9	4.0	210.2	SK10	16-3
70	磨石	安山岩	[5.3]	[7.1]	3.65	171.6	K3-E3グリッド	16-3
71	磨石	安山岩	[6.4]	[7.8]	2.9	138.2	SK9	16-3
72	磨石	安山岩	[9.2]	[3.7]	4.65	140.8	表採	16-3

2. 古墳時代の遺構と遺物

（1）竪穴住居跡

第1号住居跡（第19・20図）

調査区東側のK 3-D・E 2・3グリッドに位置する。近世土壙の第11・24・36号土壙が重複しているだけでなく、後世の攪乱によって壁や床面が大きく壊されていた。

平面形は全体として形の整った方形を呈しているが、北辺はカマドを境にして、段違いのように壁面が食い違い、通常の住居跡とは異なっていた。攪乱によってカマド周辺が大きく削平を受けているため、その理由は判然としないが、カマド右脇に棚状施設を造作していたのか、あるいは住居の部分的な拡張を行ったものと想定される。

規模は、南北辺長5.60m、東西辺長5.66m、壁高の最も深い部分で0.28mである。西辺を基準とした主軸方位はN-17°-Wを指す。

カマドは北壁の中央に設けられていた。攪乱によりカマドの左袖部は削平されていたが、カマド右袖部先端には土師器甕（9）を逆位に据え、それに接するように、入れ子状になった2個体の土師器甕（7・10）が、横倒しになり、潰れた状態で出土した。本来は土師器の甕を芯材に用いて、鳥居状に架構する焚口部を構築していたものと想定される。カマドの規模は、全長1.28m、燃焼部幅0.94m、深さ0.18mで、被熱により赤色硬化した火床面が良く残っていた。

壁溝は、壁直下に全周するように巡らされており、幅0.30~0.18m、深さ0.18mのしっかりとした掘り込みである。貯蔵穴は検出されなかった。

床面上のP 1~4の4本が主柱穴である。対角線上に配列されている。各柱穴の規模は、P 1が径0.60×0.48m、深さ0.77m、P 2が径0.55×0.50m、深さ0.70m、P 3が径0.29×0.26m、深さ0.83mである。P 4は攪乱の下から検出されたため、径0.41×0.39m、深さ0.26mである。P 1の土層断面には、柱痕が明瞭に観察された。

覆土は暗褐色土やにぶい黄褐色土を主体とする。遺物は、カマド左脇から西壁中央の壁際を中心に、土師器壺・鉢・甕、須恵器甕が出土した。

本住居跡の所属時期は、小型化した模倣壺や比企型壺、長胴甕の形態的特徴から7世紀中葉に位置づけられる。

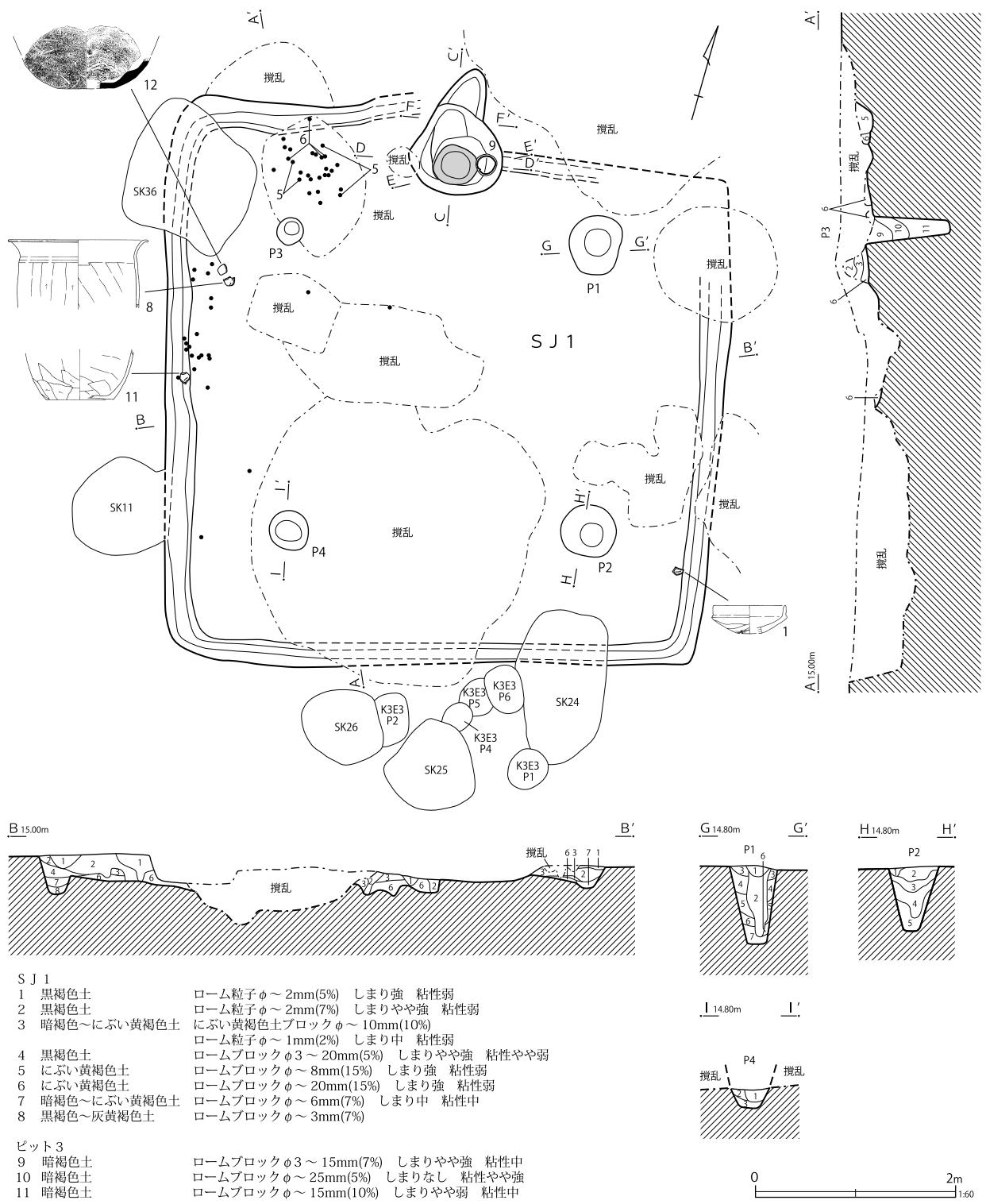
第1号住居跡出土遺物（第21図）

1は口縁部が短く直立し、口縁部と体部の境に段を持つ模倣壺である。胎土は比企型壺とは異なり、角閃石粒子の混入が目立つ。口径9.4cmと小型化している。体部外面に刀子などの金属製工具による刃傷痕が見られる。2は口縁部がS字状に屈曲する比企型壺である。口径10.8cmと小型化が進んでいる。内外面とも赤彩が施される。3は口縁部が大きく外反する壺である。胎土・焼成等は比企型壺と同じで、内外面に赤彩が施される。

4は比企系の鉢である。口唇部内面の沈線など比企型坏と同じ特徴を持つが、赤彩は見られない。

5～11は土師器の甕で、いわゆる長胴甕である。5・6は口縁部がやや直線的に外反し、胴部との境に明瞭な稜を作り出す。胴部の上端に横位のへ

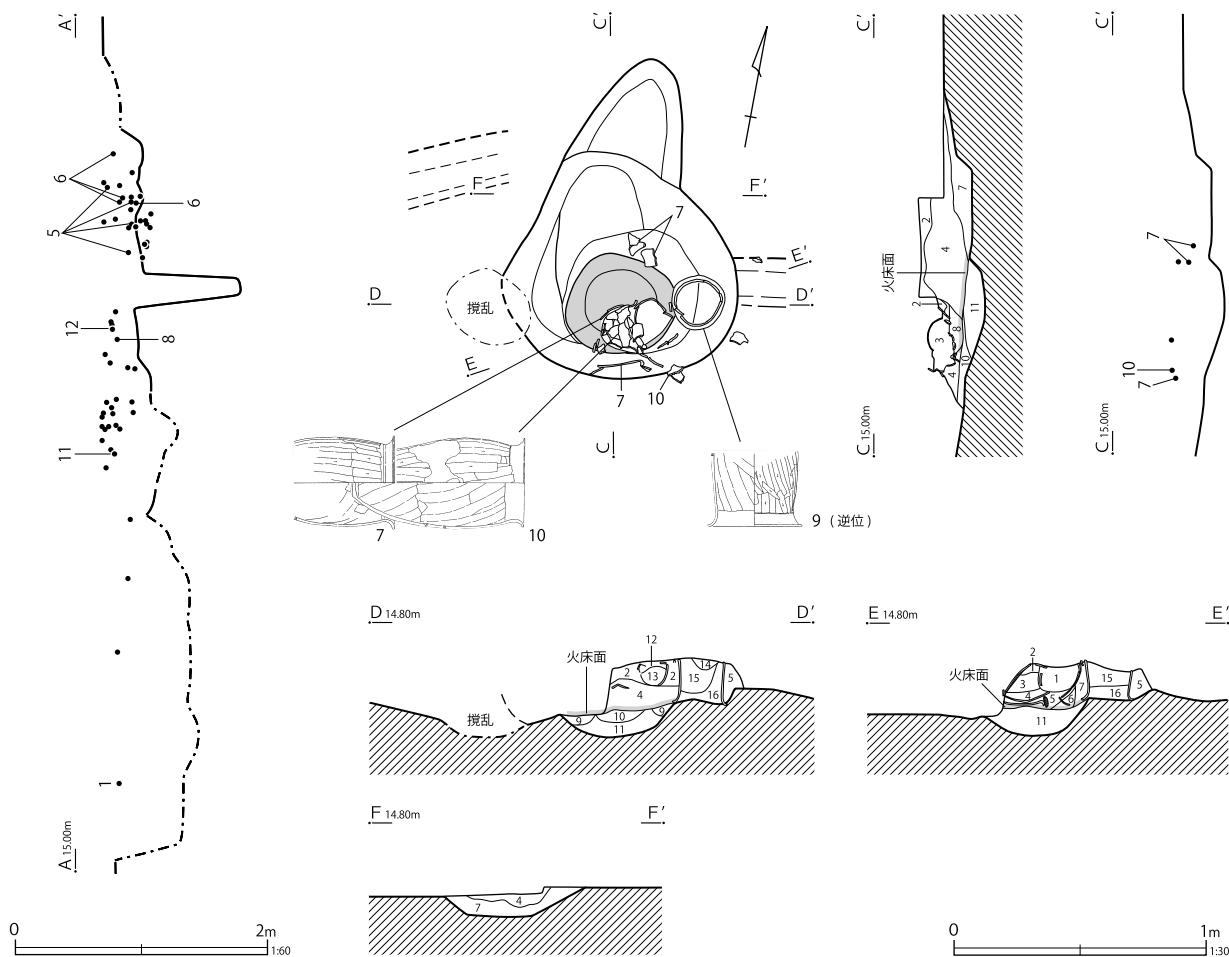
ラケズリを施した後、縦位のヘラケズリを施しているのが特徴である。これに対し、7～10は口縁部が大きく外反し、胴部に縦位のヘラケズリが施されたものである。さらに、胴部最大径をやや上位に持ち、口径と胴部最大径がほぼ等しい7・10



第19図 第1号住居跡（1）

と、胴部の張りがやや弱く、口径よりも胴部最大径が小さい8・9に細分される。11は木葉痕を残す甕の底部破片である。底径が9.0cmと大きく、胎土・焼成・色調等は5・6に類似する。

12は須恵器甕の底部片である。底部は丸平底に近い。外面は叩き整形の後、ナデが施される。底部内面には同心円文の当具痕が良好に残る。胎土の特徴から在地産と考えられる。



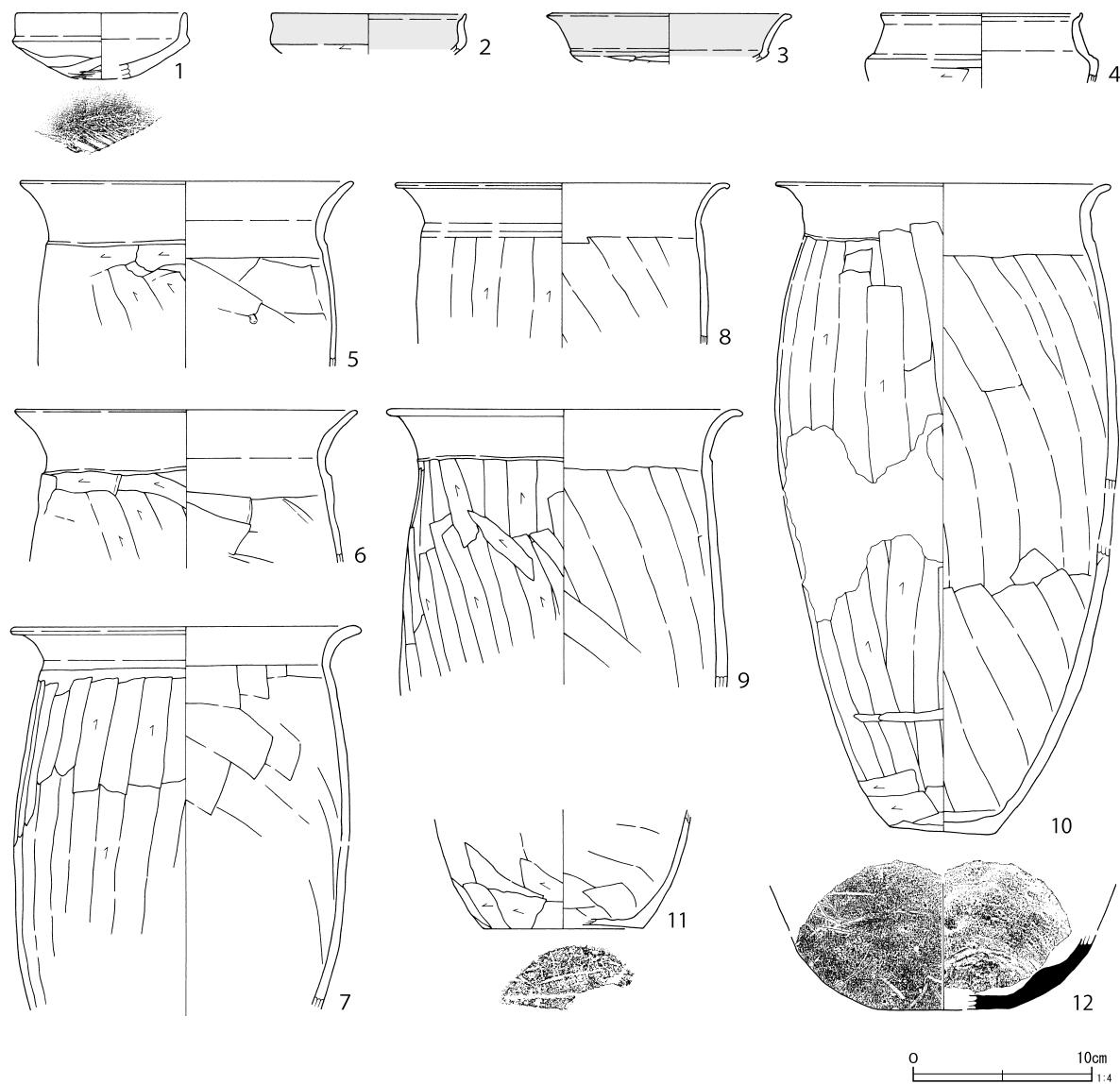
S J 1 カマド

1 にぶい黄褐色土	炭化物粒子 $\phi \sim 1\text{mm}$ (1%未満) 黄褐色ローム粒子(5%) しまりやや強 粘性弱
2 にぶい黄褐色土	黄褐色土(15%) しまりやや強 粘性弱
3 暗褐色土	しまりやや強 粘性弱
4 にぶい黄褐色土	焼土ブロック $\phi \sim 6\text{mm}$ (10%) しまりやや強 粘性弱
5 灰褐色～にぶい黄褐色土	黄褐色土 $\phi \sim 3\text{mm}$ (5%) 焼土粒子 $\phi \sim 3\text{mm}$ (1%)
6 黄褐色～にぶい黄褐色土	しまりやや強 粘性弱
7 暗褐色土	焼土粒子 $\phi \sim 2\text{mm}$ (7%) 炭化物粒子 $\phi \sim 1\text{mm}$ (1%未満) しまりやや強 粘性弱
8 灰褐色～黒褐色土	黄褐色ロームブロック $\phi \sim 5\text{mm}$ (3%) しまりやや強 粘性やや弱
9 暗褐色土	焼土粒子 $\phi \sim 2\text{mm}$ (5%) しまりやや弱 粘性なし
10 赤褐色土	しまり極めて強 粘性なし
11 にぶい黄褐色土	しまり極めて強 粘性なし
12 黒褐色土	しまりやや弱 粘性やや弱
13 黒褐色土	しまり中 粘性弱
14 にぶい黄褐色土	黒褐色土ブロック $\phi \sim 20\text{mm}$ (15%) 黄褐色粘土(40%) 焼土粒子 $\phi \sim 3\text{mm}$ (2%) しまりやや弱 粘性やや弱
15 黄褐色砂質シルト	炭化物 $\phi \sim 2\text{mm}$ (1%) 被熱により赤褐色化した燃土ブロック(65%) しまり中 粘性弱
16 にぶい黄褐色土	黄褐色粘土(40%) しまりやや弱 粘性弱

ピット 1

1 灰褐色～にぶい黄褐色土	黄褐色ローム粒子 $\phi \sim 1\text{mm}$ (2%) しまりやや強 粘性弱
2 暗褐色土	しまりやや弱 粘性やや弱
3 にぶい黄褐色土	しまりやや強 粘性弱
4 暗褐色～にぶい黄褐色土	しまりやや強 粘性弱
5 暗褐色～にぶい黄褐色土	にぶい黄褐色ローム粒子 $\phi \sim 6\text{mm}$ (15%) しまりやや弱 粘性中
6 暗褐色土	にぶい黄褐色ローム粒子 $\phi \sim 10\text{mm}$ (7%) しまり中 粘性やや強
7 暗褐色土	しまり中 粘性やや強
ピット 2	
1 暗褐色土	しまり中 粘性弱
2 にぶい黄褐色土	しまり強 粘性弱
3 にぶい黄褐色土	黄褐色ロームブロック $\phi \sim 7\text{mm}$ (10%) しまりやや弱 粘性弱
4 暗褐色土	黄褐色ロームブロック $\phi \sim 10\text{mm}$ (10%) しまり弱 粘性やや弱
5 暗褐色土	にぶい黄褐色ロームブロック $\phi \sim 20\text{mm}$ (15%) しまりやや強 粘性中
ピット 4	
1 暗褐色土	黄褐色ローム粒子 $\phi \sim 1\text{mm}$ (3%) しまり中 粘性やや強
2 暗褐色土	黄褐色ロームブロック $\phi \sim 30\text{mm}$ (10%) しまり強 粘性やや強
3 にぶい黄褐色土	黄褐色ロームブロック $\phi \sim 10\text{mm}$ (15%) しまり極めて強 粘性強

第20図 第1号住居跡 (2)



第21図 第1号住居跡出土遺物

第4表 第1号住居跡出土遺物観察表（第21図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考		図版
										備考	図版	
1	土師器	壺	(9.4)	[3.7]	—	C D H I	45	普通	にぶい檻	No.39 底面刃傷痕	17-1	
2	土師器	壺	(10.8)	[2.3]	—	D E H J K	10	良好	橙	3区 比企型壺 内外面赤彩	17-2	
3	土師器	壺	(13.0)	[2.7]	—	D I K	15	良好	赤褐	K3-E3G 内外面赤彩	17-3	
4	土師器	鉢	(11.0)	[3.8]	—	D E H I	15	良好	赤褐	K3-E3G 無彩 口唇部内面沈線	17-4	
5	土師器	甕	(18.5)	[10.3]	—	C E H I	30	普通	にぶい檻	No.4·6·14·47 口縁部外面煤付着	17-5	
6	土師器	甕	(19.0)	[8.5]	—	C D E H	30	普通	にぶい檻	No.1·7·8·50 胴部外面煤付着	17-6	
7	土師器	甕	19.0	[21.5]	—	D E H I	60	普通	明褐	カマドNo.2·3·4·5·6·一括	17-7	
8	土師器	甕	(18.4)	[9.0]	—	E H I K	15	普通	にぶい檻	No.20	17-8	
9	土師器	甕	19.4	[15.5]	—	E H I K	90	普通	橙	カマドNo.1·一括	17-9	
10	土師器	甕	(18.8)	36.4	6.0	C D H I	85	普通	にぶい檻	No.1·2·3·9·41 3T 胴部一部器面剥落	17-10	
11	土師器	甕	—	[6.6]	(9.0)	D H I K	45	普通	にぶい檻	No.33 底面木葉痕 胴部外面焼土付着	17-11	
12	須恵器	甕	—	[4.1]	—	D E I	20	普通	灰	No.19 底部内面同心円文当具痕 在地産	17-12	

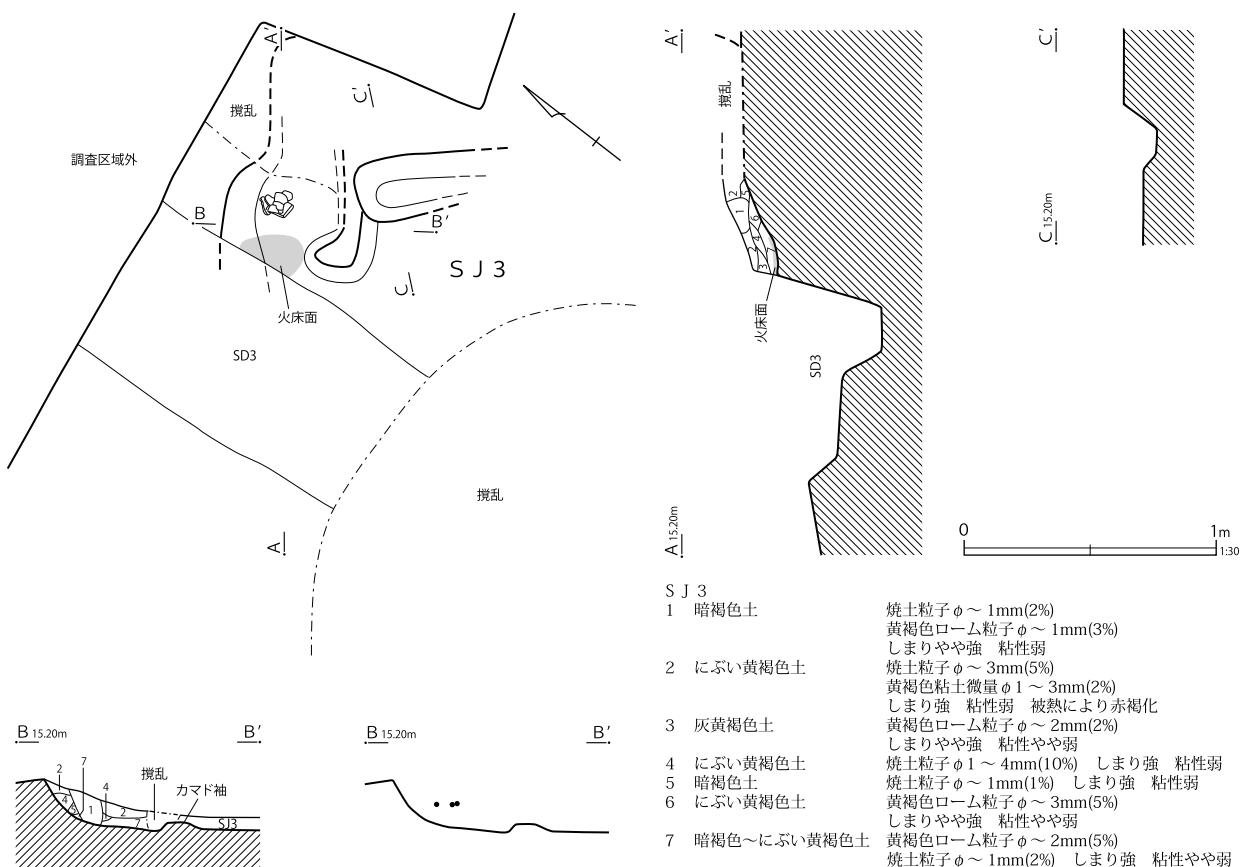
第3号住居跡（第22図）

調査区南西隅のK 2-F 10グリッドに位置する。調査区の制約のため、北東壁にカマドを設置する住居跡の一部が検出されたにすぎない。

カマド焚口部が第3号溝跡によって壊され、カマド袖部と燃焼部の一部が確認された。カマドの主軸方位は、N-50°-Eを指す。袖部は地山を

一部掘り残し、黄褐色土を主体に構築されていたものと考えられる。燃焼部には火床面が残り、長胴甕の胴部片が出土した。また、右袖部に接するように壁溝がわずかに残っていた。

本住居跡の所属時期は、出土遺物が少なく明確にし得ないが、第1号住居跡とほぼ同時期と考えられる。



第22図 第3号住居跡

3. 近世の遺構と遺物

(1) 溝跡

第1号溝跡（第23図）

調査区西側のK 2-F 9グリッドに位置する。走行方向は、ほぼ南北を示す。東側に並行して第2号溝跡が走行する。両者の間隔は約1.00mを隔てている。一部ピットとの重複が見られる。

規模は検出長3.20m、幅0.44~0.34m、深さ0.16~0.04mである。ほぼ直線的に延び、調査区域外

へと続き、未調査部分で西に屈曲するのか消滅するのかは、定かでない。断面U字形で、覆土は黒褐色土と暗褐色土に分かれる。

所属時期は、覆土の状態から近世であろう。

第2号溝跡（第23図）

調査区西側のK 2-E・F 10グリッドに位置する。概ね東側に隣接する第3号溝跡に寄り添うように掘削された幅狭の溝跡で、北端部で東へ緩や

かにカーブしている。調査区域外で第3号溝跡に合流するものと思われる。規模は検出長7.0m、幅0.32~0.19m、深さ0.25~0.12mで、断面U字形である。覆土は暗褐色土、暗灰褐色土に分かれ、自然堆積を示す。

遺物は出土していない。所属時期は、覆土の状態から近世であろう。

第3号溝跡（第23図）

調査区西側のK 2-E・F・G 10グリッドに位置する。南端では第3号住居跡を壊している。

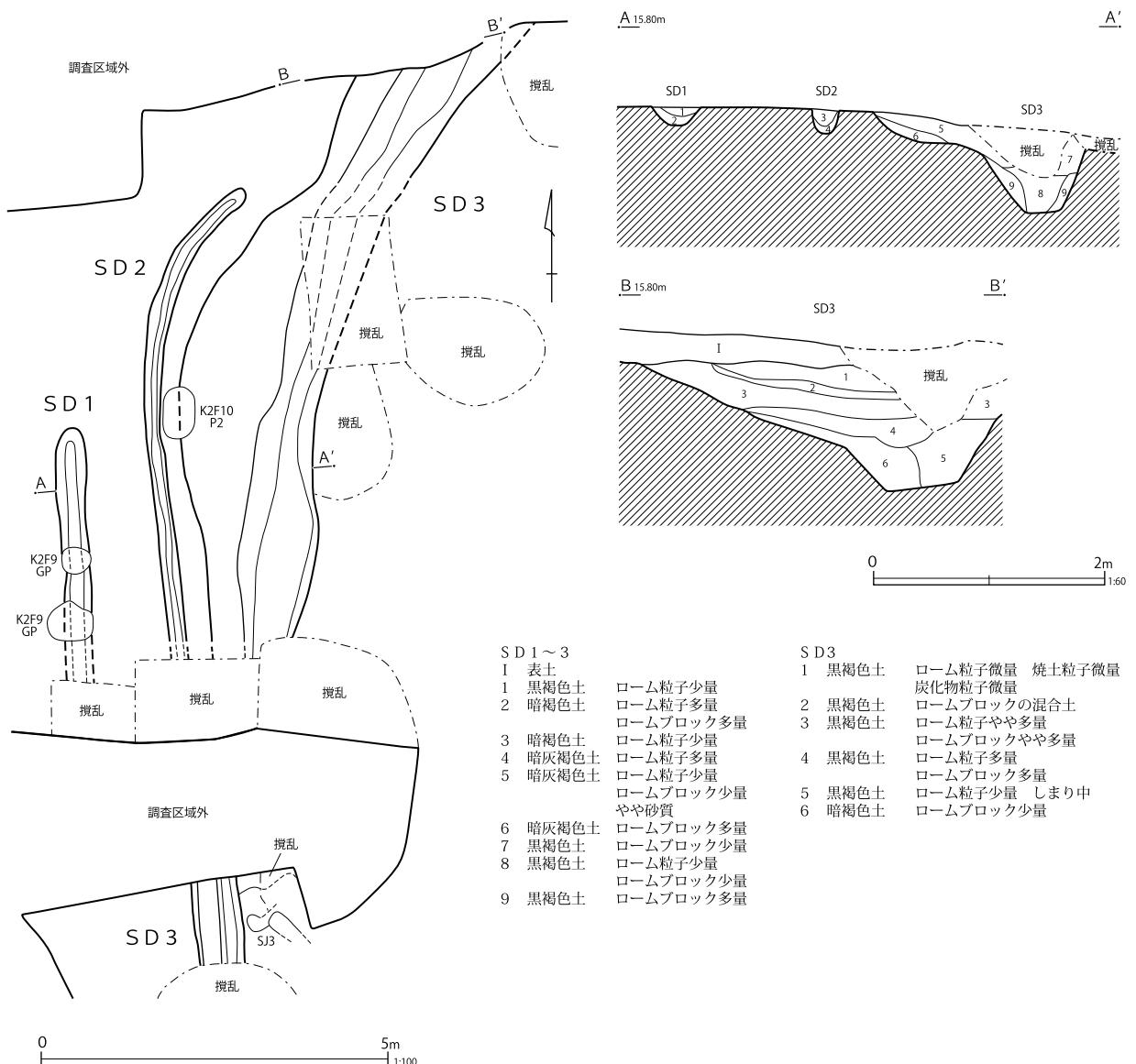
規模は検出長14.28m、幅2.08~0.65m、深さ

0.89~0.26mである。断面形は東側が深く、西側に緩斜面を持つ。覆土は数次にわたる掘り直しがうかがわれる。

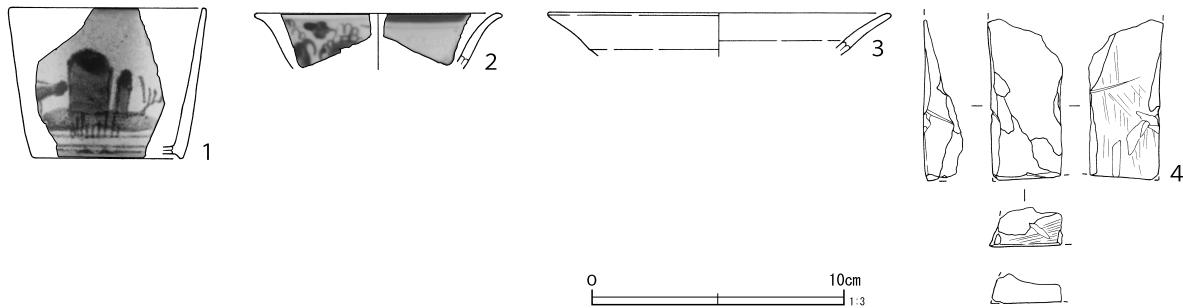
所属時期は、出土遺物から近世末から近代にかかる時期と判断される。

第3号溝跡出土遺物（第24図）

1は染付で楼閣山水文を描いた磁器碗である。いわゆる蕎麦猪口で、19世紀前葉の伊万里の製品である。2は草花文が呉須で描かれた染付磁器の端反碗である。瀬戸の製品で、19世紀前葉のものである。3は灰釉の陶器皿で、見込は彫り込み高



第23図 第1・2・3号溝跡



第24図 第3号溝跡出土遺物

第5表 第3号溝跡出土遺物観察表 (第24図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	磁器	碗	(7.6)	5.9	(5.8)	K	25	良好	灰白	蕎麦猪口 楼閣山水文 伊万里産 19C前葉	18-1
2	磁器	端反碗	(9.8)	[2.2]	—	H	15	良好	灰白	草花文染付 瀬戸産 19C前葉	18-2
3	陶器	皿	(13.4)	[1.7]	—	K	20	良好	褐灰	灰釉 貫入 二次焼成痕 見込み彫り込み高台	18-3
4	石製品	砥石	長さ[6.4]	幅[2.9]	厚さ[1.5]	重さ23.8 g	凝灰岩			側縁部櫛歯状工具 刃物痕多数 砥面3面	18-4

台である。貫入が目立ち、二次焼成痕が見られる。4は凝灰岩製の砥石の破片である。側縁部には製作時の櫛歯状工具が見られるほか、砥面には使用時の刃物痕が多数残る。

第4・5号溝跡 (第25図)

調査区南側から東側、K 2-G 10、K 3-G 1・2グリッドにかけて位置する。緩やかに弧を描きながら東西方向に走行する第5号溝跡の北東辺と重なるように、第4号溝跡が掘削されていた。

第4号溝跡の規模は、長さ4.28m、幅0.46~0.38m、深さ0.32~0.23mである。断面形は箱形を呈し、ほぼ垂直に掘り込まれる。土層断面の観察により第5号溝跡の埋没後に掘削されていることが判明した。覆土は暗褐色土を主体とし、上層は砂質土であった。

第5号溝跡は調査区の南縁を東西に走行し、規模は検出長19.0m、幅0.82~0.31m、深さ0.24~0.10mである。断面形は底面の幅の広い箱形で、覆土に白色粒子の混入が見られた。白色粒子の成因が、火山灰起源によるものかは肉眼観察では判然としなかった。

両者とも遺物は出土していないが、覆土の状態から所属時期は近世と考えられる。

第6号溝跡 (第25図)

調査区北側のK 3-B 2、C 2・3、D 2グリッドにかけて位置する。ほぼ直線的に南北に走行する。第21号土壙によって壊されていた。

規模は検出長13.8m、幅1.81~1.21m、深さ0.47~0.26mである。断面形は立ち上がりの緩やかなU字形を呈する。覆土の上層から中層にかけて炭化物粒子の混入が見られた。

遺物は磁器、焙烙、瓦が出土した。所属時期は、遺物や覆土の状態から近世であろう。

(2) 土壙

近世の土壙は合計38基を検出した (第26~30図、第7表)。調査区全域に散在しているが、K 3-D・E 2グリッドにやや集中している。

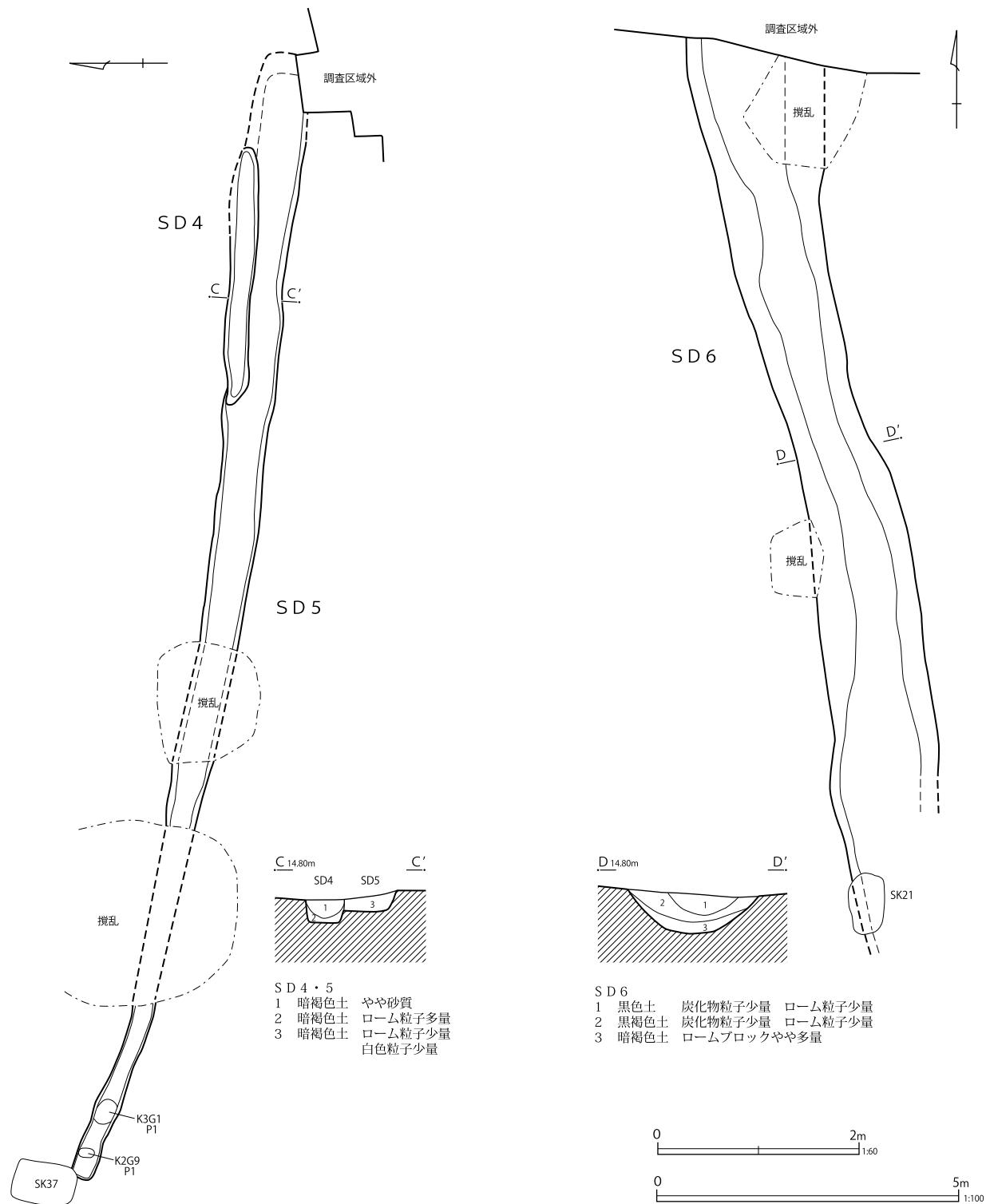
竹根や木根によって搅乱を受けているものが多く、遺物がほとんど出土していないため、性格や時期は不明なものが多い。このうち第10・13・33号土壙の3基は、土壙内で火を燃した痕跡をとどめる焼成土壙であった。度重なる被熱のために、底面や覆土中に数枚の火床面が見られ、壁面も赤く焼けていた。その上には灰や炭化物、焼土がレンズ状に薄く堆積していた。確認面が表土面に近かったことから、近世以降の所産と考えられる。

第1号土壤 (第26図)

調査区西端のK 2-F 9グリッドに位置する。北側が調査区外に延びているため平面形は明確でないが、方形に近いと考えられる。断面形は薬研

形である。規模は長軸長（東西辺）1.85m、短軸長1.40m以上、深さ0.79mである。東西辺を基準とする長軸方位はN-82°-Eを指す。

遺物は、近世陶器の破片が出土した。



第25図 第4・5・6号溝跡

第2号土壙（第26図）

調査区西側のK 2-F 10グリッドに位置する。K 2-F 10グリッドP 1と重複し、それを壊している。平面形は楕円形、断面形は不整形である。規模は長軸長1.88m、短軸長1.60m、深さ0.58mである。長軸方位はN-7°-Eを指す。

遺物は、縄文土器、土師器の小片が出土した。

第3号土壙（第26図）

調査区中央東側のK 3-E 2・E 3グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長2.20m、短軸長1.30m、深さ0.51mで、長軸方位はN-85°-Wを指す。

第4号土壙（第26図）

調査区中央のK 3-E 2グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.33m、短軸長0.75m、深さ0.42mで、長軸方位はN-23°-Eを指す。

遺物は、縄文土器、土師器の小片が出土した。

第5号土壙（第26図）

調査区中央のK 3-E 2グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.35m、短軸長1.07m、深さ0.42mで、長軸方位はN-44°-Wを指す。

遺物は、縄文土器、土師器の小片が出土した。

第6号土壙（第26図）

調査区中央のK 3-E 2グリッドに位置し、第2・4号住居跡と重複する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.60m、短軸長1.17m、深さ0.35mで、長軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物は、縄文土器、浮子、土師器片が出土した。

第7号土壙（第26図）

調査区中央南側のK 3-F 1・F 2グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は筒形である。規模は長軸長0.86m、短軸長0.74m、深さ0.71mで、長軸方位はN-61°-Wを指す。

遺物は、縄文土器、土師器の小片が出土した。

第8号土壙（第27図）

調査区中央のK 3-E 2グリッドに位置する。第4住居跡に付属する埋甕2を壊している。平面・断面形ともに不整形である。規模は長軸長1.81m、短軸長1.48m、深さ0.53mで、長軸方位はN-23°-Wを指す。

遺物は、縄文土器、土師器の小片が出土した。

第9号土壙（第27図）

調査区中央南側のK 3-F 1グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は不整形である。規模は長軸長1.87m、短軸長1.47m、深さ0.60mで、長軸方位はN-5°-Wを指す。

遺物は、縄文土器、磨石、土師器片が出土した。

第10号土壙（第27図）

調査区中央南側のK 3-F 2グリッドに位置する。第2住居跡の炉跡を壊している。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.95m、短軸長1.30m、深さ0.44mで、長軸方位はN-25°-Wを指す。焼成土壙で、底面は被熱により赤色硬化している。

遺物は、縄文土器、磨石、土師器片が出土した。

第11号土壙（第27図）

調査区中央のK 3-E 2グリッドに位置し、第1住居跡を壊している。平面形は径0.97m程の円形で、深さ0.47mの断面鍋底形である。長軸方位はN-24°-Wを指す。

遺物は、焙烙片や焼成粘土塊が出土した。

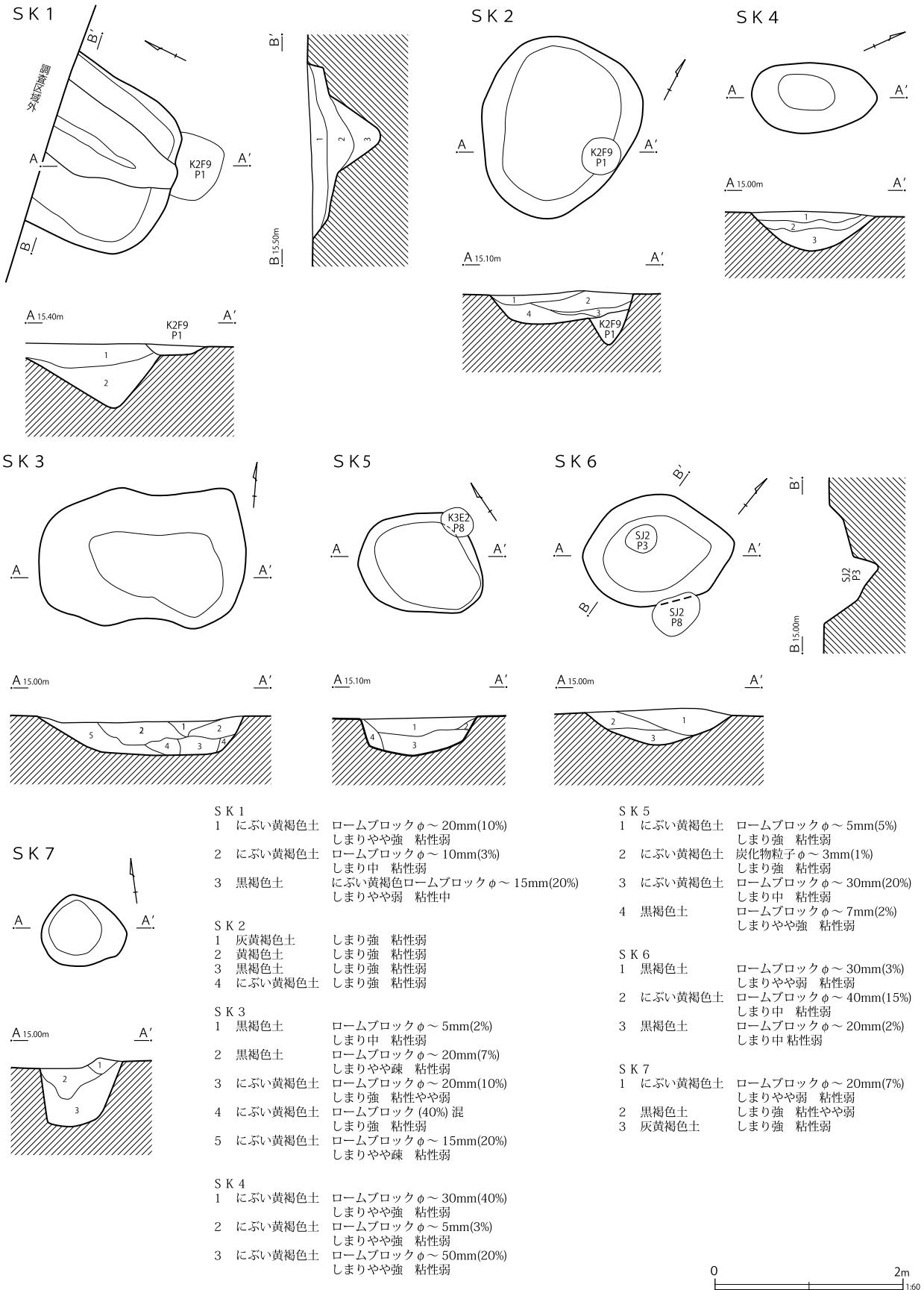
第12号土壙（第27図）

調査区中央のK 3-D 2グリッドに位置する。西側が調査区域外にかかり、平面形は不整形、断面形は逆台形を呈する比較的大型の土壙である。規模は長軸長2.92m以上、短軸長2.60m、深さ1.17mで、長軸方位はN-81°-Wを指す。

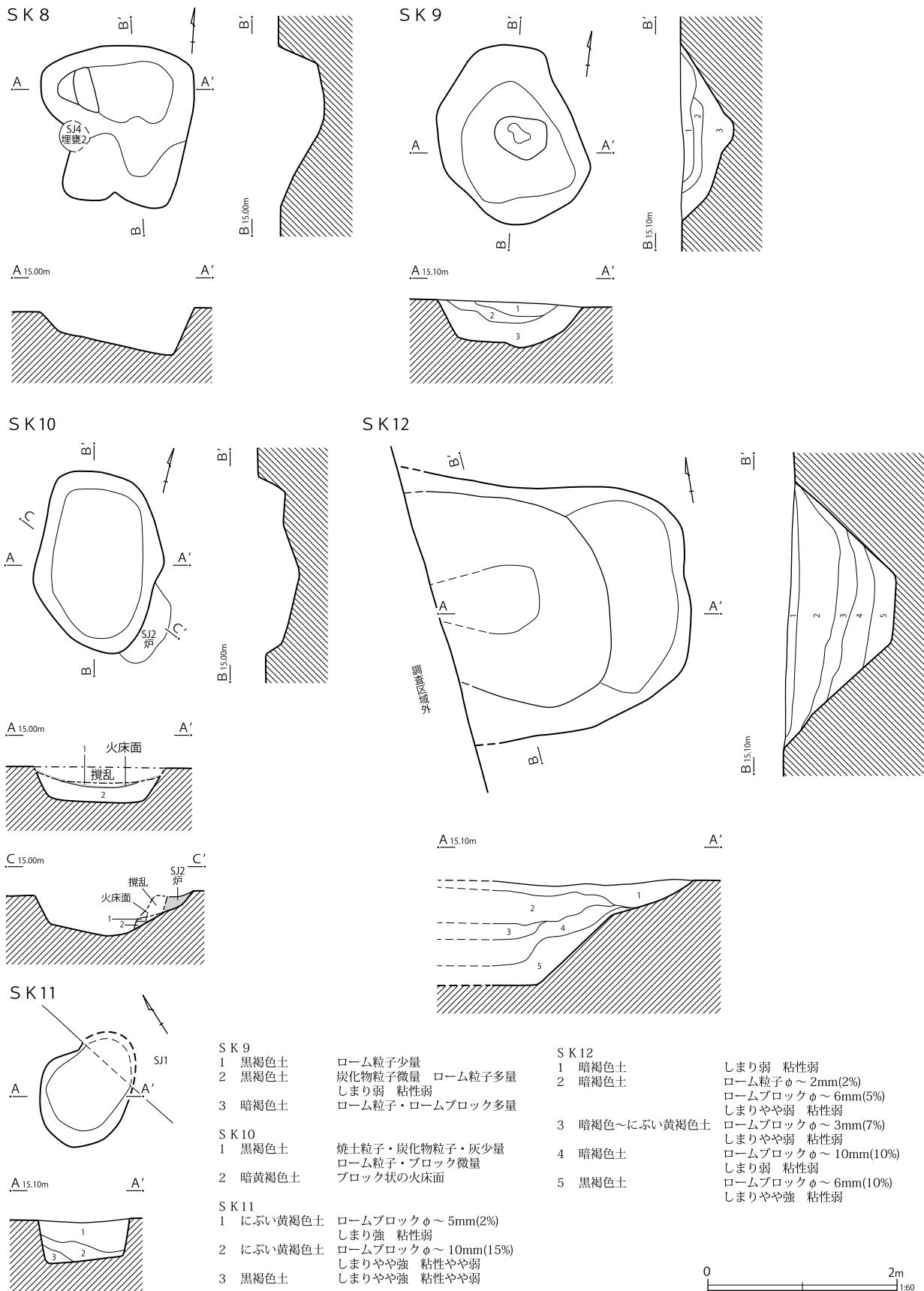
遺物は、縄文土器、土師器の小片が出土した。

第13号土壙（第29図）

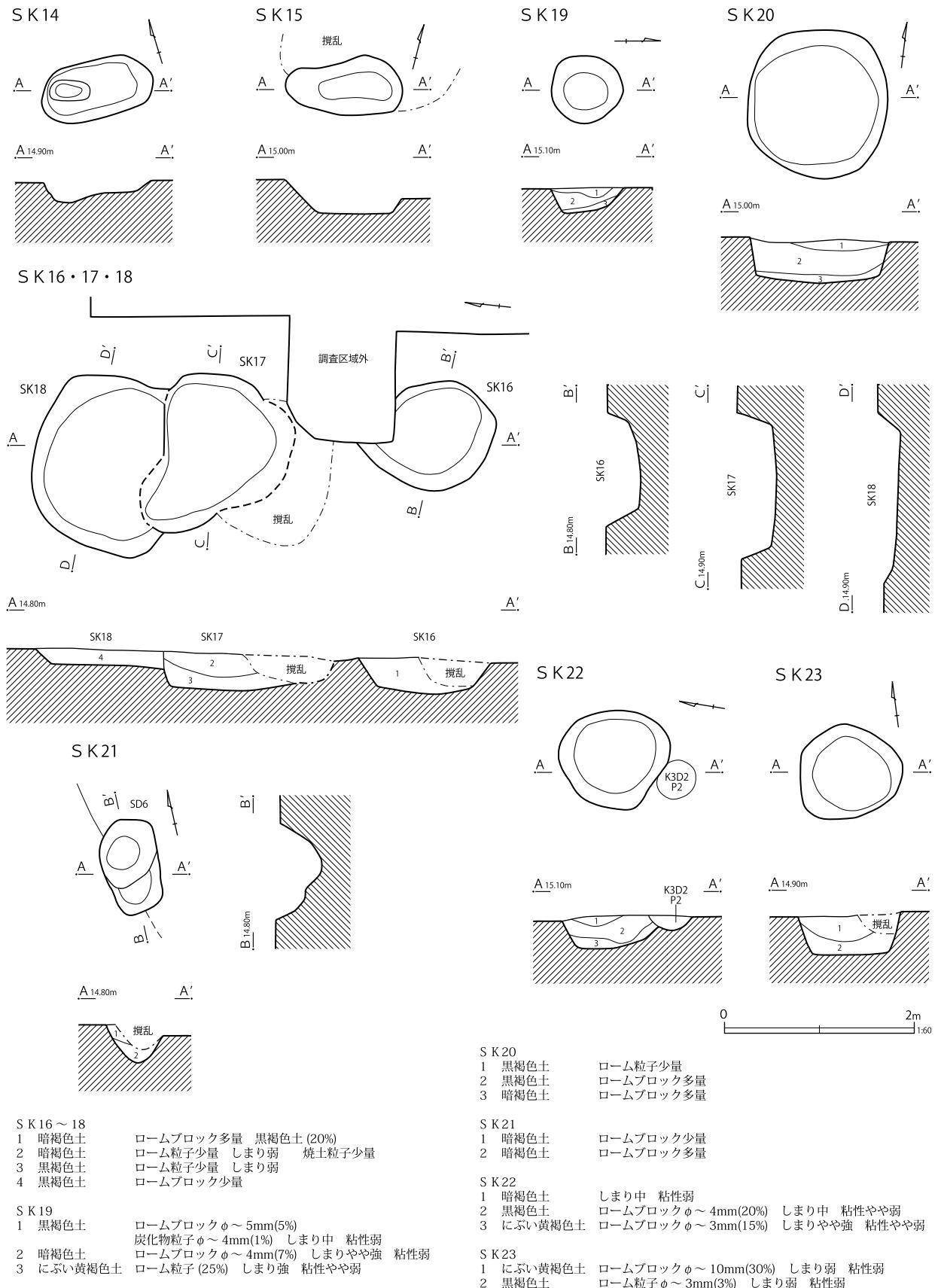
調査区東側のK 3-F 3グリッドに位置する。第30・35号土壙と重複し、それらを壊している。



第26図 土壌 (1)



第27図 土壌 (2)



第28図 土壌 (3)

平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長2.57m、短軸長1.83m、深さ0.43mで、長軸方位はN-75°-Eを指す。焼成土壙としたもので、火床面の上に炭化物・灰・焼土が薄く互層になっている。

遺物は、寛永通寶（第31図1）が出土した。

第14号土壙（第28図）

調査区中央南側のK3-F1グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は不整形である。規模は長軸長1.19m、短軸長0.61m、深さ0.27mで、長軸方位はN-86°-Wを指す。

第15号土壙（第28図）

調査区中央南側のK3-F1・F2グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.12m、短軸長0.56m、深さ0.41mで、長軸方位はN-75°-Eを指す。

遺物は、縄文土器、石斧、土師器、近世陶器・瓦の破片が出土した。

第16号土壙（第28図）

調査区南東端のK3-G2・G3グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.30m、短軸長1.15m、深さ0.38mで、長軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物は、縄文土器、近世瓦のほか、加工痕を残す緑泥片岩の破片（第31図2）が出土した。

第17号土壙（第28図）

調査区南東隅のK3-F2・F3グリッドに位置する。第18号土壙と重複し、それを壊している。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.77m、短軸長1.35m、深さ0.43mで、長軸方位はN-74°-Wを指す。

遺物は、近世陶器・瓦の破片が出土した。

第18号土壙（第28図）

調査区南東隅のK3-F2・F3グリッドに位置する。第17号土壙と重複し、壊されている。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.78m、短軸長1.30m以上、深さ0.27mで、長

軸方位はN-85°-Wを指す。

遺物は、近世陶器・瓦の破片が出土した。

第19号土壙（第28図）

調査区中央のK3-E2グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は逆台形である。規模は長軸長0.76m、短軸長0.70m、深さ0.29mで、長軸方位はN-1°-Wを指す。

遺物は、近世磁器・土器片が出土した。

第20号土壙（第28図）

調査区北側のK3-C2グリッドに位置する。平面形は円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.56m、短軸長1.45m、深さ0.49mで、長軸方位はN-6°-Wを指す。

遺物は、縄文土器、磨石、陶器片が出土した。

第21号土壙（第28図）

調査区中央のK3-D2グリッドに位置し、第6号溝跡の肩部に重複している。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.00m、短軸長0.60m、深さ0.48mで、長軸方位はN-6°-Wを指す。

第22号土壙（第28図）

調査区中央のK3-D2グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.17m、短軸長1.03m、深さ0.40mで、長軸方位はN-13°-Wを指す。

遺物は、常滑焼の甕の胴部破片（第31図3）が出土した。

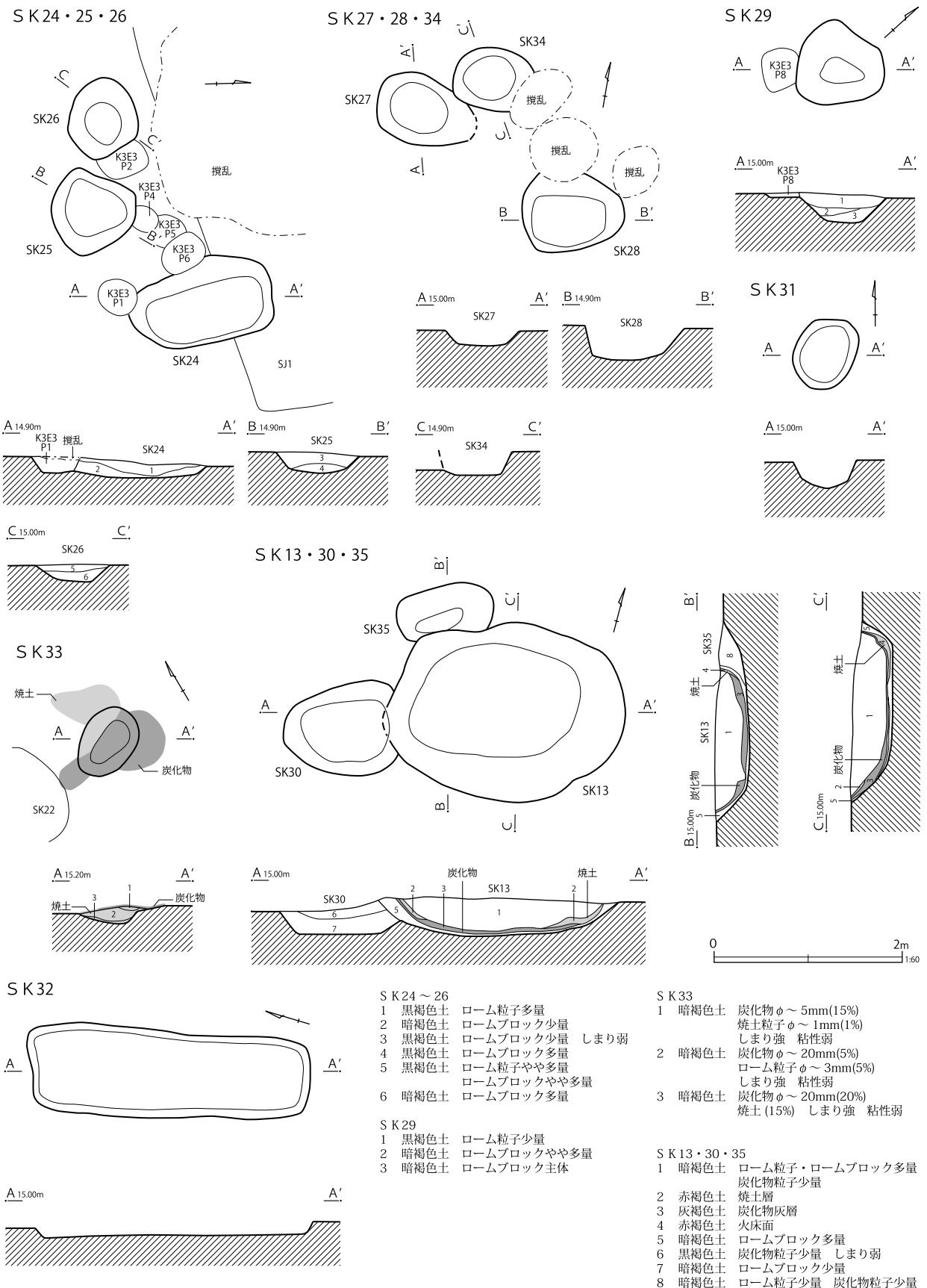
第23号土壙（第28図）

調査区中央南側のK3-F2グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.07m、短軸長1.00m、深さ0.46mで、長軸方位はN-7°-Eを指す。

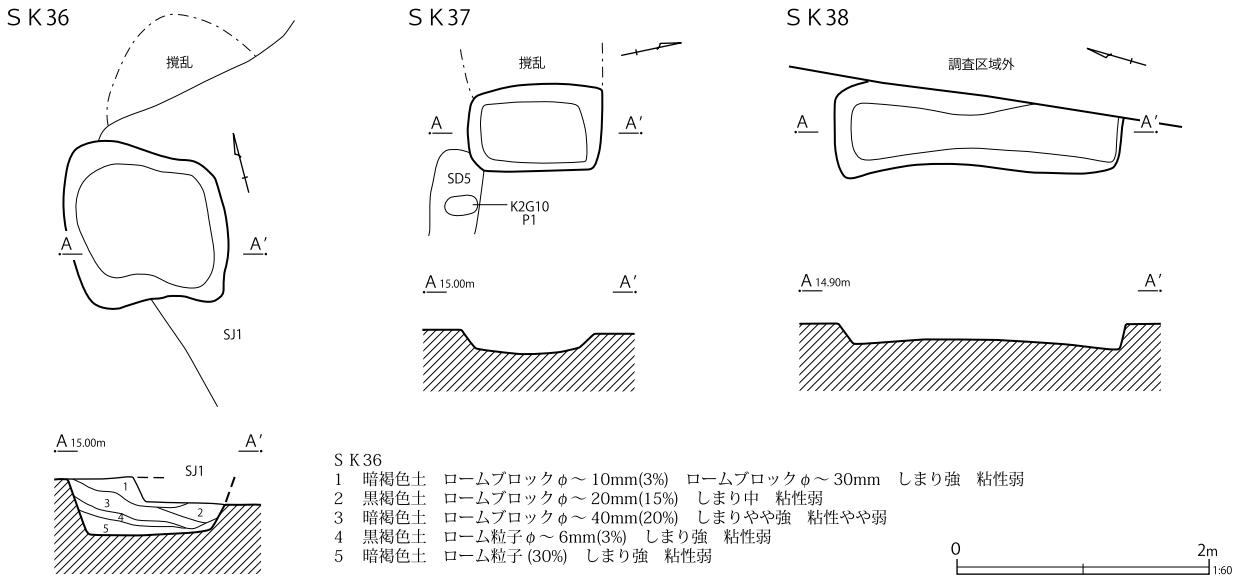
遺物は、縄文土器片のほか、近世の砥石、泥面子（第31図4・5）が出土した。

第24号土壙（第29図）

調査区東側のK3-E3グリッドに位置する。第1住居跡と重複し、それを壊している。平面



第29図 土壌 (4)



第30図 土壌 (5)

形は楕円形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.52m、短軸長0.92m、深さ0.24mで、長軸方位はN-12°-Wを指す。

第25号土壌 (第29図)

調査区東側のK3-E3グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長0.86m、短軸長0.85m、深さ0.24mで、長軸方位はN-32°-Eを指す。

第26号土壌 (第29図)

調査区東側のK3-E3グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長0.80m、短軸長0.77m、深さ0.19mで、長軸方位はN-51°-Wを指す。

第27号土壌 (第29図)

調査区中央のK3-E2グリッドに位置し、第34号土壌と重複する。平面形は楕円形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.10m、短軸長0.74m、深さ0.17mで、長軸方位はN-80°-Wを指す。

遺物は、近世土器、瓦の破片が出土した。

第28号土壌 (第29図)

調査区中央東側のK3-E2・E3グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.06m、短軸長0.85m、深さ0.38mで、長軸方位はN-72°-Eを指す。

遺物は、縄文土器、土師器片のほか、近世瓦の破片が出土した。

第29号土壌 (第29図)

調査区東側のK3-E3グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は逆台形である。規模は長軸長0.92m、短軸長0.89m、深さ0.30mで、長軸方位はN-41°-Eを指す。

第30号土壌 (第29図)

調査区東側のK3-F3グリッドに位置する。第13号土壌と重複し、壊される。平面形は不整形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.11m以上、短軸長0.97m、深さ0.47mで、長軸方位はN-74°-Eを指す。

遺物は、縄文土器、かわらけ片が出土した。

第31号土壌 (第29図)

調査区中央のK3-E2グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は不整形である。規模は長軸長0.79m、短軸長0.62m、深さ0.25mで、長軸方位はN-32°-Eを指す。

遺物は、土師器片のほか、近世土器の破片が出土した。

第32号土壌 (第29図)

調査区中央南側のK3-F2グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模

は長軸長2.94m、短軸長0.88m、深さ0.18mで、長軸方位はN-15°-Wを指す。

第33号土壙（第29図）

調査区中央のK 3-D 2 グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長0.87m、短軸長0.62m、深さ0.17mで、長軸方位はN-49°-Wを指す。焼成土壙で、覆土中には炭化物・焼土が含まれていた。

第34号土壙（第29図）

調査区中央のK 3-E 2 グリッドに位置し、第27号土壙と重複する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長0.85m、短軸長0.71m、深さ0.26mで、長軸方位はN-61°-Eを指す。

第35号土壙（第29図）

調査区東側のK 3-F 3 グリッドに位置する。第13号土壙と重複し、壊されている。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.03m、短軸長0.48m以上、深さ0.26mで、長軸方位はN-65°-Eを指す。

第36号土壙（第30図）

調査区中央のK 3-D 2 グリッドに位置する。第1号住居跡の北西隅部と重複し、壊している。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は

長軸長1.36m、短軸長1.12m、深さ0.43mで、長軸方位はN-71°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第37号土壙（第30図）

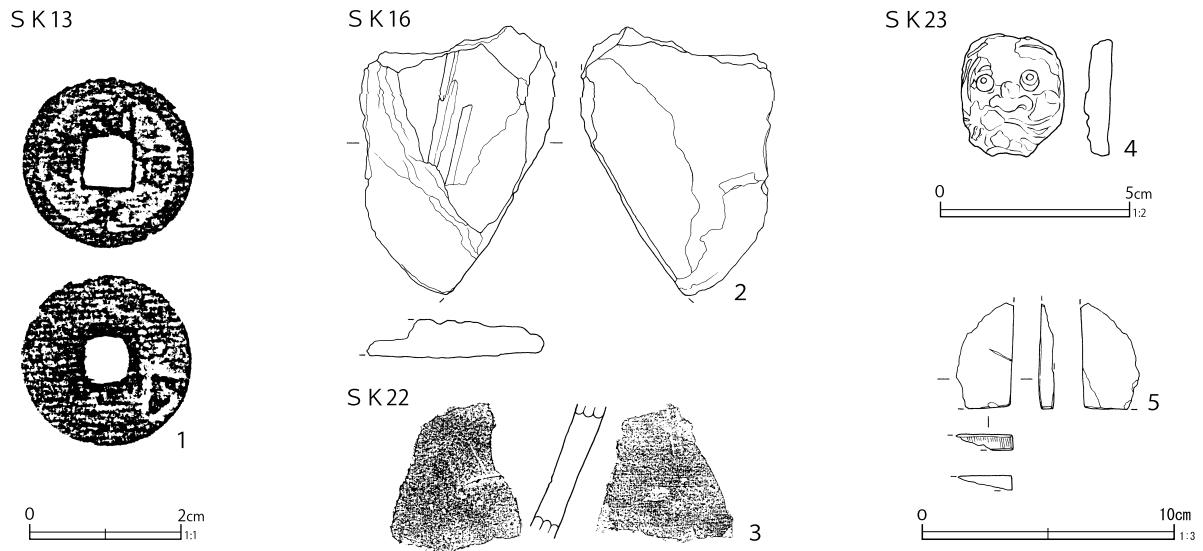
調査区西側のK 2-F 10 グリッドに位置し、第5号溝跡と重複する。前後関係については不明である。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.05m、短軸長0.69m、深さ0.24mで、長軸方位はN-12°-Eを指す。

第38号土壙（第30図）

調査区東側のK 3-E 3・F 3 グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸長2.27m、短軸長0.57m、深さ0.27mで、長軸方位はN-16°-Wを指す。

土壙出土遺物（第31図）

1は第13号土壙出土の寛永通寶である。新寛永（初鑄1697年）で、摩耗が激しく、銭名も不明瞭である。2は第16号土壙から出土した、鑿状工具による加工痕を残す緑泥片岩である。加工痕は断面三角形で、直線的に浅く彫り込まれる。板碑の一部とも考えたが、断定はできない。3は第22号土壙出土の常滑産陶器甕の胴部片である。唯一、中世に遡る可能性が考えられる。



第31図 土壙出土遺物

4・5は第23号土壙から出土した。4は泥面子である。摩滅が激しく、判然としないが、鬼面を表現したものと考えられる。裏面には指頭による

オサエが施されている。5は凝灰岩製の砥石の小片で、被熱により赤色化している。側縁部には櫛歯状工具による加工痕が残る。

第6表 土壙出土遺物観察表（第31図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	銭貨	寛永通寶	径2.27×2.28	厚さ0.11	重さ2.4 g					SK13 新寛永 一部欠損 全体に摩耗	18-5
2	石製品	不明	長さ[10.6]	幅[7.7]	厚さ1.6	重さ149.2 g	緑泥片岩			SK16 穩状工具による加工痕	18-6
3	陶器	甕	—	[5.4]	—	D E I	5	良好	灰褐	SK22 常滑産 内外面ナデ	18-7
4	土製品	泥面子	縦3.2×横2.7	厚さ0.7		I K	95	不良	橙	SK23 鬼面か 裏面指頭オサエ 重さ5.8 g	18-8
5	石製品	砥石	長さ[4.2]	幅[2.3]	厚さ[0.6]	重さ5.0 g	凝灰岩			SK23 側縁部櫛歯状工具 赤色化	18-9

第7表 土壙一覧表（第26～30図）

単位：m

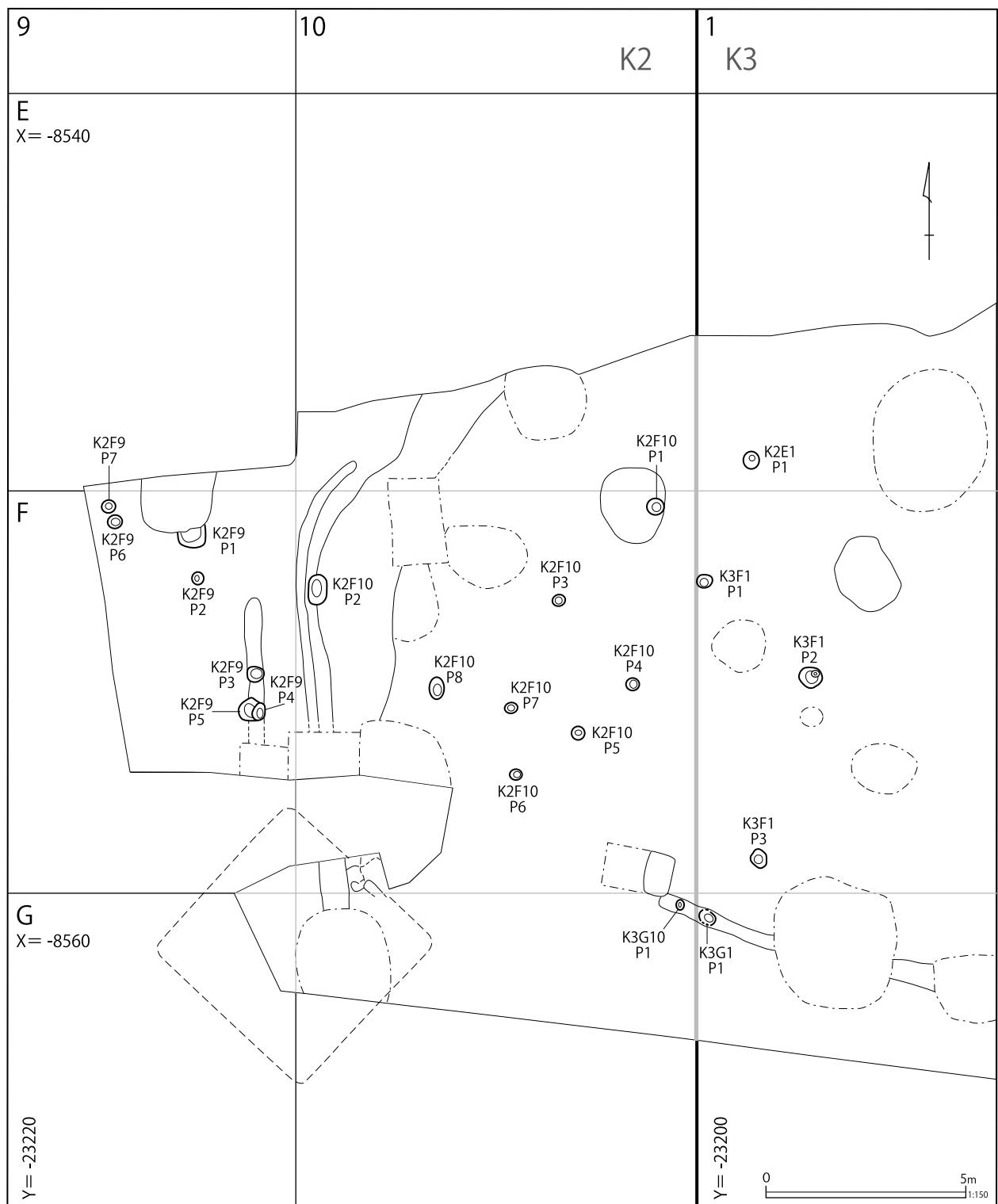
遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	遺物
第1号土壙	近世	K 2-F 9	K2-F9 P1	N-82°-E	1.85	[1.40]	0.79	方形か	葉研形	陶器
第2号土壙	近世	K 2-F 10	K2-F10 P1	N-7°-E	1.88	1.60	0.58	楕円形	不整形	
第3号土壙	近世	K 3-E 2・3	—	N-85°-W	2.20	1.30	0.51	不整形	鍋底形	
第4号土壙	近世	K 3-E 2	—	N-23°-E	1.33	0.75	0.42	楕円形	皿形	
第5号土壙	近世	K 3-E 2	—	N-44°-W	1.35	1.07	0.42	不整形	鍋底形	
第6号土壙	近世	K 3-E 2	SJ2 P3・P8・SJ4	N-48°-E	1.60	1.17	0.35	不整形	鍋底形	
第7号土壙	近世	K 3-F 1・2	—	N-61°-W	0.86	0.74	0.71	不整形	筒形	
第8号土壙	近世	K 3-E 2	SJ4 埋甕2	N-23°-W	1.81	1.48	0.53	不整形	不整形	
第9号土壙	近世	K 3-F 1	—	N-5°-W	1.87	1.47	0.60	不整形	不整形	
第10号土壙	近世	K 3-F 2	SJ2 炉跡	N-25°-W	1.95	1.30	0.44	不整形	鍋底形	
第11号土壙	近世	K 3-E 2	SJ1	N-24°-W	0.97	[0.95]	0.47	円形	鍋底形	焙烙・焼成粘土塊
第12号土壙	近世	K 3-D 2	—	N-81°-W	[2.92]	2.60	1.17	不整形	逆台形	
第13号土壙	近世	K 3-F 3	SK30・35	N-75°-E	2.57	1.83	0.43	不整形	皿形	瓦・寛永通寶
第14号土壙	近世	K 3-F 1	—	N-86°-W	1.19	0.61	0.27	楕円形	不整形	
第15号土壙	近世	K 3-F 1・2	—	N-75°-E	1.12	0.56	0.41	不整形	逆台形	陶器・瓦
第16号土壙	近世	K 3-G 2・3	—	N-36°-W	1.30	1.15	0.38	不整形	逆台形	瓦・緑泥片岩
第17号土壙	近世	K 3-F 2・3	SK18	N-74°-W	1.77	1.35	0.43	不整形	皿形	陶器・瓦
第18号土壙	近世	K 3-F 2・3	SK17	N-85°-W	1.78	[1.30]	0.27	不整形	皿形	陶器・瓦
第19号土壙	近世	K 3-E 2	—	N-1°-W	0.76	0.70	0.29	円形	逆台形	磁器・土器
第20号土壙	近世	K 3-C 2	—	N-6°-W	1.56	1.45	0.49	円形	鍋底形	陶器
第21号土壙	近世	K 3-D 2	SD6	N-6°-W	1.00	0.60	0.48	不整形	鍋底形	
第22号土壙	近世	K 3-D 2	K3-D2 P2 SK33(焼土)	N-13°-W	1.17	1.03	0.40	楕円形	鍋底形	陶器
第23号土壙	近世	K 3-F 2	—	N-7°-E	1.07	1.00	0.46	楕円形	鍋底形	砥石・泥面子
第24号土壙	近世	K 3-E 3	SJ1・K3-E3 P1・P6	N-12°-W	1.52	0.92	0.24	楕円形	皿形	
第25号土壙	近世	K 3-E 3	K3-E3 P4	N-32°-E	0.86	0.85	0.24	不整形	鍋底形	
第26号土壙	近世	K 3-E 3	K3-E3 P2	N-51°-W	0.80	0.77	0.19	不整形	鍋底形	
第27号土壙	近世	K 3-E 2	SK34	N-80°-W	1.10	0.74	0.17	楕円形	逆台形	土器・瓦
第28号土壙	近世	K 3-E 2・3	—	N-72°-E	1.06	0.85	0.38	不整形	逆台形	瓦
第29号土壙	近世	K 3-E 3	K3-E3 P8	N-41°-E	0.92	0.89	0.30	不整形	逆台形	
第30号土壙	近世	K 3-F 3	SK13	N-74°-E	[1.11]	0.97	0.47	不整形	逆台形	かわらけ
第31号土壙	近世	K 3-E 2	—	N-32°-E	0.79	0.62	0.25	楕円形	不整形	土器
第32号土壙	近世	K 3-F 2	—	N-15°-W	2.94	0.88	0.18	長方形	皿形	
第33号土壙	近世	K 3-D 2	—	N-49°-W	0.87	0.62	0.17	不整形	皿形	
第34号土壙	近世	K 3-E 2	SK27	N-61°-E	0.85	0.71	0.26	不整形	鍋底形	
第35号土壙	近世	K 3-F 3	SK13	N-65°-E	1.03	[0.48]	0.26	楕円形	鍋底形	
第36号土壙	近世	K 3-D 2	SJ1	N-71°-W	1.36	1.12	0.43	不整形	鍋底形	
第37号土壙	近世	K 2-F 10	SD5	N-12°-E	1.05	0.69	0.24	長方形	皿形	
第38号土壙	近世	K 3-E・F 3	—	N-16°-W	2.27	0.57	0.27	長方形	皿形	

(3) ピット

調査区全体からピット44基を検出した（第32～34図）。平面形は、円形もしくは橢円形のものが大半である。

規模は直径30～50cmのものが多く、深さは7～77cmと一様ではないが、概ね20～50cmにまとまっている（第8表）。

覆土は暗褐色土や黒褐色土、灰褐色土が主体で、



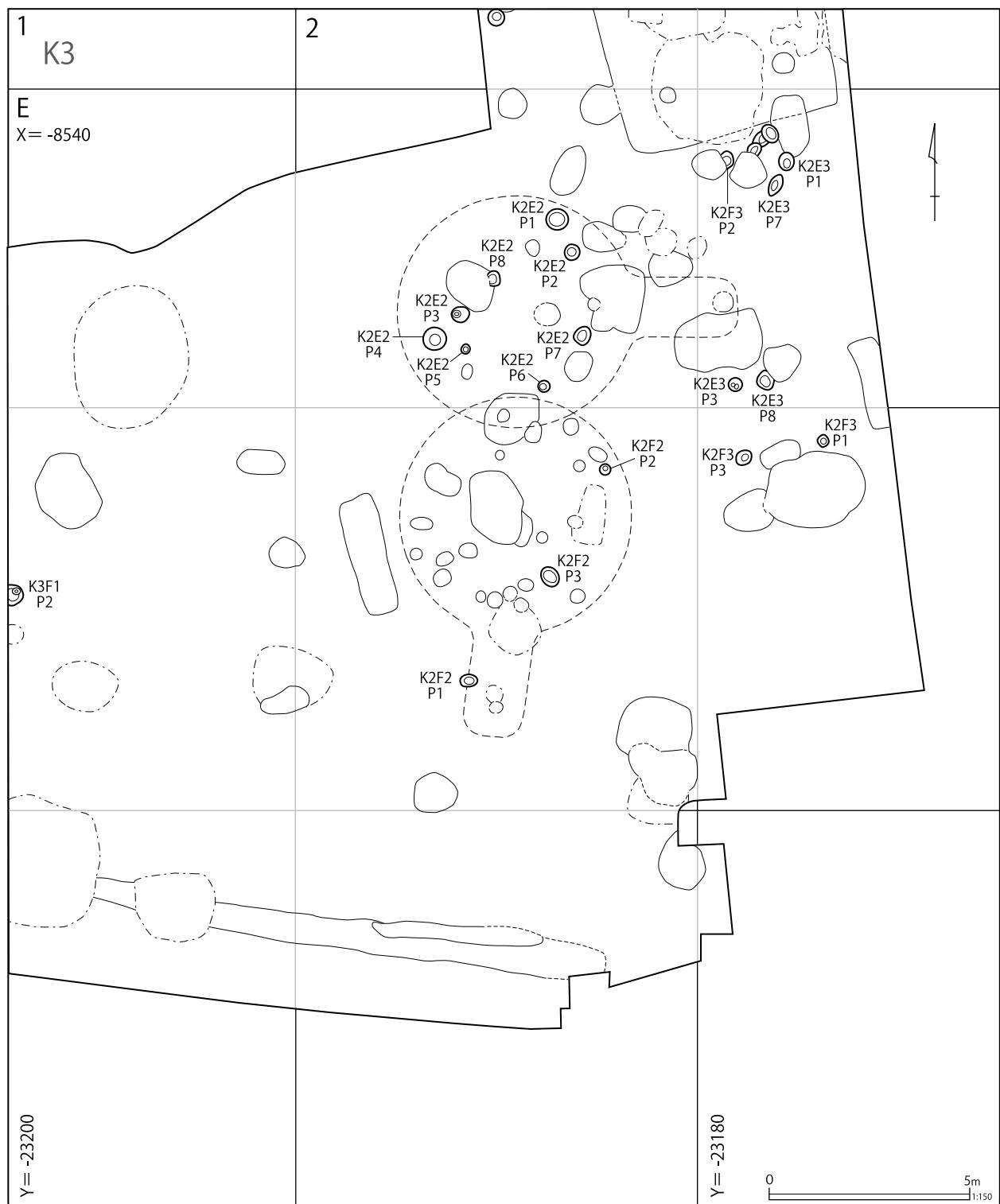
第32図 ピット分布図（1）

全体にしまりのないものである。

調査区内に散在した分布状況を示しているが、第3号溝跡東側のK 2-F 10グリッド、第4号住居跡周辺のK 3-E 2・3グリッドにやや集中が

認められる。

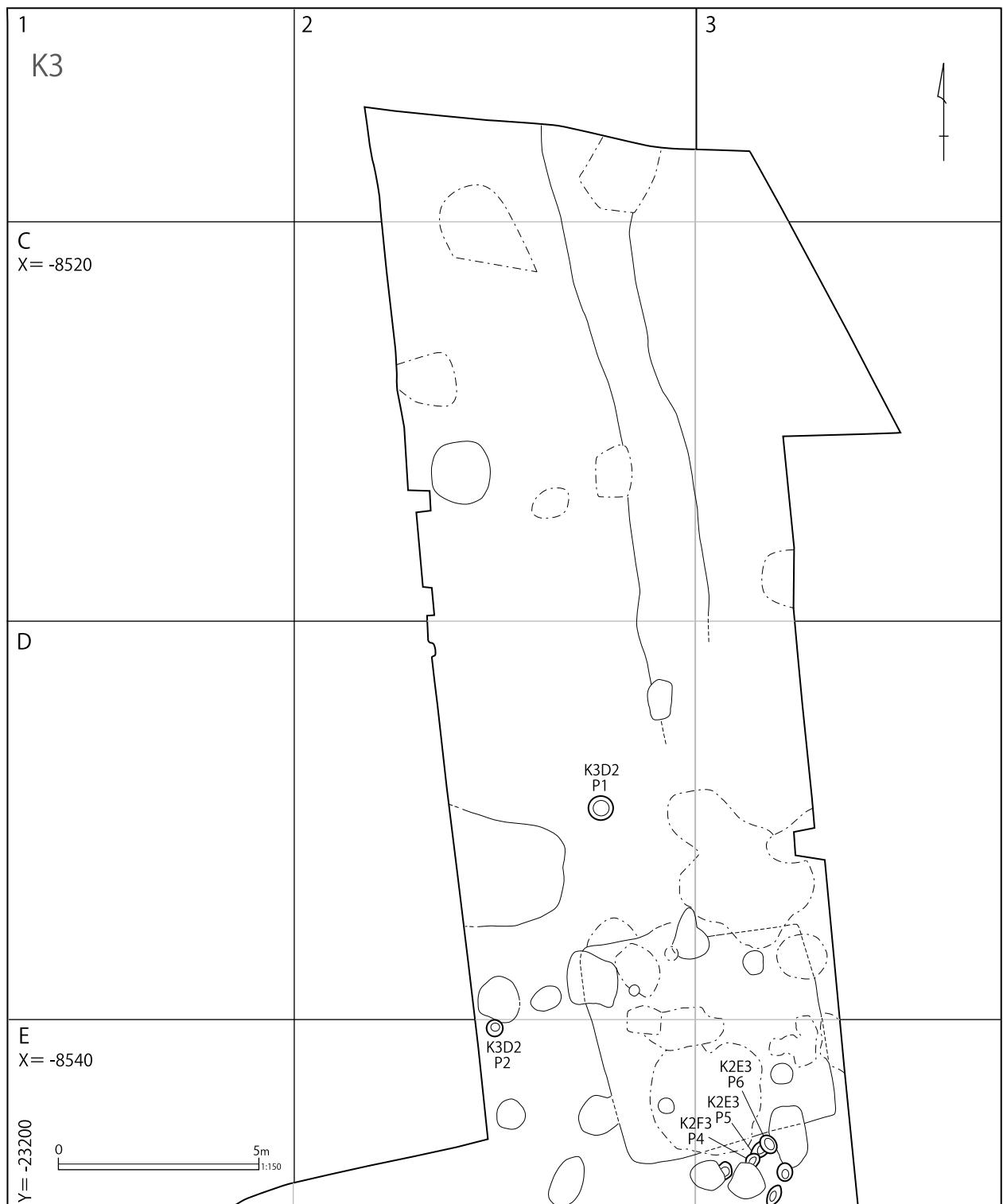
ただ、視点を変えてみると、調査区外縁を巡る各溝跡によって囲まれた範囲内にその大半が納まっているともいえる。



第33図 ピット分布図 (2)

ピットの配列や配置、覆土の状態には、建物跡や柵列跡の存在を積極的にうかがわせるような規則性や柱痕跡を残すものはなかった。単独の柱穴が多いものと考えられる。

遺物を出土するものがほとんどなく、詳細な時期を判断することは難しい。覆土の状態から推して、近世以降に帰属するものと思われる。



第34図 ピット分布図 (3)

第8表 ピット一覧表 (第32~34図)

単位: m

グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考	グリッド	番号	長径	短径	深さ	備考
K 2-F 9	P 1	0.68	0.48	0.13	SK1	K 3-E 2	P 4	0.58	0.56	0.25	
K 2-F 9	P 2	0.31	0.28	0.33		K 3-E 2	P 5	0.23	0.22	0.17	
K 2-F 9	P 3	0.42	0.38	0.23	SD1	K 3-E 2	P 6	0.28	0.27	0.21	
K 2-F 9	P 4	0.44	0.31	0.33	SD1・K2-F9 P5	K 3-E 2	P 7	0.46	0.39	0.27	
K 2-F 9	P 5	0.58	0.35	0.26	SD1・K2-F9 P4	K 3-E 2	P 8	0.35	0.23	0.29	SK5
K 2-F 9	P 6	0.36	0.33	0.25		K 3-E 3	P 1	0.42	0.37	0.17	SK24
K 2-F 9	P 7	0.34	0.30	0.32		K 3-E 3	P 2	0.50	0.30	0.10	SK26
K 2-F 10	P 1	0.40	0.40	0.53	SK2	K 3-E 3	P 3	0.35	0.34	0.30	
K 2-F 10	P 2	0.76	0.46	0.46	SD3	K 3-E 3	P 4	0.27	0.26	0.11	SK25・K3-E3 P5
K 2-F 10	P 3	0.30	0.26	0.34		K 3-E 3	P 5	0.35	0.23	0.13	K3-E3 P4・K3-E3 P6
K 2-F 10	P 4	0.30	0.25	0.32		K 3-E 3	P 6	0.49	0.36	0.28	SK24・K3-E3 P5
K 2-F 10	P 5	0.29	0.27	0.13		K 3-E 3	P 7	0.56	0.29	0.11	
K 2-F 10	P 6	0.28	0.25	0.18		K 3-E 3	P 8	0.42	0.37	0.07	SK29
K 2-F 10	P 7	0.28	0.26	0.15		K 3-F 1	P 1	0.39	0.33	0.60	
K 2-F 10	P 8	0.42	0.32	0.47		K 3-F 1	P 2	0.53	0.50	0.29	
K 2-G 10	P 1	0.25	0.15	0.77	SD5	K 3-F 1	P 3	0.43	0.38	0.15	
K 3-D 2	P 1	0.57	0.55	0.15		K 3-F 2	P 1	0.37	0.30	0.15	
K 3-D 2	P 2	0.41	0.36	0.13	SK22	K 3-F 2	P 2	0.27	0.26	0.17	
K 3-E 1	P 1	0.40	0.35	0.29		K 3-F 2	P 3	0.52	0.43	0.15	
K 3-E 2	P 1	0.53	0.51	0.10		K 3-F 3	P 1	0.28	0.25	0.13	
K 3-E 2	P 2	0.39	0.37	0.16		K 3-F 3	P 2	0.34	0.34	0.48	
K 3-E 2	P 3	0.44	0.38	0.41		K 3-G 1	P 1	0.42	0.30	0.61	SD5

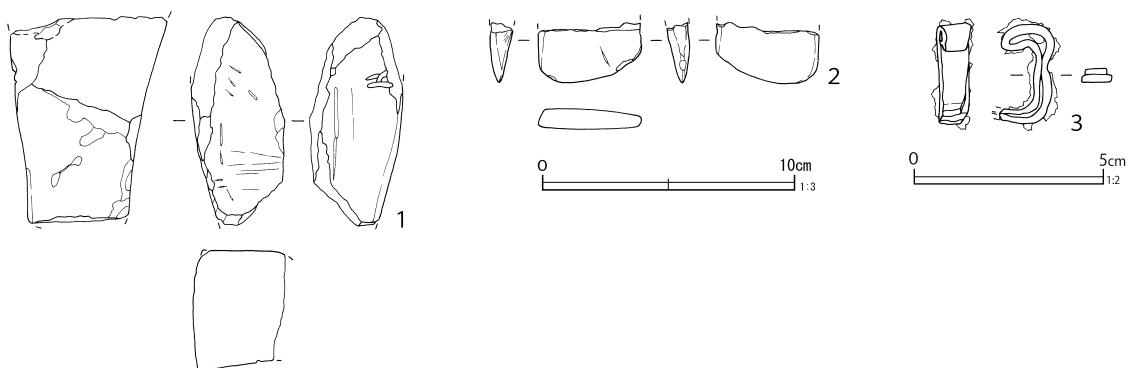
(4) グリッド出土遺物

表土掘削や遺構確認時に出土した近世遺物には、砥石と鉄製品がある(第35図)。

1・2は凝灰岩製の砥石である。1は図示した上下端部及び右側面を欠損している。厚みのある砥石であり、砥面には刃物傷が残っている。

2は小型の砥石と推定されることから、携帯品であろうか。側縁部には製作時の櫛歯状工具痕が見られる。

3は二つ折にした延板をコの字状に折り曲げた鉄製品である。端部を欠損しているため、全体の形状や用途については不明である。



第35図 グリッド出土遺物

第9表 グリッド出土遺物観察表 (第35図)

番号	種別	器種	法量(cm)・石材	備考	図版
1	石製品	砥石	長さ[8.2] 幅[3.7] 厚さ6.2 重さ208.2 g 凝灰岩	K3-G2G 砥面3面 刃物痕	18-10
2	石製品	砥石	長さ[2.4] 幅 4.1 厚さ0.9 重さ8.2 g 凝灰岩	K2-F10G 砥面4面 側縁部櫛歯状工具	18-11
3	鉄製品	不明品	長さ[2.6] 幅 1.4 重さ3.7 g	K3-F3G 二重に延板を折り曲げている	18-12

V 高木氷川遺跡の調査

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡 (第36・37図)

調査区南側中央のC-2グリッドに位置する。第6・7号土壙によって東壁及び床面の一部が壊されている。平面形は長軸長3.34m、短軸長3.15mの隅丸方形で、壁高は最も深い部分で0.23mである。主軸方位はN-112°-Wを指す。床面は平坦で、壁の直下を壁溝がほぼ一巡している。

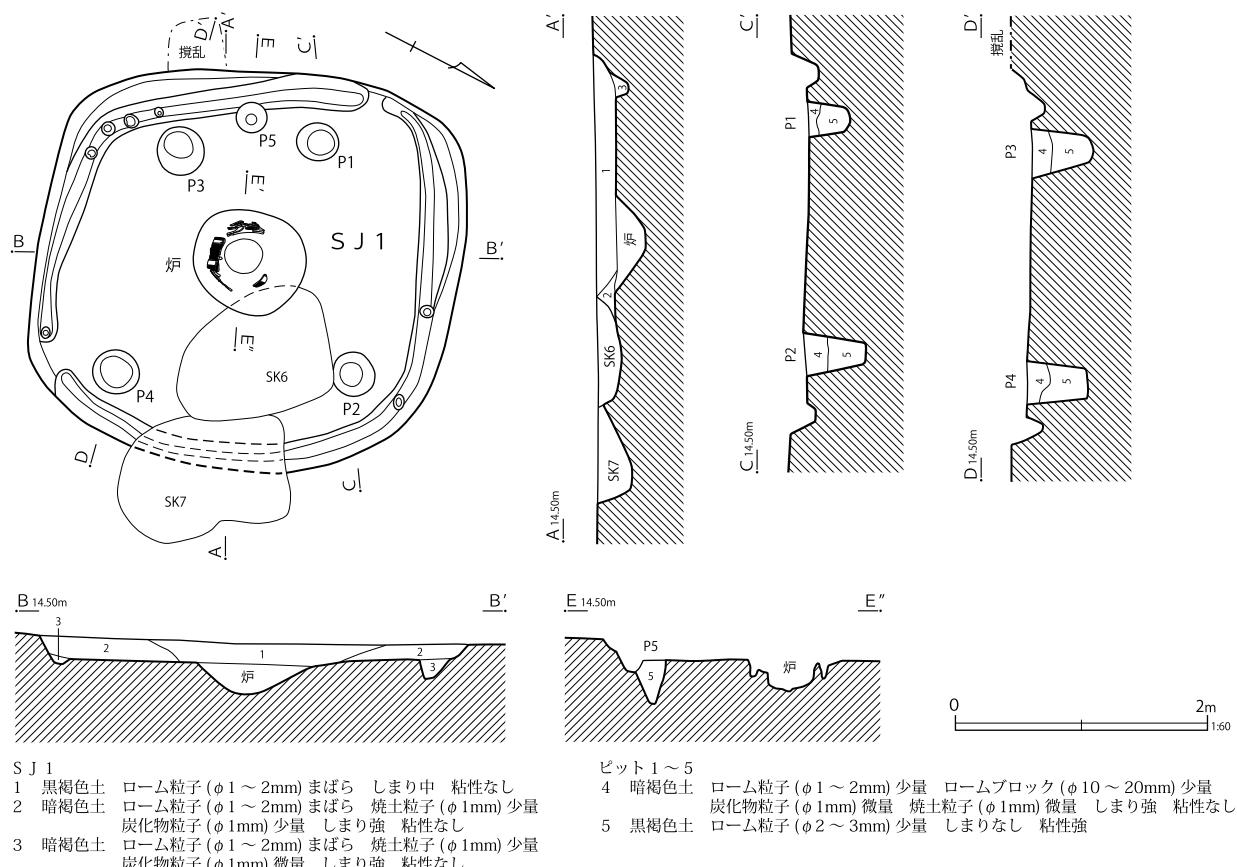
床面上から5本の柱穴が検出された。このうち台形に配列されたP1~4が、主柱穴と考えられる。柱穴の間隔の広いP2とP4の間が、入口部であろう。奥壁側にあたるP1とP3のほぼ真中に見つかったP5は、主柱穴に比べると掘り込みが浅く、副次的なものと考えられる。柱穴の土層

は、抜き取り後の自然堆積を示している。

床面のほぼ中央に炉跡が検出された。深鉢形土器の破片を炉体に用いた土器片囲い炉である。深鉢の破片を突き立て、ロームブロックを用いて入念に裏込めを行い、隙間には石器や土器片が充填されていた。火床面は、被熱により地山が赤色硬化している。接合の結果、炉体土器(1)は口縁部の大半と胴部の中位以下を欠損していた。

覆土は大きく2層に分けられる。遺物は炉跡の周辺から、深鉢形土器(2)や脚付石皿(36)、打製石斧(28)、敲石(31)などの石器片が、第1層を中心に床面から少し浮いた状態で出土した。

本住居跡の所属時期は、出土遺物から中期後半の加曾利EⅢ式期の古い時期と考えられる。



第1号住居跡出土遺物

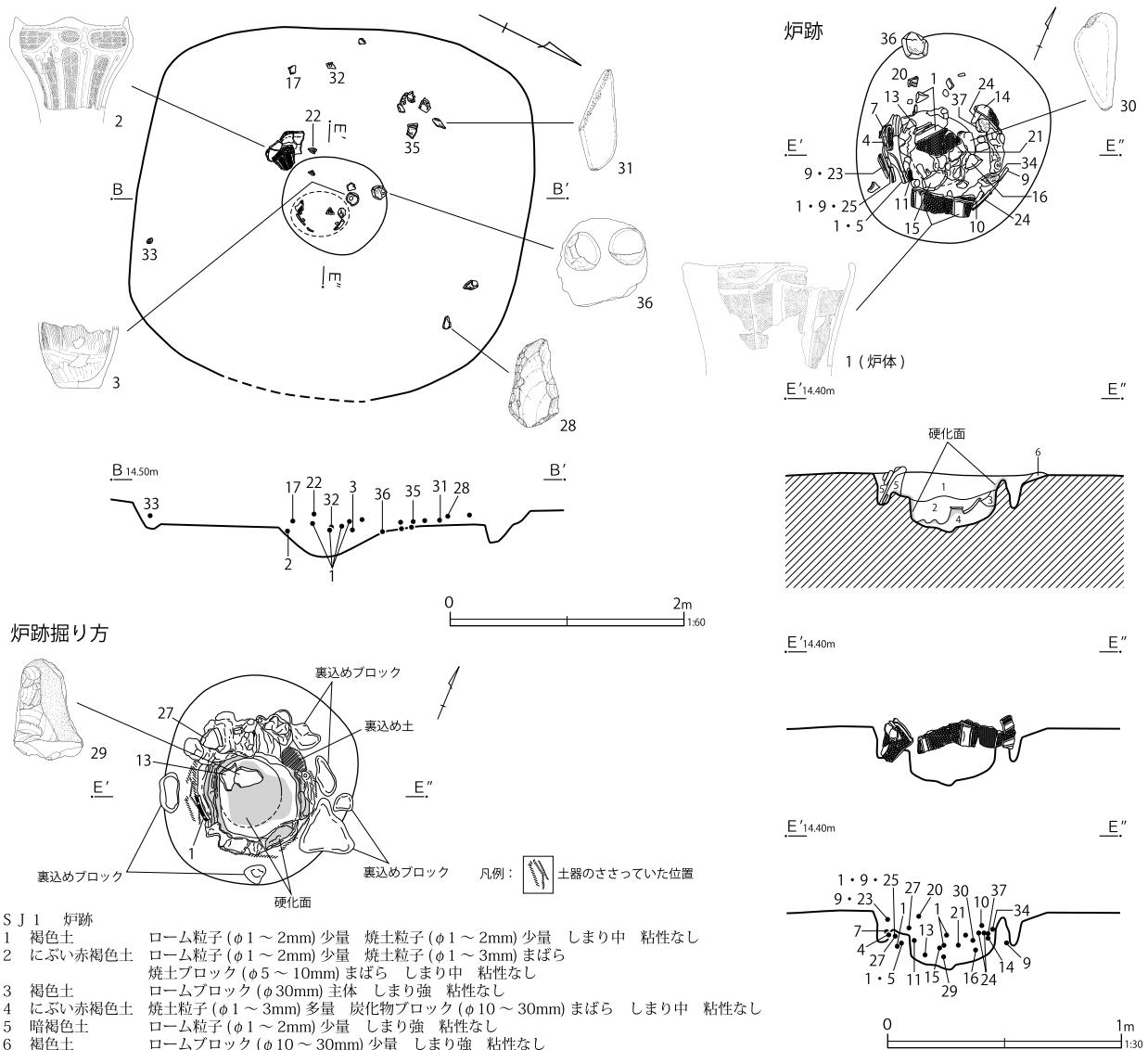
土器 (第38・39図)

1は大型の深鉢形土器である。器形に比して幅の狭い口縁部文様帶には、隆帯による渦巻き文と長方形の区画文が配されているが、全体の構成はやや扁平な横S字状となる。口縁部文様を描く隆帯に接して平行沈線による懸垂文が施される。地文は原体L Rで、口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文される。懸垂文は、地文施文後に沈線を描き、沈線間が磨消されている。推定口径52.0cm、現存高34.2cm。胎土は砂粒がやや多く、少量の小礫を含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

2は口縁部文様帯を持ち、文様は沈線主導で描かれ、胴部の懸垂文間に、単沈線による蕨手状の沈線が垂下している。地文は原体L Rで、口縁部は横方向、胴部は縦方向に施文されている。縄文施文後、沈線を描き、さらに磨消される。口径25.0cm、現存高21.0cmを測る。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、色調は明黄褐色である。

3は器面に指頭によるナデが施されている。文様は櫛状工具による条線と考えられる。底径6.2cm、現存高10.4cmを測る。胎土は細砂粒を多量に含む。焼成は普通で、色調は明褐色である。

4～20はキャリパー形の深鉢形土器である。4



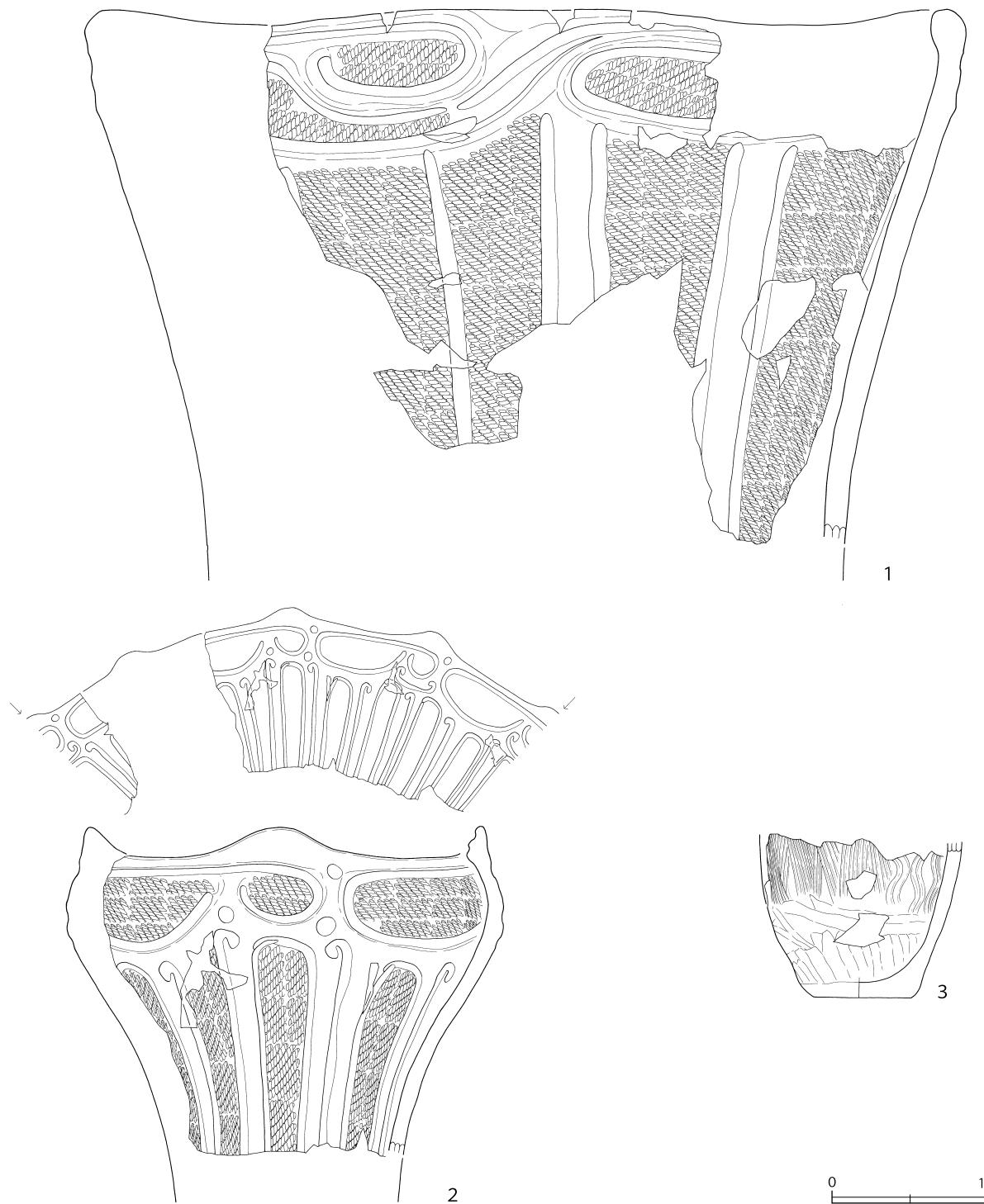
第37図 第1号住居跡 (2)

～6は口縁部文様帶、7～9は口縁部から胴部にかけての破片である。いずれも磨消沈線文が施され、18のみ微隆起状の隆帶を持つ。21・22は条線を地文とする深鉢形土器で、曾利系と思われる。

23～25は浅鉢形土器の破片である。このうち

24・25は同一個体と考えられるもので、肩部に沈線で区画した文様を持ち、区画内側の地文は縄文、ほかは条線が施されている。

26は壺形土器の破片、27は浅鉢形土器の底部である。

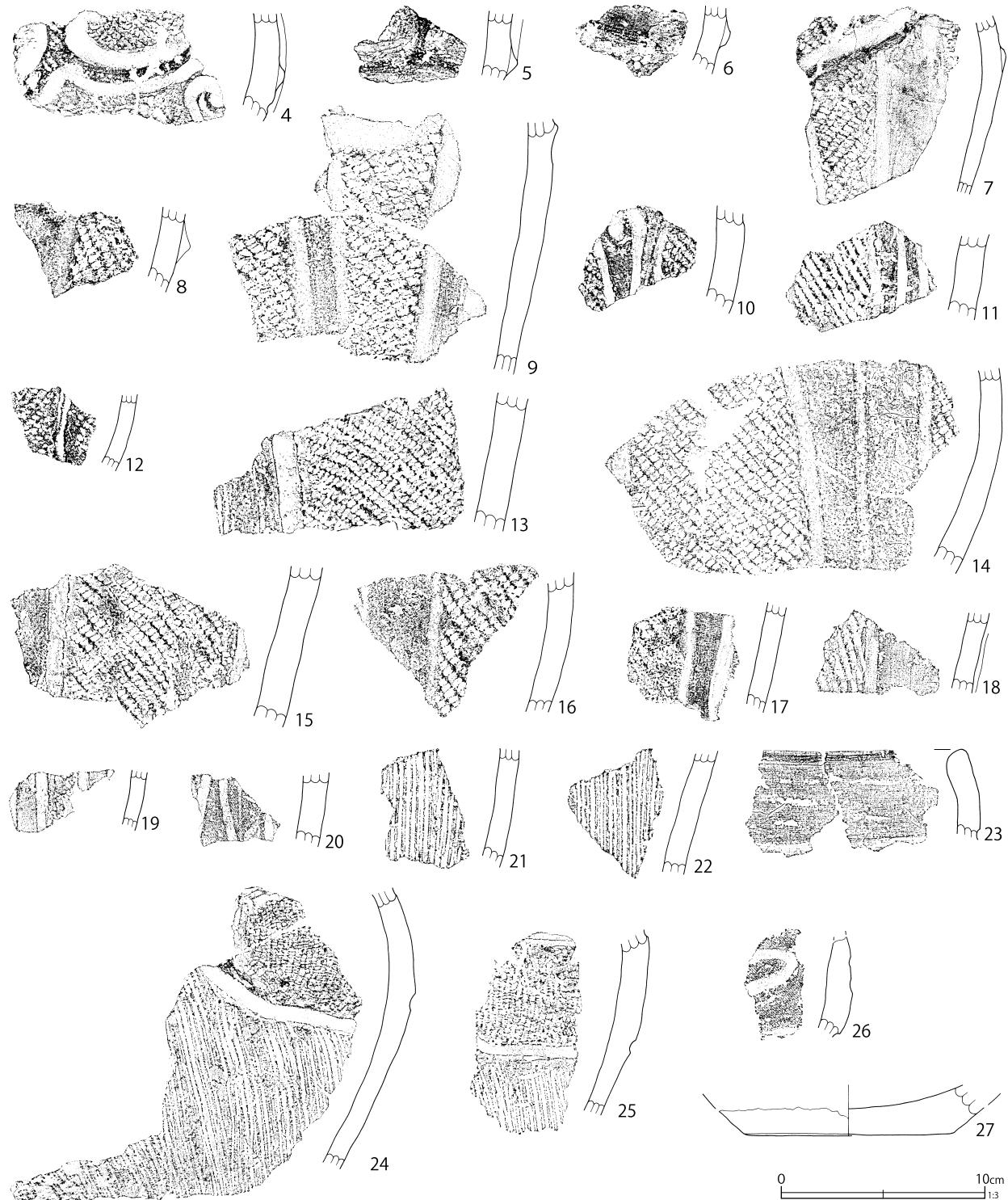


第38図 第1号住居跡出土遺物（1）

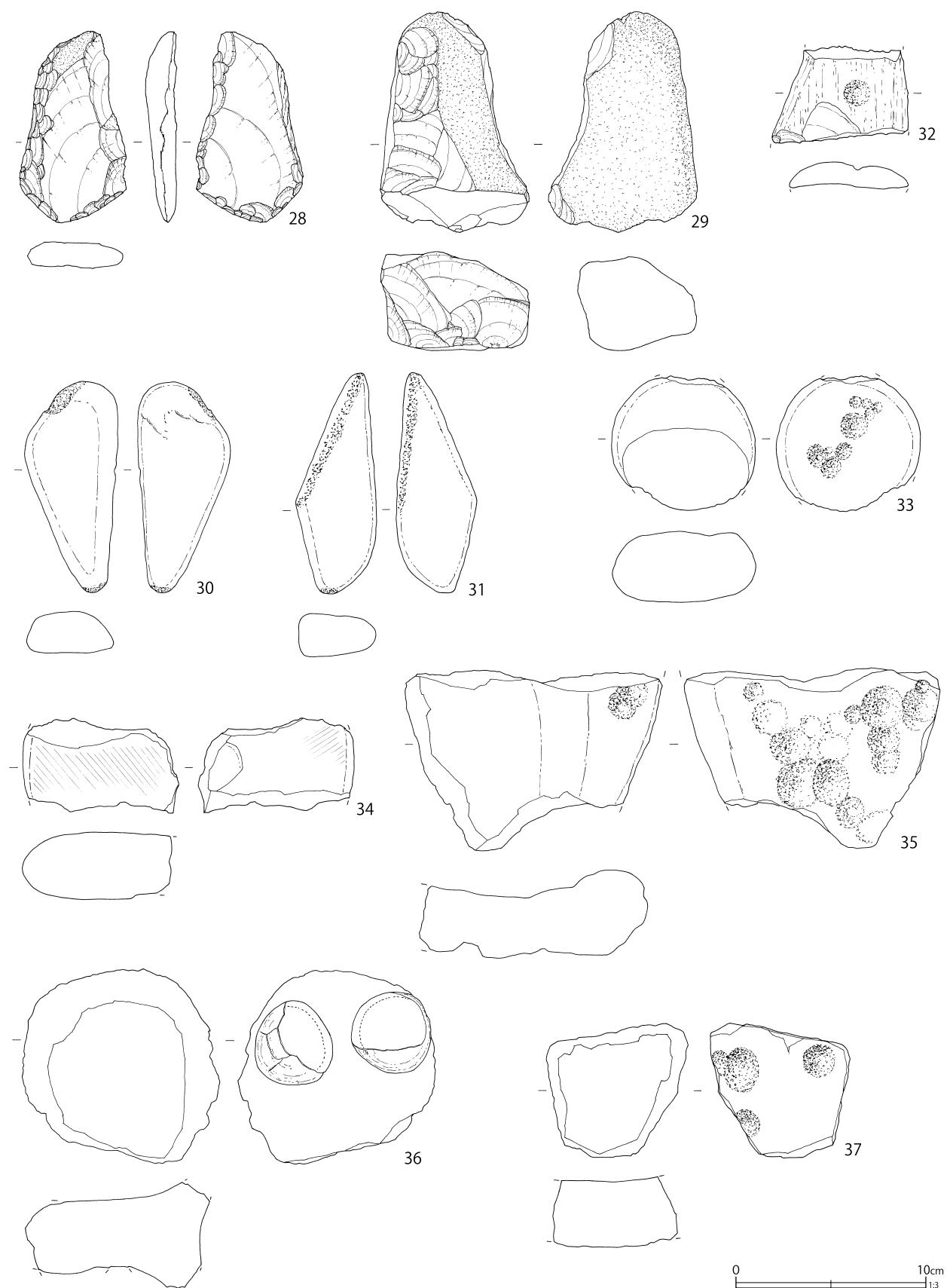
石器 (第40図)

28は打製石斧である。形状は撥形を呈している。正面と裏面に同一打点からの分割面を大きく残している。自然面と両分割面の関係から、扁平な楕円礫を三枚

に下ろす様に分割したものを素材としたことがうかがえる。調整加工は、裏面両側縁に平坦剥離、正面はやや急角度の剥離が周縁に施されている。29はいわゆるスタンプ形石器である。縄文時代中期にも少ないが存在する。底面は裏面方向からの



第39図 第1号住居跡出土遺物 (2)



第40図 第1号住居跡出土遺物（3）

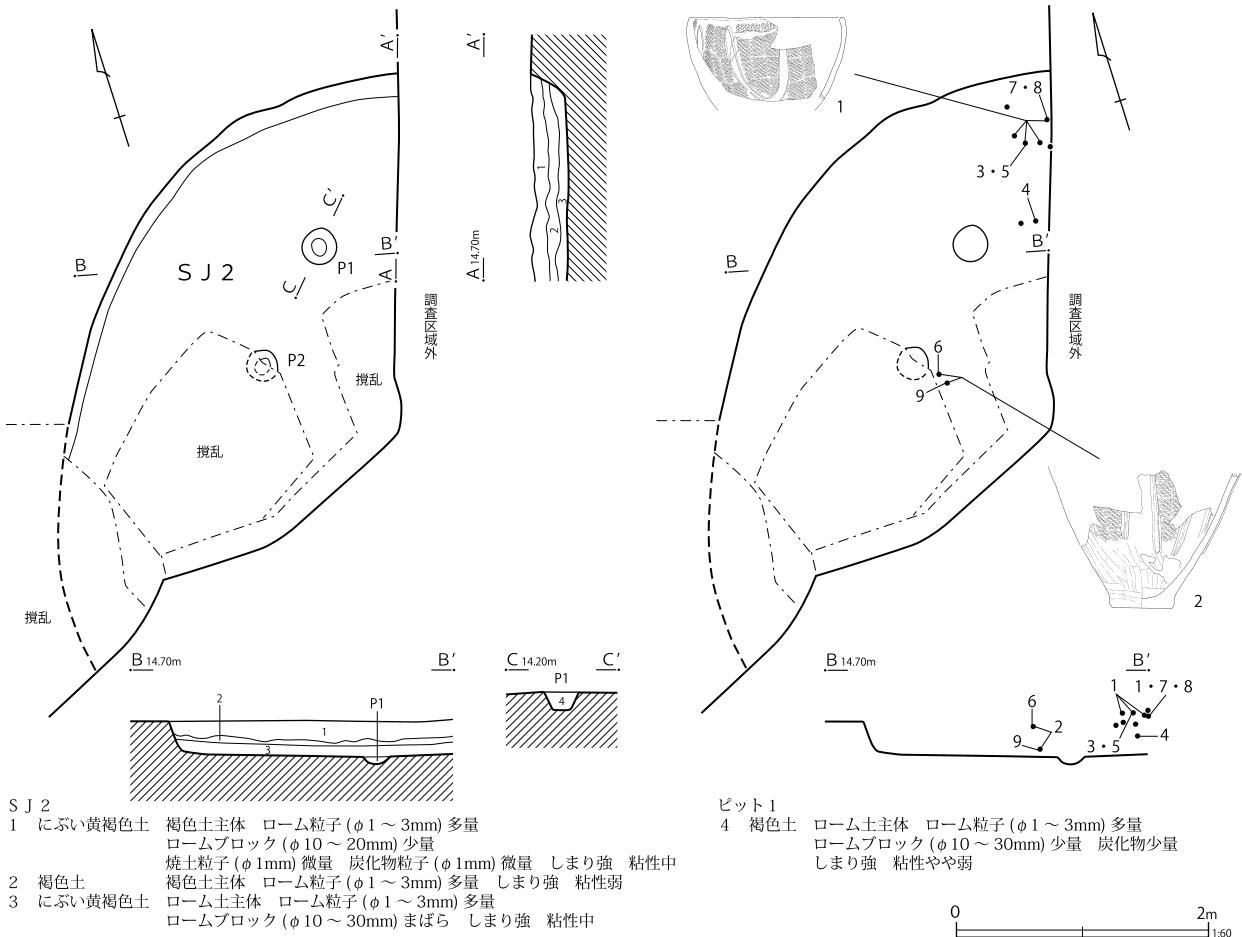
第10表 第1号住居跡出土石器観察表 (第40図)

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
28	打製石斧	砂岩	10.0	5.6	1.7	98.6	SJ1 №2	37-3
29	スタンプ形石器	ホルンフェルス	11.5	7.8	5.2	546.4	SJ1 №34	37-3
30	敲石	砂岩	11.1	4.9	2.2	138.2	SJ1 №21	37-3
31	敲石	砂岩	11.6	4.2	3.3	158.9	SJ1 №13	37-3
32	凹石	雲母片岩	[5.1]	[7.2]	1.4	64.9	SJ1 №3	37-3
33	磨石	安山岩	[7.1]	7.6	4.0	174.3	SJ1 №12	37-3
34	磨石	安山岩	[5.0]	[8.2]	3.6	202.0	SJ1 №32	37-3
35	石皿	安山岩	[10.0]	[13.5]	4.7	536.9	SJ1 №14	38-1
36	石皿	安山岩	[10.2]	[10.4]	6.3	487.6	SJ1 №46 脚付	38-2
37	石皿	安山岩	[7.1]	[7.5]	3.8	216.1	SJ1 №41	38-3

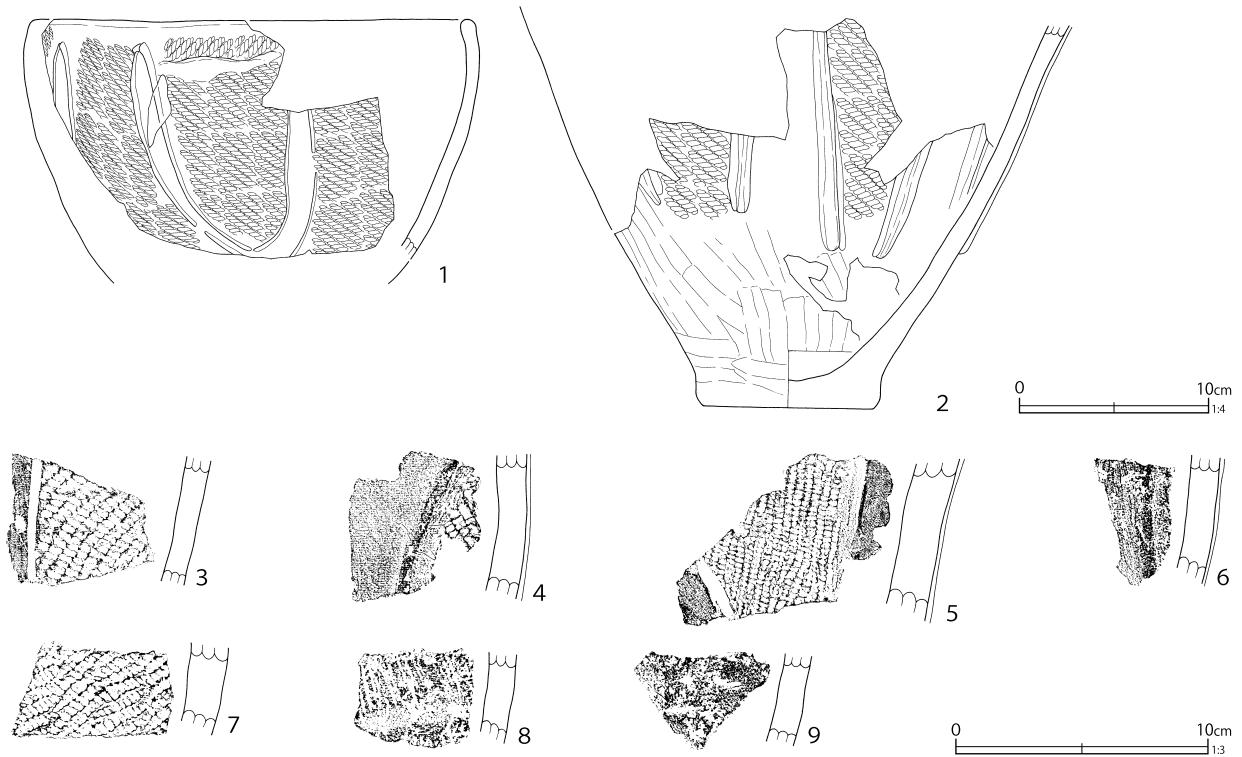
剥離面が複数観察される。32は凹石である。上下裏面を欠損している。30・31は敲石である。棒状の礫の端部に敲打面が観察される。33・34は磨石である。33は複数の凹みがある。35～37は石皿である。35は正面に皿部、裏面に多くの凹みがある。36は裏面に脚部を有する石皿である。円柱状の脚部が二つ残る。37は裏面に凹みを有する。

第2号住居跡 (第41図)

調査区南東隅のB・C-3・4グリッドに位置し、第1号住居跡の東側約12mにあたる。住居の大半が調査区域外にかかるため、平面形は明確でないが、円形ないしは楕円形の住居であろう。壁高は最も深い部分で0.27mである。床面は平坦で、中央がやや低くなっている。壁溝は検出されなか



第41図 第2号住居跡



第42図 第2号住居跡出土遺物

った。

床面の南半分は大きく搅乱を受けていたが、柱穴が2本検出された。P1・2とともに、径30cm前後で、掘り込みも浅いことから、主柱穴ではないと考えられる。

覆土は大きく3層に区分される。褐色土やローム土を主体とした自然堆積である。遺物は、覆土の上層から中層にかけて出土しており、北側の調査区域際からは深鉢形土器（1）が出土した。

本住居跡の所属時期は、加曽利EⅢ式期の新しい時期と考えられる。

第2号住居跡出土遺物

土器（第42図）

1は胴中位を境に、上下に文様が描かれる土器と考えられるが、現存部分以下の文様は不明である。文様は平行沈線によりU字状文様が描かれ、沈線間が磨消されている。器面にはLR原体による地文が施されているが、口唇部直下の縄文施文が羽状となっている。加えて、胴上部の湾曲が強い点などから、加曽利EⅢ式でもやや新しい特徴

を示すものと考えられる。

内面整形は口縁部にヨコナデ、その下部にタテナデが施されている。推定口径22.4cm、現存高12.7cmを測る。胎土は細砂粒を含む。焼成は普通で、色調は明赤褐色である。

2は胴下部のみを遺存する比較的大型の深鉢形土器である。文様が断面三角形の隆起線による懸垂文であることや、底部直上が直線的に立ち上がる点に、やや新しい特徴が見られる。器面下部にはヘラ状工具によるミガキが施され、底部側面にはナデが施されている。内面にはナデが施される。原体はLRである。底径9.0cm、現存高20.6cmを測る。胎土は細砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

3～9はキャリパー形の深鉢形土器の胴部破片である。

3は磨消懸垂文が施されている。4～6は微隆起線文により文様が描かれている。7は縄文の地文のみの破片である。8は縦位の櫛状工具による条線を地文としている。9は無文の土器である。

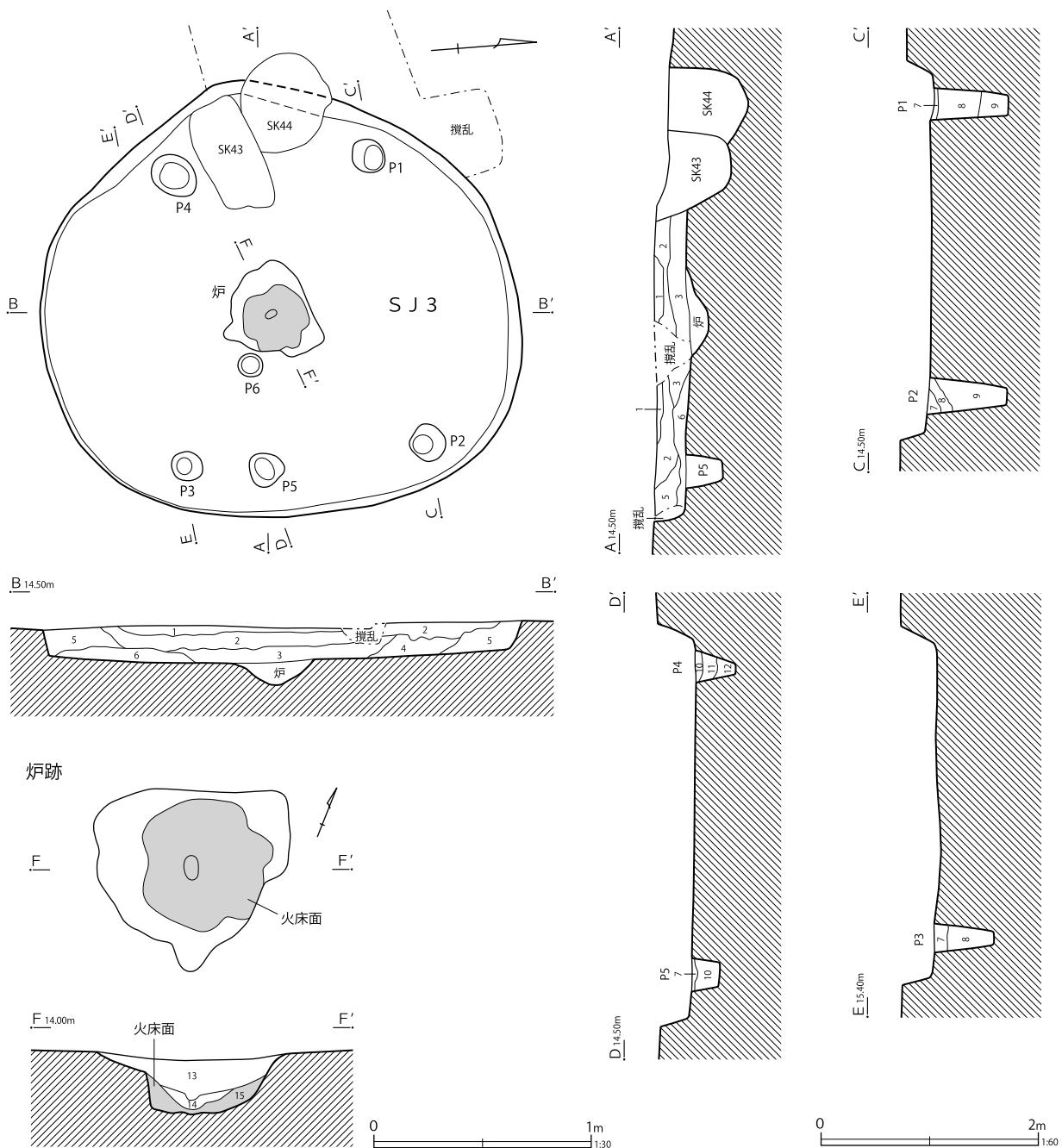
第3号住居跡（第43・44図）

調査区中央のA-3グリッドに位置する。第43・44号土壌によって西壁及び床面の一部が壊されている。周囲には、北西側に第4号住居跡が隣接し、西側には同時期の土壌が3基分布している。平面形は長軸長4.39m、短軸長3.98mの不整五角形で、壁高は最も深い部分で0.36mである。主

軸方位はN-95°-Wを指す。

床面は平坦で、中央がやや低くなっている。壁溝は検出されなかった。

床面上から6本の柱穴が検出された。このうち壁際に台形状に配列されたP1～4の4本が主柱穴と考えられる。P2とP3の間隔が広く取られていることから、東側に入口施設をもつと想定さ



第43図 第3号住居跡（1）

れる。位置関係からすれば、掘り込みの浅いP 5が、入口施設にかかる柱穴の可能性が高い。柱穴の覆土にはいずれも明確な柱痕跡はなく、抜き取り後に自然堆積したものであろう。

柱穴の規模は、P 1 が径0.32×0.29m、深さ0.72m、P 2 が径0.35×0.33m、深さ0.74m、P 3 が径0.28×0.27m、深さ0.56m、P 4 が径0.45×0.36m、深さ0.40m、P 5 が径0.32×0.31m、深さ0.11mである。

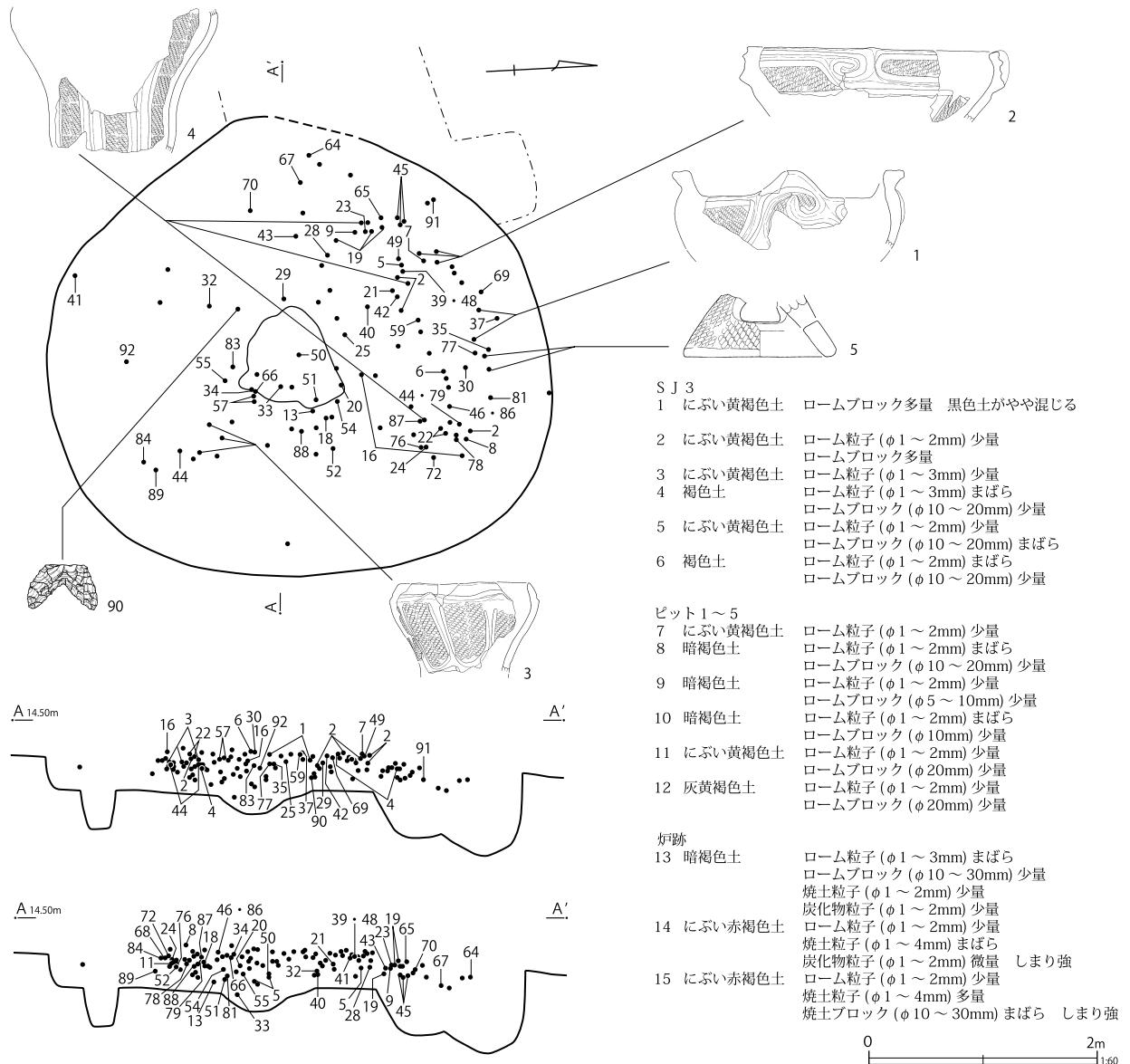
床面のほぼ中央に炉跡を検出した。径0.93×0.80mの不整形の掘り込みを持つ地床炉で、深さ

は0.26mである。火床面は、被熱により赤色硬化している。

覆土は大きく6層に分けられる。にぶい黄褐色土と褐色土を主体とし、自然堆積を示している。

遺物は、覆土の上層を中心に土器や石器が出土した。検出された4軒の住居跡の中でも、最も遺物量が多かった。小破片となった土器が大半を占め、いずれも床面から浮いた状態で、住居跡の北側にやや片寄った分布を示している。

本住居跡の所属時期は、中期後半の加曽利E III式期の古い時期と考えられる。



第44図 第3号住居跡 (2)

第3号住居跡出土遺物

土器 (第45～47図)

1は口縁部に4単位の突起を持つと推定される深鉢形土器である。口縁部文様帶はやや幅広く、渦巻き文を挟んで下方が弧状となる区画文が配されている。原体はR Lである。推定口径22.2cm、現存高9.1cmを測る。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成は普通で、色調は明黄褐色である。

2は幅の狭い口縁部に、渦巻き文と長方形の区画文が配されている。推定口径27.2cm、現存高8.5cmを測る。胎土は砂粒やや多く、小礫少量を含む。焼成は良好で、色調はにぶい褐色である。

3は胴中位を境に、上下に文様が描かれた深鉢形土器である。胴くびれ部を境にU字と逆U字状のモチーフが配されたものと推定され、モチーフ間は磨消されている。口縁に近い部分には8単位の小突起が施されていたと推定される。原体はR Lである。縄文施文後、沈線が描かれ、さらに磨消が施されている。推定口径14.8cm、現存高10.5cmを測る。胎土は少量の細砂粒、微量の小礫を含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。

4はキャリパー形の深鉢で、胴部には沈線による懸垂文を持ち、沈線間が磨消されている。原体はL Rである。内面にはナデが施される。胴下部には被熱により一部剥落がある。現存部最大径22.6cm、現存高16.8cmを測る。胎土は細砂粒を多量に含む。焼成は普通で、色調はにぶい黄褐色である。

5は台付鉢の台部の破片である。楕円形に近い孔が、器面に3箇所穿孔されている。脚底径7.6cm、現存高3.6cmを測る。胎土は細砂粒をやや多く含む。焼成は普通で、色調は橙色である。

6～46はキャリパー形の深鉢形土器で、口縁部文様帶を有するものである。

6～11は口縁部に文様帶の残るもので、6は突起部分の破片である。12・13は口縁部の下から胴部にかけての破片。14～46は胴部の破片で、いずれも沈線による文様が施文され、磨消懸垂文を施

文するものが多い。46は底部に近い破片である。

47～56は口縁部文様帶のない深鉢形土器である。47は突起部分の破片である。48は円形刺突文を巡らせ、狭い口縁部無文帶である。49～53は沈線を巡らし、無文の狭い口縁部が作り出されている。54～56は吉井城山類の土器で、波状の沈線が施文されている。

57・58は曾利系の土器と考えられる。57は波状口縁で、波頂下に渦巻き文が施文されていたと思われる。地文は沈線状の条線が施文される。58は櫛状工具による条線によって、縦位波状文が施文されている。

59～61は縄文のみが残る深鉢形土器の胴部の破片である。62は深鉢形土器の底部で、器面は無文である。

63～80は浅鉢形土器である。63～68は口縁部、69～71は口縁部の無文が残る胴部、72～80は胴部の破片である。

81～88は後期初頭の土器と考えられるもので、混入であろう。81～86は器面が丁寧に磨かれた深鉢形土器の口縁部、87・88は壺形土器の頸部から胴部の破片である。

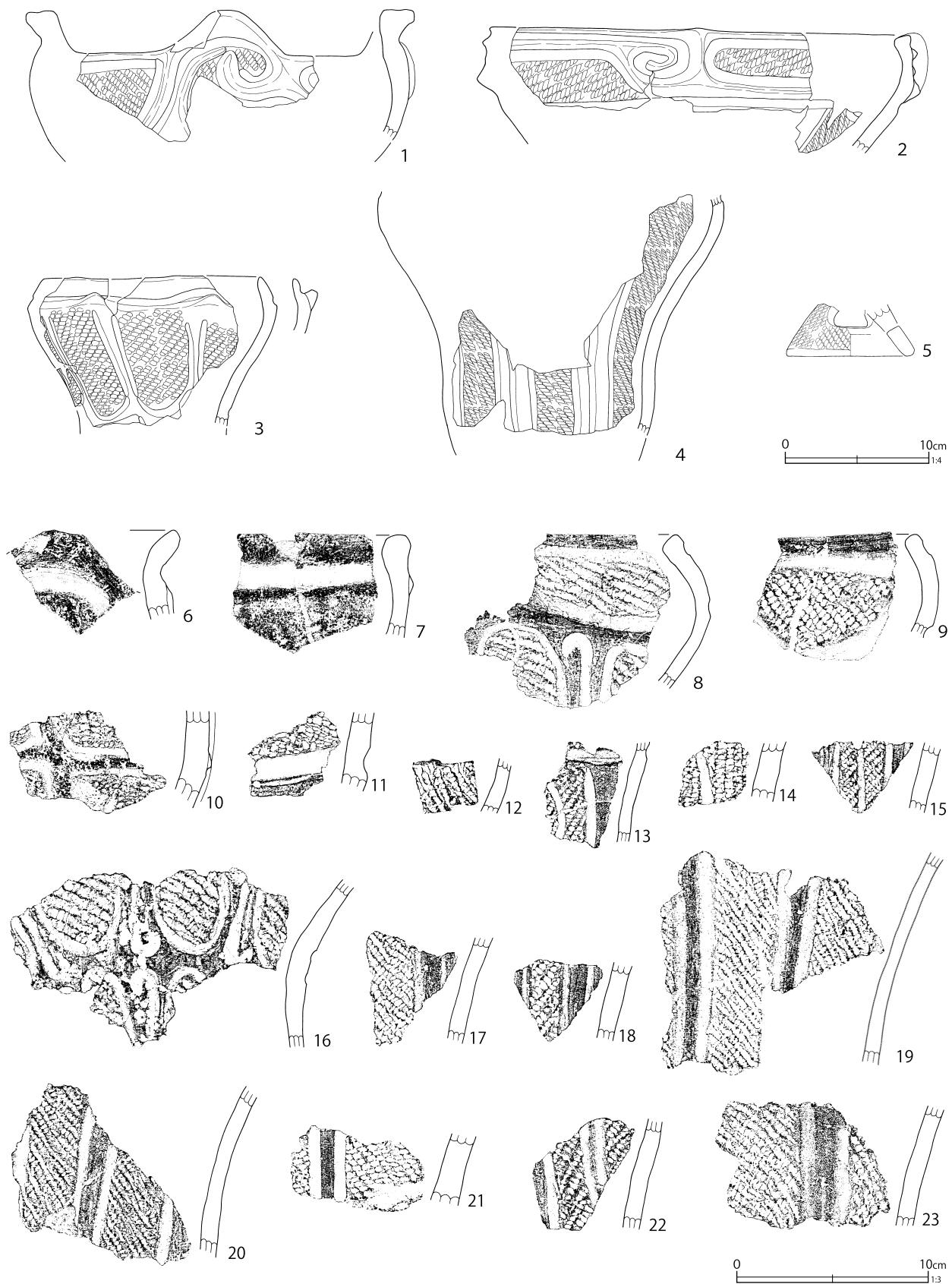
89は浅鉢形土器の底部である。

石器 (第47図)

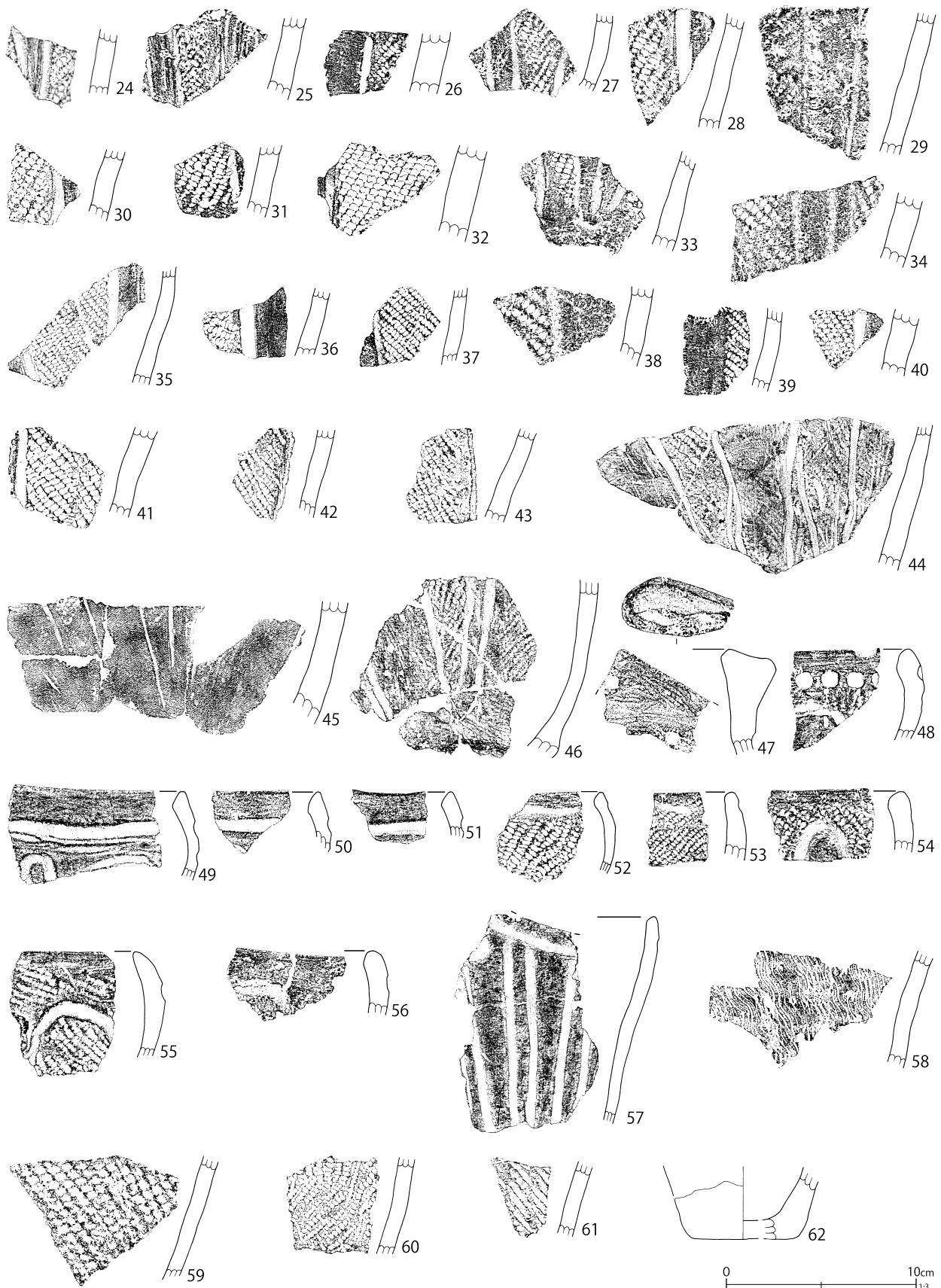
90は石鏃である。石材は透明度の高く良質な黒曜石が用いられている。上半部を欠損しているため、全体の形状は不明である。基部の両側縁は緩やかに外湾していることから、幅広になると考えられる。基端部の抉りは深く、V字状になっている。脚部及び鏃身部の整形加工は丁寧で、薄手に仕上げられている。

91は砂岩製の敲石である。下半部を大きく欠損している。横断面が楕円形の棒状礫を用いており、長軸の端部に敲打面が見られる。

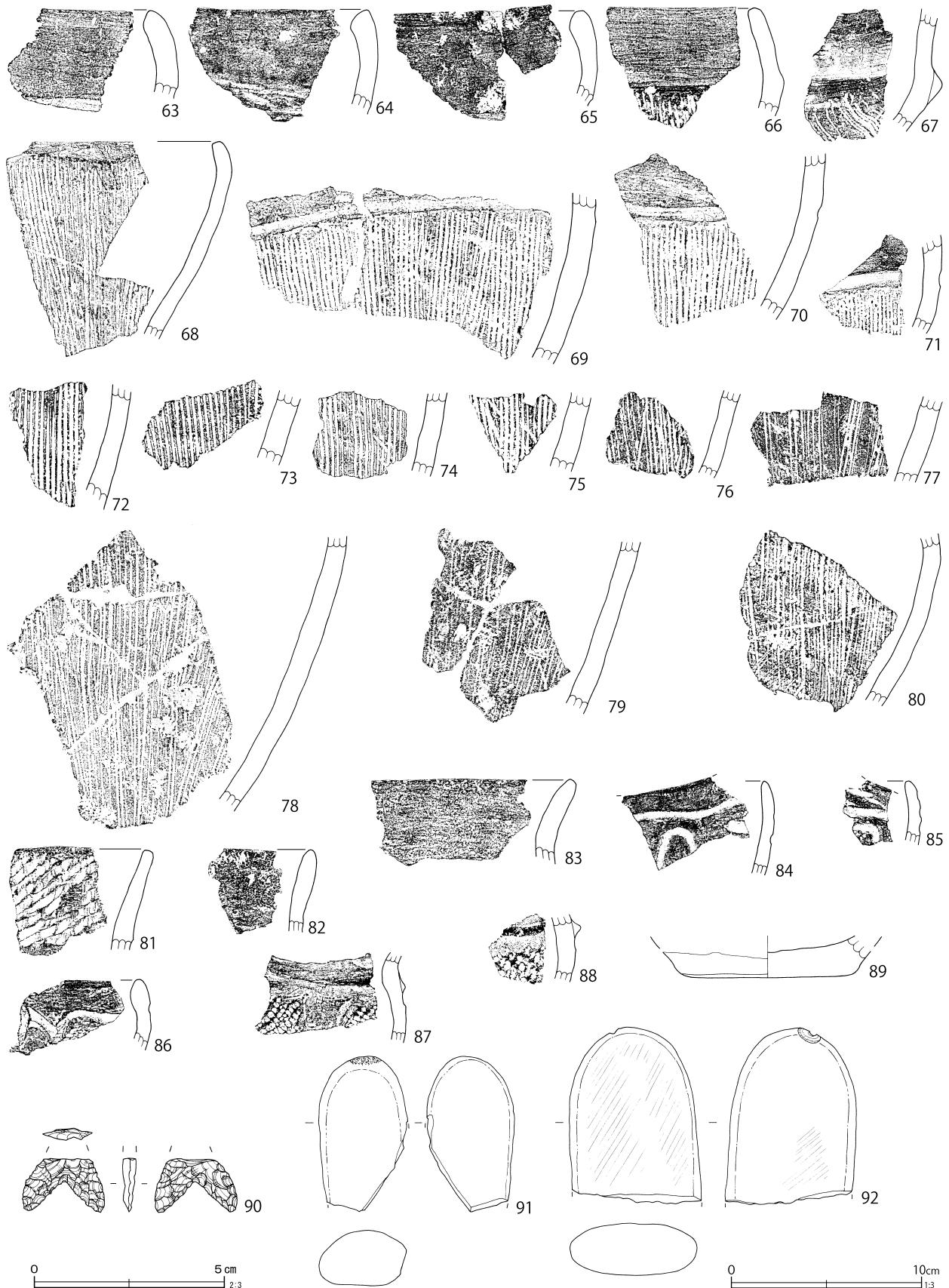
92は安山岩製の磨石である。下半部を大きく欠損している。扁平な楕円礫が用いられており、表裏両面の平坦部に磨痕が見られる。



第45図 第3号住居跡出土遺物（1）



第46図 第3号住居跡出土遺物（2）



第47図 第3号住居跡出土遺物（3）

第11表 第3号住居跡出土石器観察表（第47図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
90	石鎌	黒曜石	[1.4]	2.2	0.3	0.8	SJ3 No.45	38-4
91	敲石	砂岩	[8.2]	4.7	3.0	165.7	SJ3 No.82	38-5
92	磨石	安山岩	[9.3]	7.0	2.8	275.5	SJ3 No.43	38-6

第4号住居跡（第48・49図）

調査区北東隅のA-3・4グリッドに位置し、住居の大半が調査区域外へ延びている。南西壁の一部が、第42号土壙によって壊されている。

検出した住居跡の範囲は、東西長2.50m、南北長2.19mで、平面形は円形に近いと推定される。壁は急角度で立ち上がり、壁高は最も深い部分で0.28mである。

床面は平坦で、検出した範囲には壁溝や柱穴は検出されなかった。

覆土は大きく2層に分かれ、暗褐色土を主体としている。概ね自然堆積を示している。

遺物は、主に上層から多量の土器が出土した。底部を欠損する深鉢形土器（4）が逆位の状態で出土しているほか、北側調査区際から大型の深鉢形土器の底部（9）が正位の状態で、同一個体と考えられる両耳壺（6～8）や、深鉢形土器（2・3）などの破片が折り重なるようにして出土している。その出土状態から、いずれも投棄や流入したものであろう。

本住居跡の所属時期は、出土遺物から加曾利EⅢ式期でも新しい時期と考えられる。

第4号住居跡出土遺物（第50～54図）

1はいわゆる架懸文の土器である。口縁部は内湾し、文様帶の幅が狭い。胴部は無文帶を挟み、渦巻き文が描かれている。文様は、基本的に1条の幅広く扁平な隆帶によって描かれているが、部分的に断面三角形の2条の隆起線で描かれている点が特徴である。器面に粘土帶を貼り付け、渦巻き文を作出しているが、器面との比高差は少ない。文様空白部には縄文が施文されている。内面は丁寧にナデが施され、被熱により部分的に器面が剥

落している。原体はR Lである。推定口径44.0cm、現存高24.2cmを測る。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、色調は明赤褐色である。

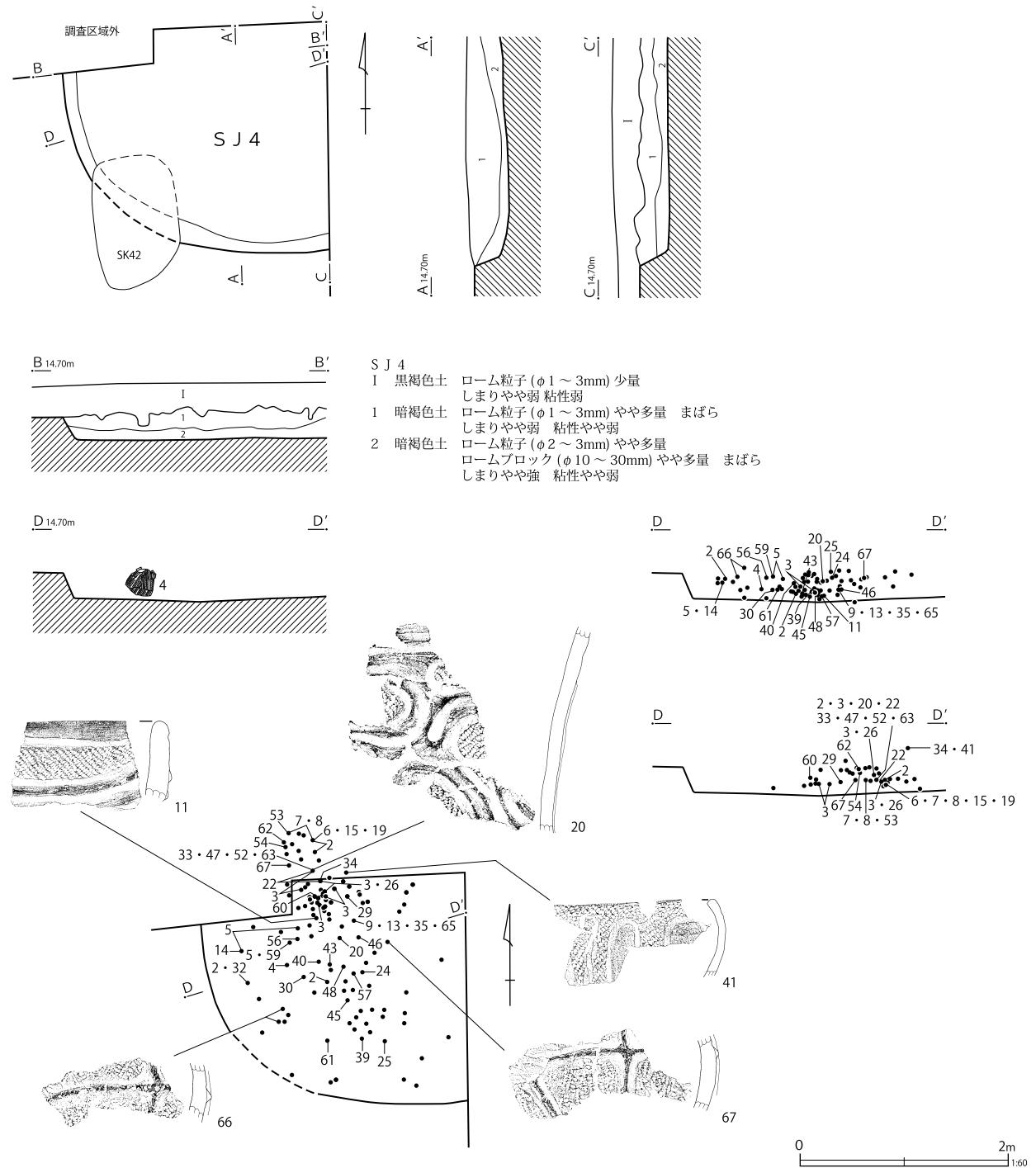
2は器面には二本一对の微隆起線による渦巻き文が描かれ、隆起線両側及び中央部にはナデが施される。文様は大柄な渦巻き文で、端部がやや肥厚している。現存部最大径32.6cm、現存高11.1cmを測る。胎土は細砂粒少量、小礫微量を含む。焼成は良好で、色調は黄橙色である。

3は胴部の渦巻き文が沈線で描かれた土器と考えられ、渦巻き文に接して沈線が垂下している。2に比べると、渦巻き文が縦長で、単位数も多いようである。沈線間には丁寧なナデが施されている。地文の原体はR Lで、縦方向に施文される。現存部最大径36.6cm、現存高15.5cmを測る。胎土は細砂粒を含み、精選された胎土である。焼成は良好で、色調は橙色である。

4は口唇上に1単位の突起を持つ深鉢形土器である。器面には櫛状工具による縦位波状文が施文されている。内面には丁寧なナデが施される。口径15.8cm、現存高26.8cm、推定高29.0cmを測る。胎土は砂粒をやや多く含む。焼成は良好で、色調は明黄褐色である。

5は器面にヘラミガキが施され、部分的に器面が剥落している。底径6.0cm、現存高5.3cmを測る。胎土は砂粒がやや多く、土器細粒と考えられる赤色粒をわずかに含む。焼成は良好で、色調は橙色である。

6は口縁部が著しく内傾していることや、橋状の把手が突出していることから、両耳壺の一部と考えられる。原体は、耳部分はL R、器面部分はR Lである。現存部推定径42.0cm、現存高6.0cm



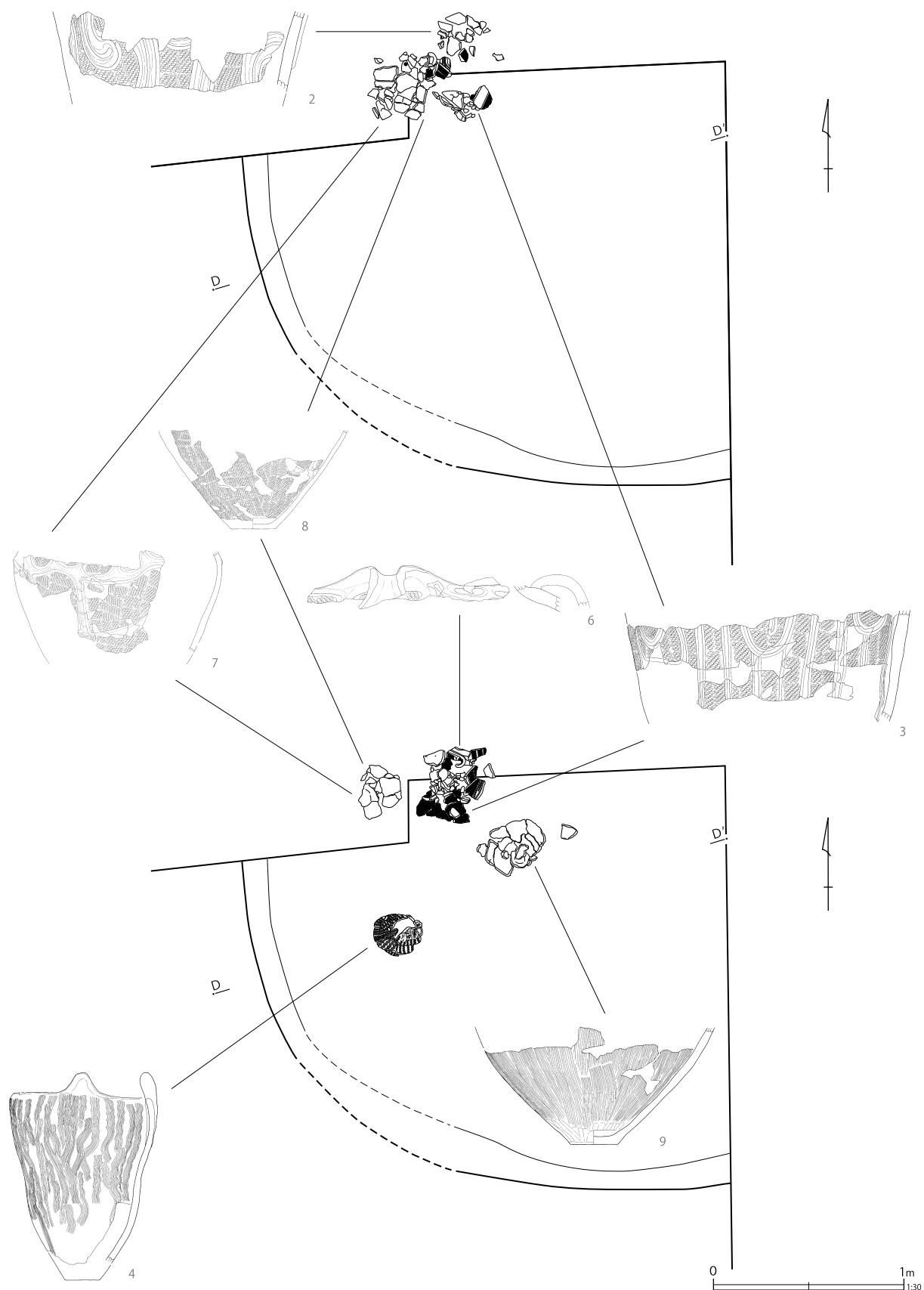
第48図 第4号住居跡（1）

を測る。胎土は砂粒を多く含み、わずかに土器細粒を含んでいる。焼成は普通で、色調は黄褐色である。

7は大型の土器である。文様構成は不明瞭だが、渦巻き文の土器である。文様は隆起線で描かれている。隆帶が剥離した部分には地文の縄文が見ら

れる。地文はR Lである。器面は隆帶上に丁寧なナデが施され、内面にも丁寧なナデが施されている。現存部最大径54.4cm、現存高28.5cmを測る。胎土は砂粒がやや多く、少量の小礫を含む。焼成は普通で、色調は橙色である。

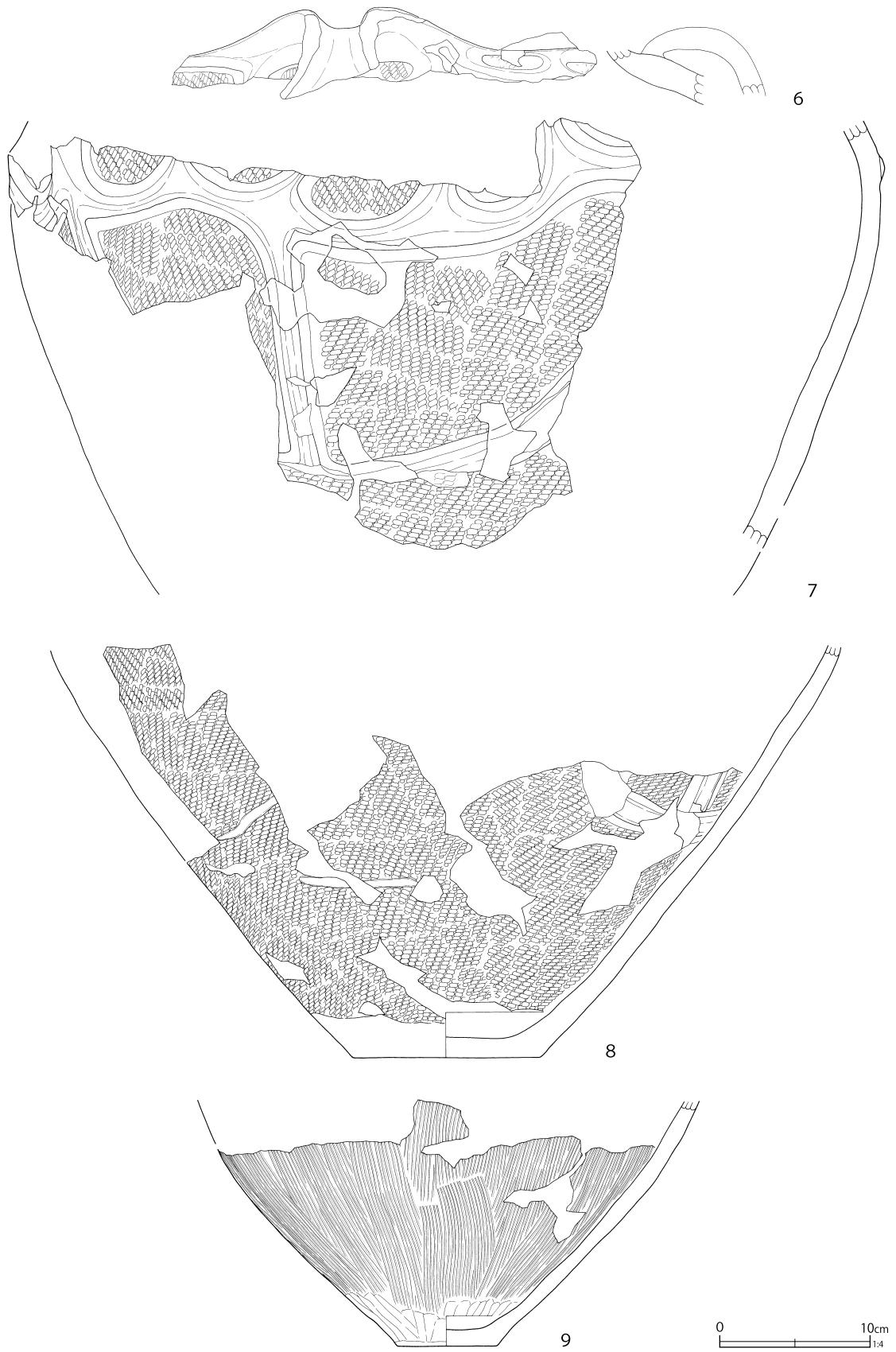
8は器面の一部に棒状工具による粘土ナデ痕が



第49図 第4号住居跡（2）



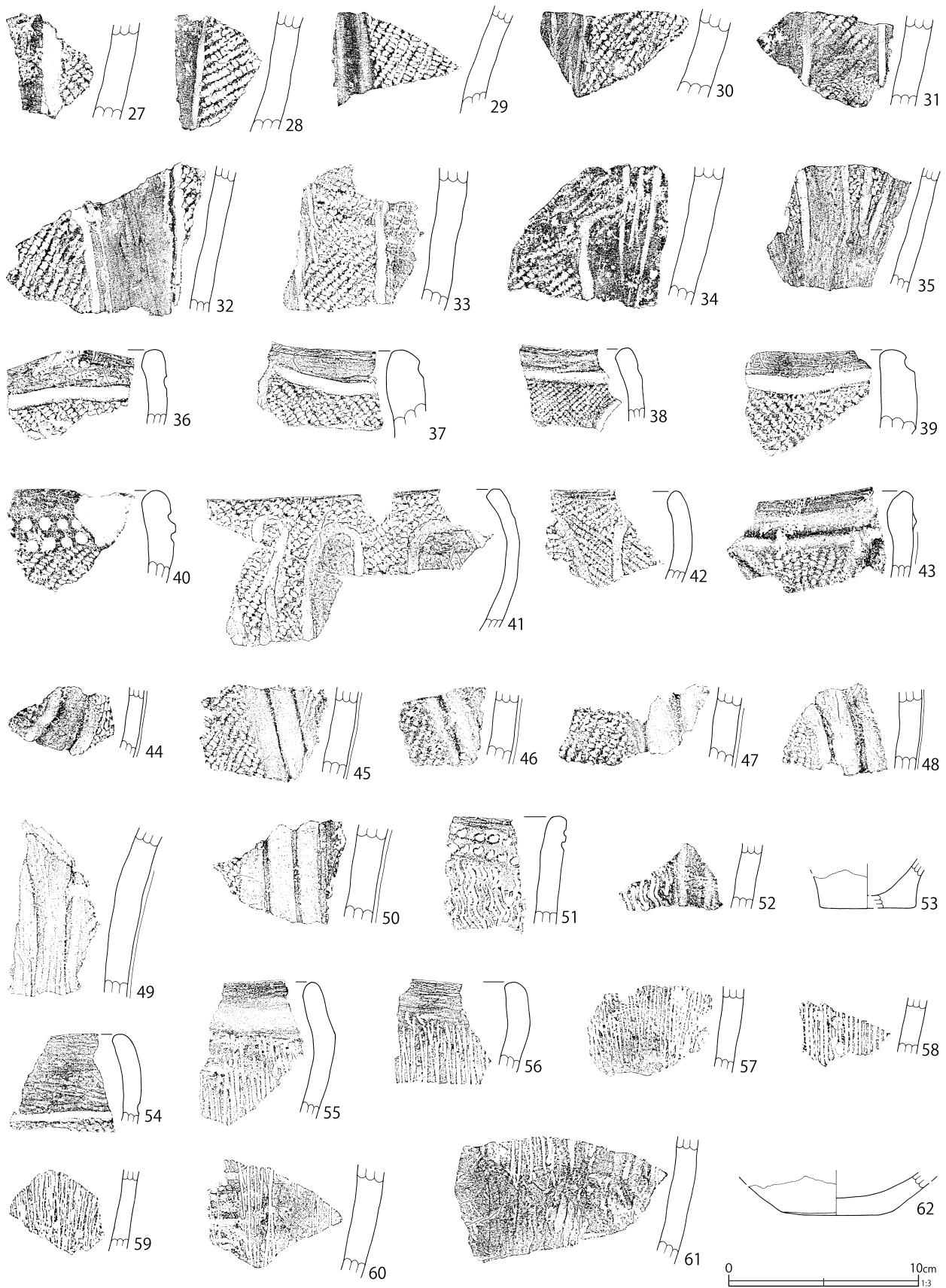
第50図 第4号住居跡出土遺物（1）



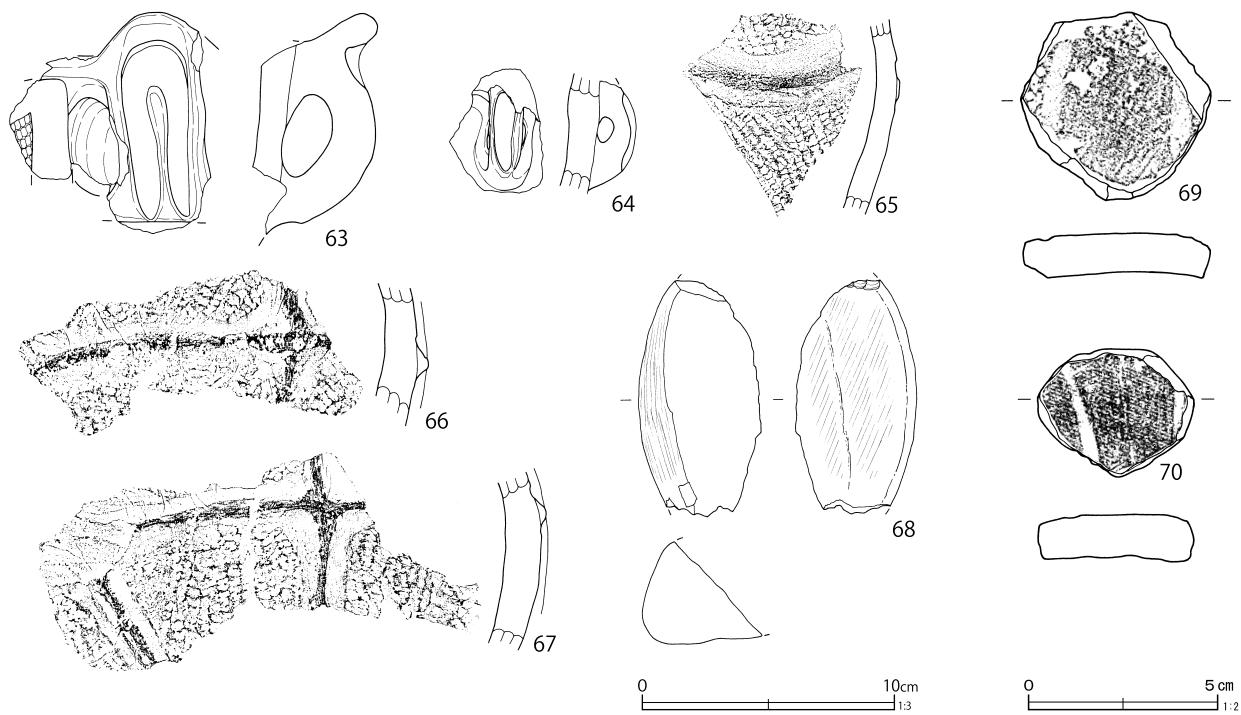
第51図 第4号住居跡出土遺物（2）



第52図 第4号住居跡出土遺物（3）



第53図 第4号住居跡出土遺物 (4)



第54図 第4号住居跡出土遺物（5）

第12表 第4号住居跡出土石器観察表（第54図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
68	敲石	砂岩	[9.3]	[5.0]	4.3	200.4	SJ4 被熱 一部赤化	38-7

認められる。隆帯による渦巻き文が施され、その両側には浅い沈線が見られる。文様の一部は剥落している。底部側面にはヨコナデ、内面には丁寧なナデが施されている。原体はR Lである。現存部最大径50.8cm、現存高27.5cm、底径12.4cmを測る。胎土は砂粒がやや多く、小礫を少量含む。焼成は普通で、色調は橙色である。

9は櫛状工具による条線が施される深鉢形土器である。底部に近い側面にはヘラナデ、胴部下端側面には指ナデ、内面にはナデが施されている。現存部最大径31.6cm、現存高16.3cm、底径6.6cmを測る。胎土は砂粒をやや多く、小礫を少量含む。焼成は普通で、色調は明褐色である。

10～35は口縁部文様帯を持つキャリパー形の深鉢形土器である。10～15は口縁部文様帯の破片である。16～19は口縁部文様帯の下端を含む胴上半部の破片である。20～35は胴部の破片である。

20・21は隆帯で大型の渦巻き文が施文される土器である。22は沈線で渦巻き文が施文される。23

～35は沈線による磨消懸垂文が施文されている。

36～43は口縁部文様帯を持たない深鉢形土器である。36～39は狭い無文の口縁である。40は二列の円形刺突文で、胴部と区画されている。41・42は吉井城山類の土器で、波状の沈線が施文されている。43は微隆起状の隆帯を持ち、口縁部は狭い無文帯である。

44～50は微隆起線文の渦巻き文が施文される。

51・52は条線を地文とする曾利系の土器である。51は口縁部が二列の円形刺突文で胴部と区画され、胴部に波状の条線が施文される。52は胴部の破片で、櫛状工具により波状の条線が施文されている。

53は深鉢形土器の底部片で、無文である。

54～62は浅鉢形土器である。54～56は口縁部の破片。54はやや広目の口縁で、口縁部直下に沈線を巡らして区画される。地文は縄文である。55は狭い無文の口縁部で、浅い幅広の沈線で区画される。56は無文の口縁部である。57～61はいずれも地文は櫛状工具による条線が施文される。

62は浅鉢形土器の底部で、器面は無文である。

63～67は両耳壺の破片である。63・64は把手の破片である。65～67は胴部の破片で、微隆起線文が施されている。

69・70は土製円盤である。深鉢形土器の胴部破片を再加工している。69は径5.0×4.9cm、70は径4.1×3.4cmである。

石器（第54図）

石器は敲石のみが出土した。

68は砂岩製の敲石である。自然礫を使用したもので、上端部に敲打痕が観察される。被熱により一部赤化している。

（2）土壙

縄文時代の土壙は3基検出された。第3号住居跡の西側にまとまって分布している。

所属時期は、出土遺物の特徴から住居跡とほぼ同時期の加曽利EⅢ式期と想定される。

第29号土壙（第55図）

調査区中央のA-3グリッドに位置する。平面形は略円形で、断面形は筒形である。規模は径1.06m、深さ0.88mである。覆土は、炭化物粒子を含む黒褐色土が主体である。

遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。

第33号土壙（第55図）

調査区中央のA-3グリッドに位置する。近世土壙の第31号土壙が重複し、入れ子状の状態であるため、上半部が削平されている。

平面形は楕円形で、断面形は筒形である。規模は長軸長0.85m、短軸長0.78m、深さ0.63mで、長軸方位はN-17°-Wを指す。覆土は、黒褐色土の単一層である。

遺物は、縄文土器の破片が少量出土した。

第41号土壙（第55図）

調査区中央のA-2・3グリッドに位置する。第34号土壙に接し、攪乱により壁面の一部が壊されている。

平面形は楕円形で、断面形は皿形である。規模

は長軸長2.34m、短軸長1.88m以上、深さ0.31mで、長軸方位はN-40°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の破片とチャートの剥片が出土した。

土壙出土遺物（第56図）

1～6は第29号土壙、7は第33号土壙、8～37は第41号土壙から出土した。

1～4はキャリパー形の深鉢形土器である。1・2は口縁部、3・4は口縁部から胴部にかけての破片である。5・6は細い条線が施された浅鉢である。所属時期は、中期後半である。

7は口縁部文様帯を持ち、胴部が磨消縄文の深鉢形土器の口縁部である。長方形の区画文を有すると思われる。所属時期は、中期後半である。

8～24はキャリパー形の深鉢形土器である。口縁部に文様帯を有し、胴部に縄文が施された後、磨消が施されている。8～13は口縁部文様帯の破片である。14～24は磨消沈線文を持つ胴部破片である。23は底部に近い破片である。

25～29は口縁部文様帯のない深鉢形土器である。25・26は沈線で文様が描かれている。27～29は微隆起線文である。

30は連弧文系の土器である。

31～37は浅鉢形土器と考えられる。31は無文の口縁部で、胴部に縄文が施されている。32～37は櫛状の条線が施文されている。32は無文の狭い口縁部で、なぞりに近い沈線によって胴部と区画されている。

所属時期は、出土した土器の特徴から中期後半の加曽利EⅢ式期と考えられる。

（3）グリッド出土遺物

近世土壙や表採された遺構に帰属しない縄文時代の遺物を第57・58図に掲載した。前期から後期のもので、住居跡や土壙と同じ、中期後半が主体である。

土器（第57図）

第I群土器

前期末葉の土器を本群とした。

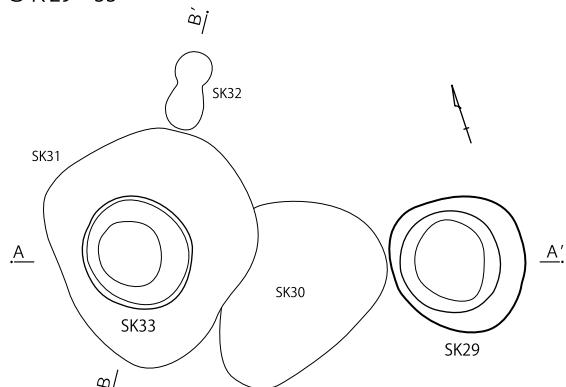
第1類 (1)

諸磯c式土器を本類とした。

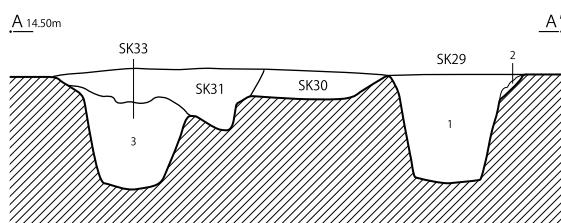
第2類 (2・3)

十三菩提式土器を本類とした。2は縄文地文上に、刻みを持つ浮線が貼付されている。3は結節が横位に施文されている。

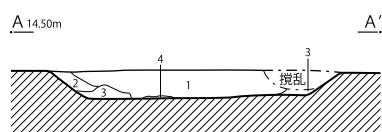
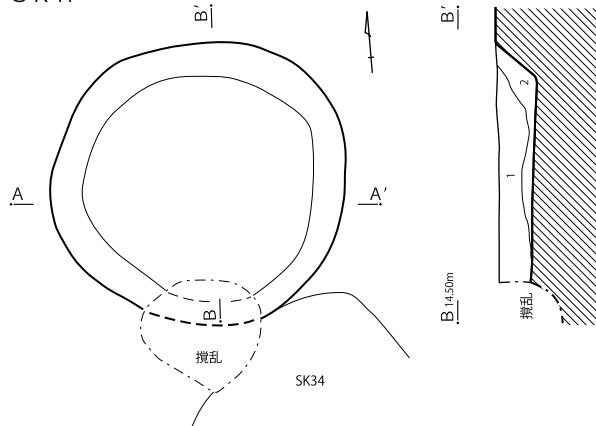
SK 29・33



B
B' A 14.50m A' B 14.50m



SK 41

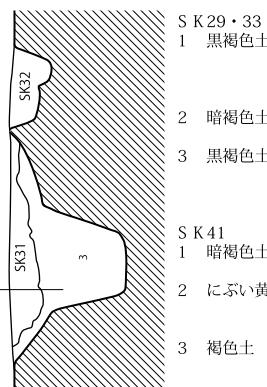


第II群土器

中期の土器を本群とした。

第1類 (4~13)

口縁部文様帶を持ち、胴部が磨消縄文の土器を本類とした。4・5は口縁部破片で、4は長方形の区画文を有すると思われる。隆帶が肥厚せず、特に頸部との境界が沈線で描かれるようになって

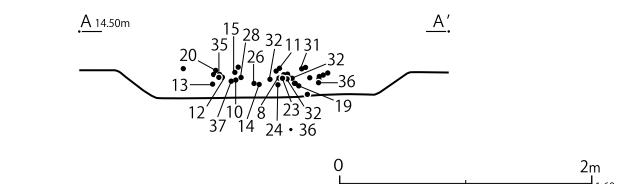
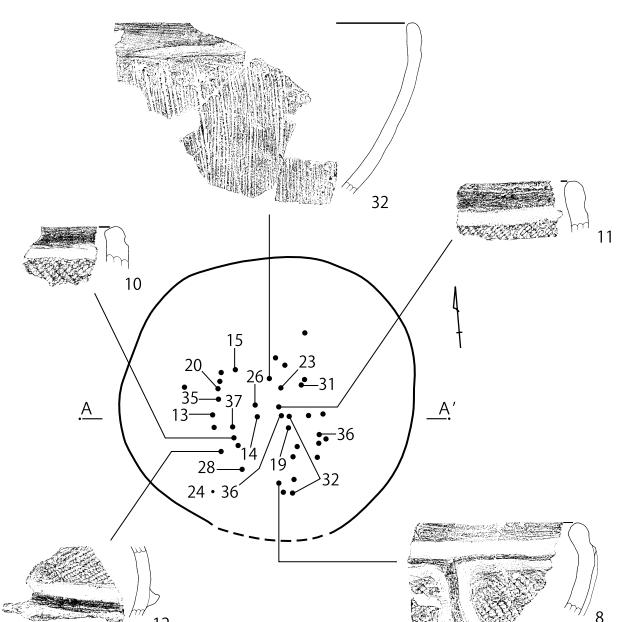


SK 29・33
1 黒褐色土
2 暗褐色土
3 黒褐色土

ローム粒子 ($\phi 2 \sim 3mm$) 少量
ロームブロック ($\phi 20 \sim 30mm$) 少量
炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 3mm$) 微量
しまり強 粘性やや強
ロームブロック ($\phi 2 \sim 3cm$) 少量
しまりやや強 粘性やや強
ロームブロック ($\phi 20 \sim 30mm$) 少量
炭化物粒子 ($\phi 2 \sim 3mm$) 微量
しまり強 粘性やや強

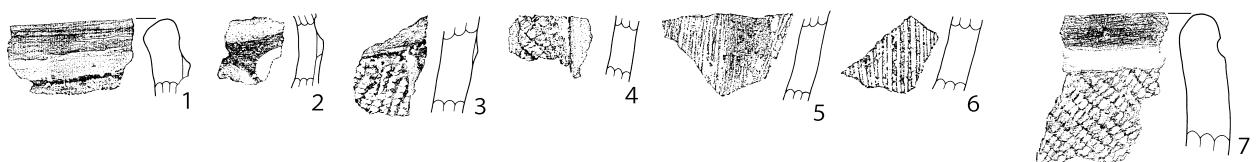
SK 41
1 暗褐色土
2 にぶい黄褐色土
3 褐色土
4 暗褐色土

ローム粒子 ($\phi 1 \sim 4mm$) まばら
しまり中 粘性なし
ロームブロック ($\phi 10 \sim 20mm$) まばら
しまり中 粘性なし
ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3mm$) まばら
ロームブロック ($\phi 20 \sim 40mm$) 少量
しまりやや強 粘性なし
ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3mm$) 少量
しまり中 粘性なし

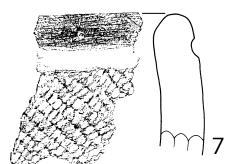


第55図 土壌

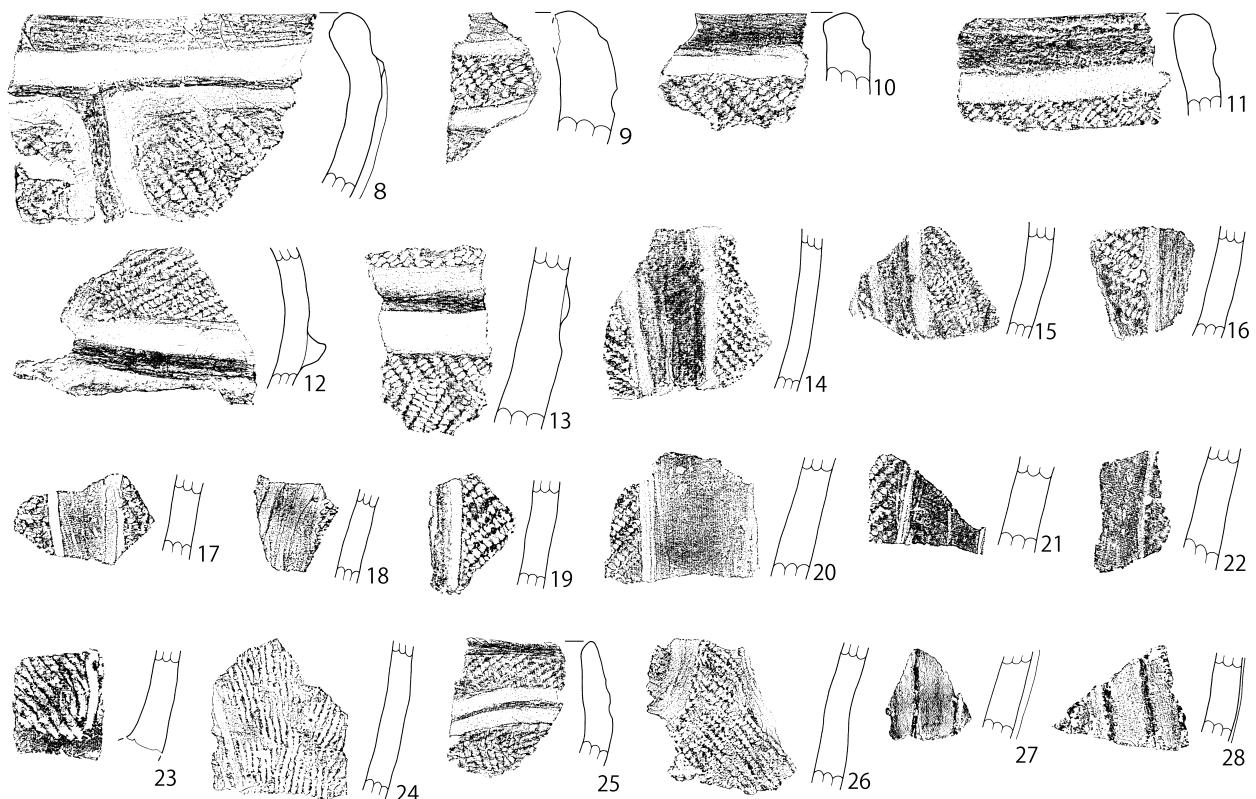
SK 29



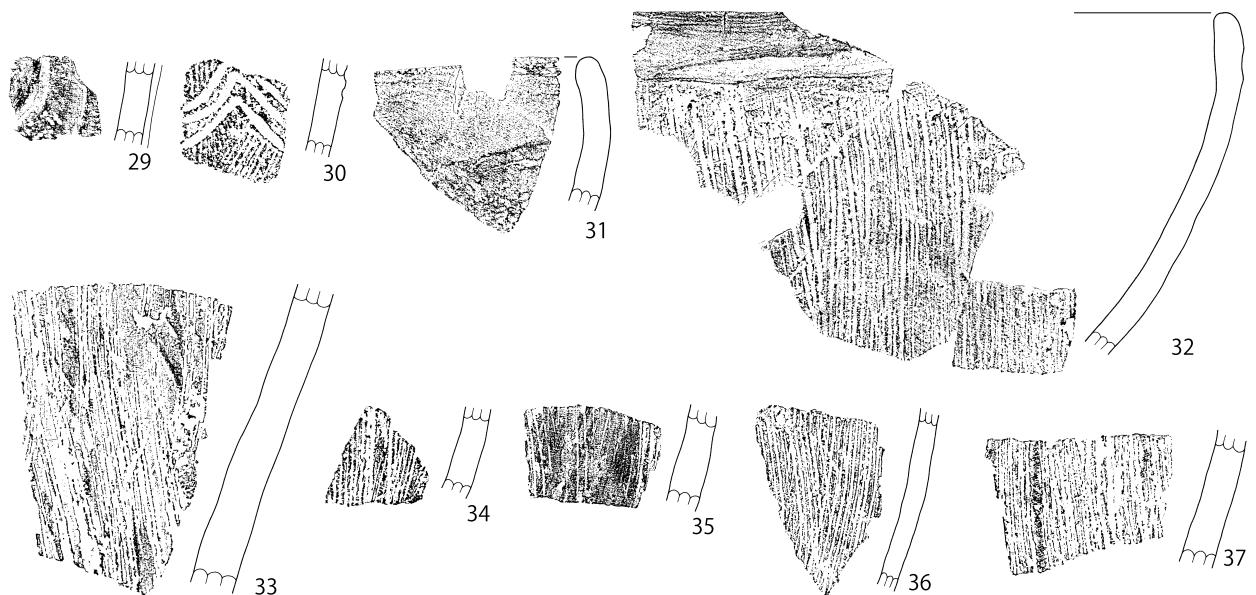
SK 33



SK 41



31



0 10cm
1:3

第56図 土壌出土遺物

いる。5は胴部に逆U字状のモチーフが描かれ、地の部分が磨消されている。

6は蕨手状の懸垂文が施文されている。8・11・12は平行沈線による懸垂文間の地文が磨消されている。11は懸垂文の幅が広く、8・12よりも後出的である。

9・10・13は曲線的な沈線文が描かれており、抱球文の可能性がある。

第2類 (14~21)

口縁部文様帶を持たず、胴部一帯に沈線により文様が描かれる土器を本類とした。

14は波状口縁で、波頂部に蕨手状の沈線が施文されている。器面は、口唇無文部が短い蕨手状の沈線と、円形刺突文によって区画されている。胴部文様の有無は不明である。

15~17は口唇直下を巡る沈線により、無文部が作出されている。胴部文様は不明だが、抱球文が描かれる可能性もある。16は沈線直下の縄文が羽状に施文されている。器形は、口唇が内湾する鉢ないしは、胴中位でくびれる深鉢形であろう。

18~21は口唇直下の器面を巡る沈線を持たない土器群である。18・19は、平行沈線により逆U字状のモチーフが描かれ、沈線間の地文は磨消されている。20は口唇無文部下に円形刺突文が施文され、逆U字状の沈線文が施文されている。いずれも器形は15~17に類似すると考えられる。

第3類 (22~24)

隆起線により文様が描かれる土器を、本類とした。懸垂文や曲線的なモチーフが描かれ、隆起線間や両側はナデ整形が施されている。

第4類 (25)

口唇直下を巡る平行沈線間に、刺突が施された土器である。連孤文系と考えられる。

第5類 (26)

地文を持たず、半截竹管による斜行沈線施文後に、縦位の沈線が施文された土器で、曾利式の影響を感じさせる。

第6類 (27~33)

櫛状工具もしくは半截竹管により、蛇行・直線的な条線や沈線が施された土器である。器形は、深鉢や鉢形と考えられる。

第7類 (36・37)

両耳壺と考えられる土器である。

第8類 (34・35)

中期の無文土器を本類とした。

第9類 (38)

中期土器の底部片である。

第III群土器 (39)

後期の粗製深鉢形土器である。

石器 (第58図)

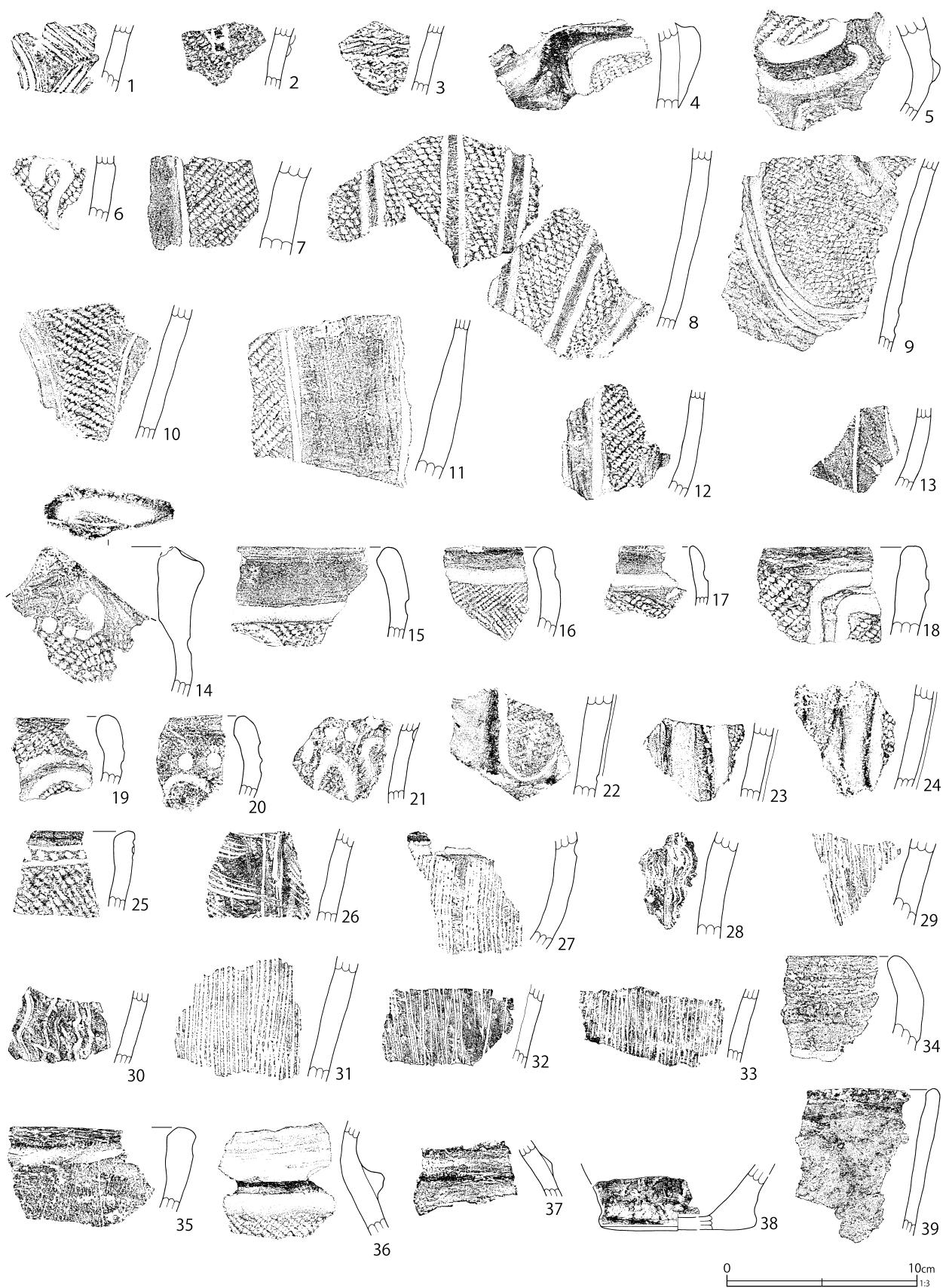
遺構外から出土した石器には、40の黒曜石の原石と41の磨製石斧がある。

40は黒曜石の原石である。3cm程度の小型の角礫である。近世の第9号土壙から出土しているが、縄文時代に帰属すると考えられる。大きさは、長さ2.6cm、幅3.2cm、厚さ2.5cm、重さ21.4gである。県内の縄文時代の遺跡から出土している黒曜石の原石としては、小さな部類に含まれる。

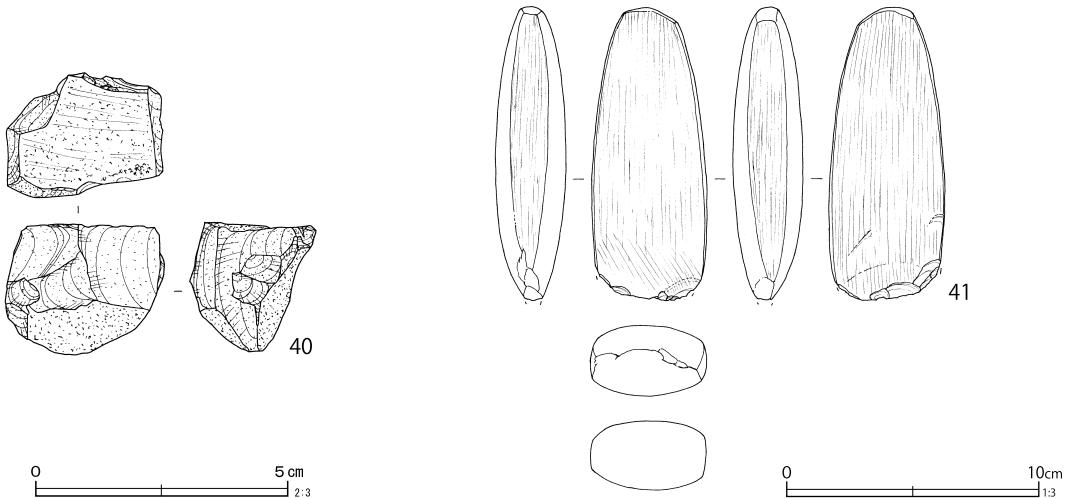
41は定角式の磨製石斧である。調査区中央部のB-3グリッド周辺から、バックホーによる表土掘削作業時に出土した。直接は遺構に伴っていないが、形態から見て縄文時代中期の所産と考えられる。

基部は細身で厚さがある。両側面はわずかに膨らむように整形され、基端部は端面を有している。刃部は円刃で、使用による欠損が一部認められる。裏面には鎬が観察される。大きさは、長さ11.6cm、幅4.6cm、厚さ2.8cm、重さ270.2gである。石材はヒスイ輝石岩である。

こうしたヒスイ輝石岩製の磨製石斧は、関東地方の縄文時代中期後半から後期にかけて出土例が多く、群馬県下仁田町周辺で製作され、流通したものと指摘されている（上野ほか2016）。



第57図 グリッド出土遺物（1）



第58図 グリッド出土遺物（2）

第13表 グリッド出土石器観察表（第58図）

番号	器種	石材	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
40	原石	黒曜石	2.6	3.2	2.5	21.4	SK9	38-8
41	磨製石斧	ヒスイ輝石岩	11.6	4.6	2.8	270.2	B-3グリッド周辺 表土	38-9

2. 近世の遺構と遺物

（1）土壙

土壙は、合計41基検出された（第59～60図、第15表）。その分布は調査区内に散在し、見かけのうえでは、調査区中央にやや空白域が見られる。分布状況や重複のあり方から3～4基が一つのまとまりを持って、比較的短期間に構築された感がある。形態は円形系と方形系に大きく分けられる。さらに方形系の土壙は、南北軸と東西軸を採るものに二分される。

遺構に伴う遺物の出土はほとんどなく、土壙の性格や時期を判別することが難しいため、覆土の状態から近世に帰属するものと判断した。

第1号土壙（第59図）

調査区南側のC-3グリッドに位置する。平面形は略円形、断面形は擂鉢形である。規模は長軸長1.08m、短軸長1.02m、深さ0.34mである。

遺物は、縄文土器の小片が出土した。

第2号土壙（第59図）

調査区南側のC-2・3グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は鍋底形である。規模は

長軸長1.49m、短軸長0.76m、深さ0.32mで、長軸方位はN-15°-Eの南北軸を指す。

遺物は出土していない。

第3号土壙（第59図）

調査区東側のB-3グリッドに位置する。南側に第5号土壙が接している。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.05m、短軸長0.79m、深さ0.29mで、長軸方位はN-42°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第4号土壙（第59図）

調査区東側のB-3グリッドに位置する。第5号土壙と重複し、それを壊している。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長2.03m、短軸長1.16m、深さ0.24mで、長軸方位はN-8°-Eを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土した。

第5号土壙（第59図）

調査区東側のB-3グリッドに位置する。第4号土壙と重複し、東側が壊されている。平面形は

長方形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.64m以上、短軸長0.79m、深さ0.33mで、長軸方位はN-81°-Wの東西軸を指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第6号土壙（第59図）

調査区南側のC-2グリッドに位置する。第1号住居跡埋没後に掘削されたものである。平面形は不整形、断面形は皿形である。底面にはピットが2本認められた。規模は長軸長1.27m、短軸長0.91m、深さ0.20mで、長軸方位はN-50°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第7号土壙（第59図）

調査区南側のC-2グリッドに位置する。第1号住居跡埋没後に掘削されたものである。平面・断面形ともに不整形である。規模は長軸長1.34m、短軸長0.90m、深さ0.32mで、長軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第8号土壙（第59図）

調査区東側のB-3グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長2.37m、短軸長2.13m、深さ0.70mで、長軸方位はN-6°-Wを指す。

遺物は、覆土上層から陶器擂鉢片が出土した。

第8号土壙出土遺物（第59図）

1は堺明石系の擂鉢で、内面の摺目は一単位9本を数える。18世紀後半から19世紀前半の製品である。

第9号土壙（第60図）

調査区南側のB・C-2グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長2.48m、短軸長1.91m、深さ0.54mで、長軸方位はN-48°-Eを指す。

遺物は、覆土中から縄文土器の破片と黒曜石の原石が出土したが、覆土の状態から近世の土壙と判断した。

第10号土壙（第60図）

調査区南側のB・C-2グリッドに位置する。第11号土壙と重複し、それを壊している。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.07m、短軸長0.39m、深さ0.27mで、長軸方位はN-85°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第11号土壙（第60図）

調査区南側のB・C-2グリッドに位置する。第10号土壙と重複し、北西側が一部壊されている。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.24m、短軸長1.14m、深さ0.42mで、長軸方位はN-27°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第12号土壙（第60図）

調査区西側のB-1グリッドに位置する。平面形は略円形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.20m、短軸長1.17m、深さ0.34mである。

遺物は出土していない。

第13号土壙（第60図）

調査区南西側隅のC-1グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.03m、短軸長0.71m、深さ1.06mで、長軸方位はN-79°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

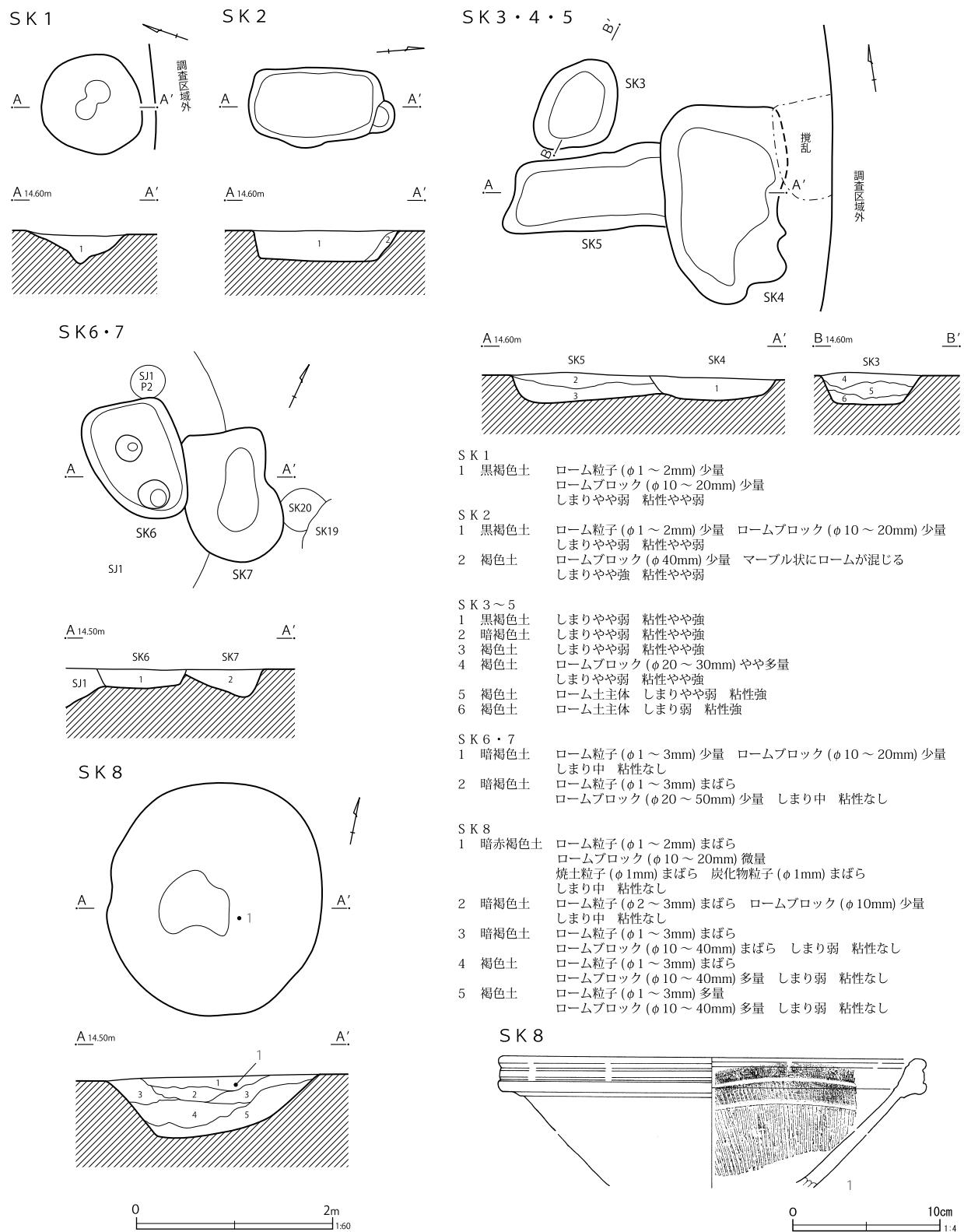
第14号土壙（第60図）

調査区北西側のA-1グリッドに位置する。調査区域外にかかるため平面形は明確でない。楕円形に近いものと考えられる。断面形は鍋底形である。規模は長軸長2.14m、短軸長0.70m以上、深さ0.52mで、長軸方位はN-9°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第15号土壙（第60図）

調査区西側のB-1・2グリッドに位置する。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.99m、短軸長1.97m、深さ0.46mで、長軸方位はN-39°-Wを指す。



第59図 土壙(1)・出土遺物

第14表 第8号土壙出土遺物觀察表（第59図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	残存	焼成	色調	備考	図版
1	陶器	擂鉢	(28.4)	[8.8]	—	D E I	20	良好	赤褐	堺明石系 内面摺目一単位9本 18C後～19C前	38-10

遺物は、覆土中から縄文土器と近世のかわらけの小片が出土した。

第16号土壤 (第61図)

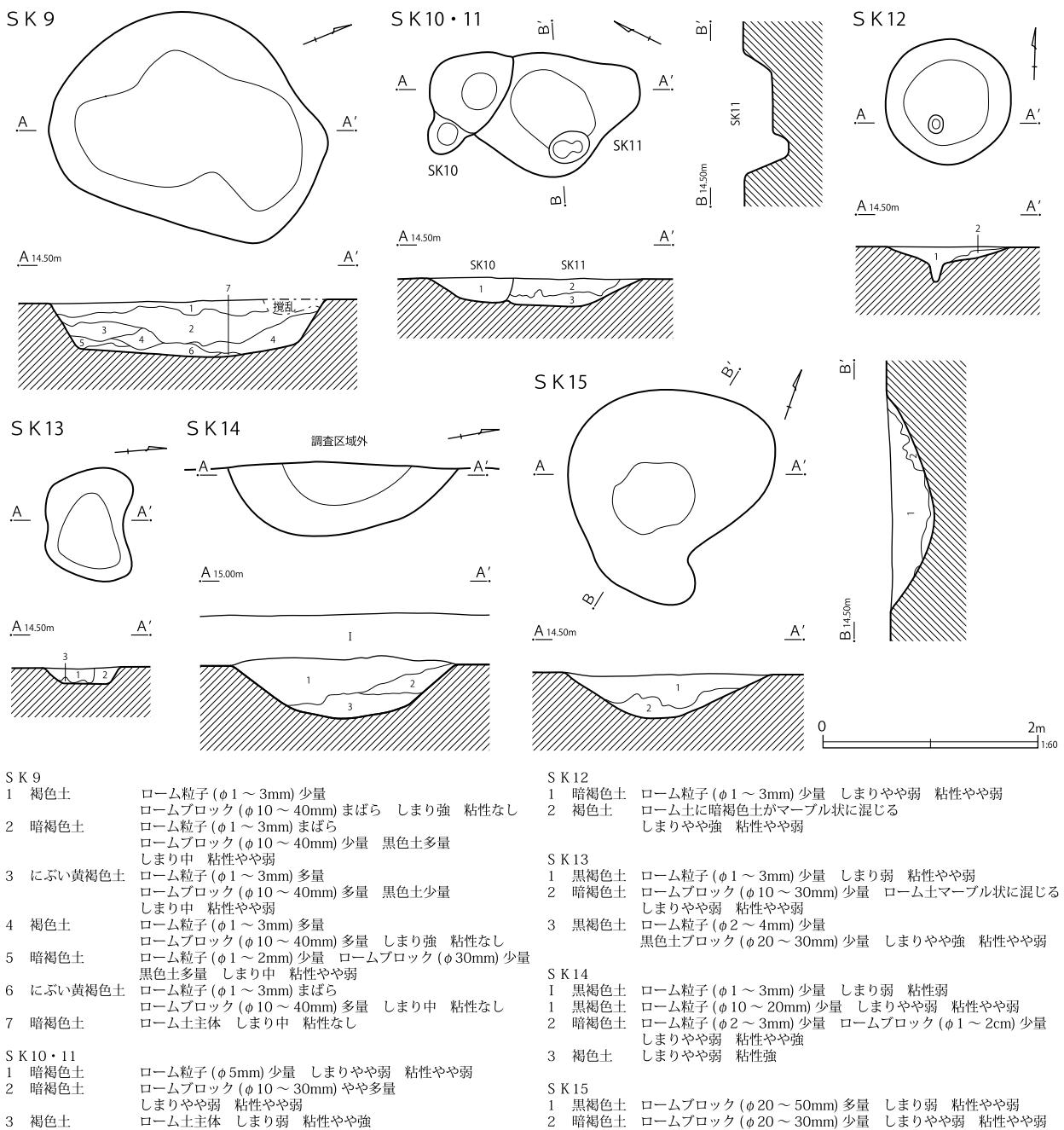
調査区東側のB・C-3グリッドに位置する。北西側に第17号土壤が接している。平面形は橢円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長0.73m、短軸長0.65m、深さ0.23mで、長軸方位はN-45°-Wを指す。

遺物は、土師器の小片が出土したのみである。

第17号土壤 (第61図)

調査区東側のB・C-3グリッドに位置する。第16・18号土壌と重複し、第18号土壌を壊している。平面形は橢円形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.50m、短軸長0.57m以上、深さ0.16mで、長軸方位はN-51°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。



第60図 土壌 (2)

第18号土壙 (第61図)

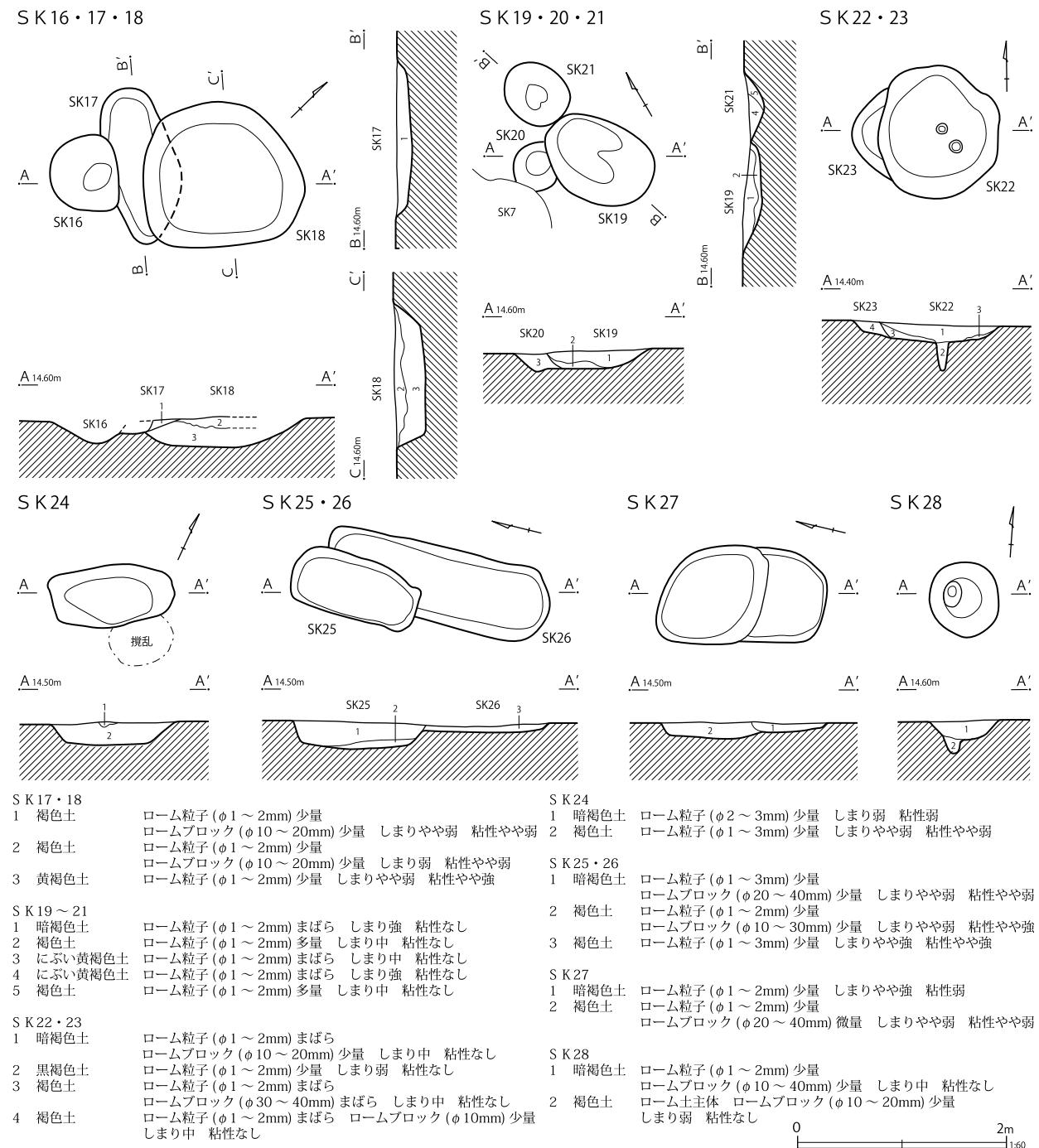
調査区東側のB・C-3グリッドに位置する。第17号土壙と重複し、南西壁の上部が削平されている。平面形は不整方形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.53m、短軸長1.37m、深さ0.32mで、長軸方位はN-44°-Eを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみで、土

壙に伴う遺物はなかった。

第19号土壙 (第61図)

調査区南側のC-2グリッドに位置する。第20号土壙と重複し、それを壊している。平面形は橢円形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.10m、短軸長0.76m、深さ0.19mで、長軸方位はN-35°-Wを指す。



第61図 土壙 (3)

遺物は出土していない。

第20号土壙（第61図）

調査区南側のC-2グリッドに位置する。第7・19号土壙と重複する。平面形は略円形、断面形は鍋底形のピット状の土壙である。規模は径0.45×0.36m、深さ0.17mである。

遺物は出土していない。

第21号土壙（第61図）

調査区南側のC-2グリッドに位置する。第19号土壙と接している。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長0.65m、短軸長0.55m、深さ0.20mで、長軸方位はN-26°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第22号土壙（第61図）

調査区南側のB-2グリッドに位置する。第23号土壙と重複し、それを壊している。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.26m、短軸長1.15m、深さ0.57mで、長軸方位はN-2°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第23号土壙（第61図）

調査区南側のB-2グリッドに位置する。第22号土壙によって大きく削平されている。断面形は皿形で、規模は長軸長0.90m、短軸長0.32m以上、深さ0.18mである。

遺物は出土していない。

第24号土壙（第61図）

調査区中央のB-3グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は逆台形である。規模は長軸長1.17m、短軸長0.60m、深さ0.21mで、長軸方位はN-65°-Eを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第25号土壙（第61図）

調査区中央のB-3グリッドに位置する。土層断面の観察から第26号土壙を壊していることが分かった。平面形は長方形、断面形は箱形である。規模は長軸長1.24m、短軸長0.59m、深さ0.29mで、

長軸方位はN-6°-Eの南北軸を指す。

覆土中から縄文土器と黒曜石の剥片が出土したが、覆土の状態から近世に所属すると判断した。

第26号土壙（第61図）

調査区中央のB-3グリッドに位置する。第25号土壙によって北西側が壊されている。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸長2.19m、短軸長0.73m、深さ0.13mで、長軸方位はN-3°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第27号土壙（第61図）

調査区中央のB-3グリッドに位置する。平面形は長方形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.57m、短軸長0.92m、深さ0.15mで、長軸方位はN-14°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第28号土壙（第61図）

調査区南側のC-2グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は鍋底形である。規模は径0.71×0.66m、深さ0.34mで、長軸方位はN-15°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第30号土壙（第62図）

調査区中央のA-3グリッドに位置する。第31号土壙と重複し、西側の一部が削平される。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.54m、短軸長1.17m、深さ0.23mで、長軸方位はN-37°-Eを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第31号土壙（第62図）

調査区中央のA-3グリッドに位置する。第30・33号土壙と重複し、双方とも壊している。第33号土壙とは入れ子状である。平面・断面形ともに不整形である。規模は長軸長1.89m、短軸長1.65m、深さ0.59mで、長軸方位はN-17°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第32号土壌 (第62図)

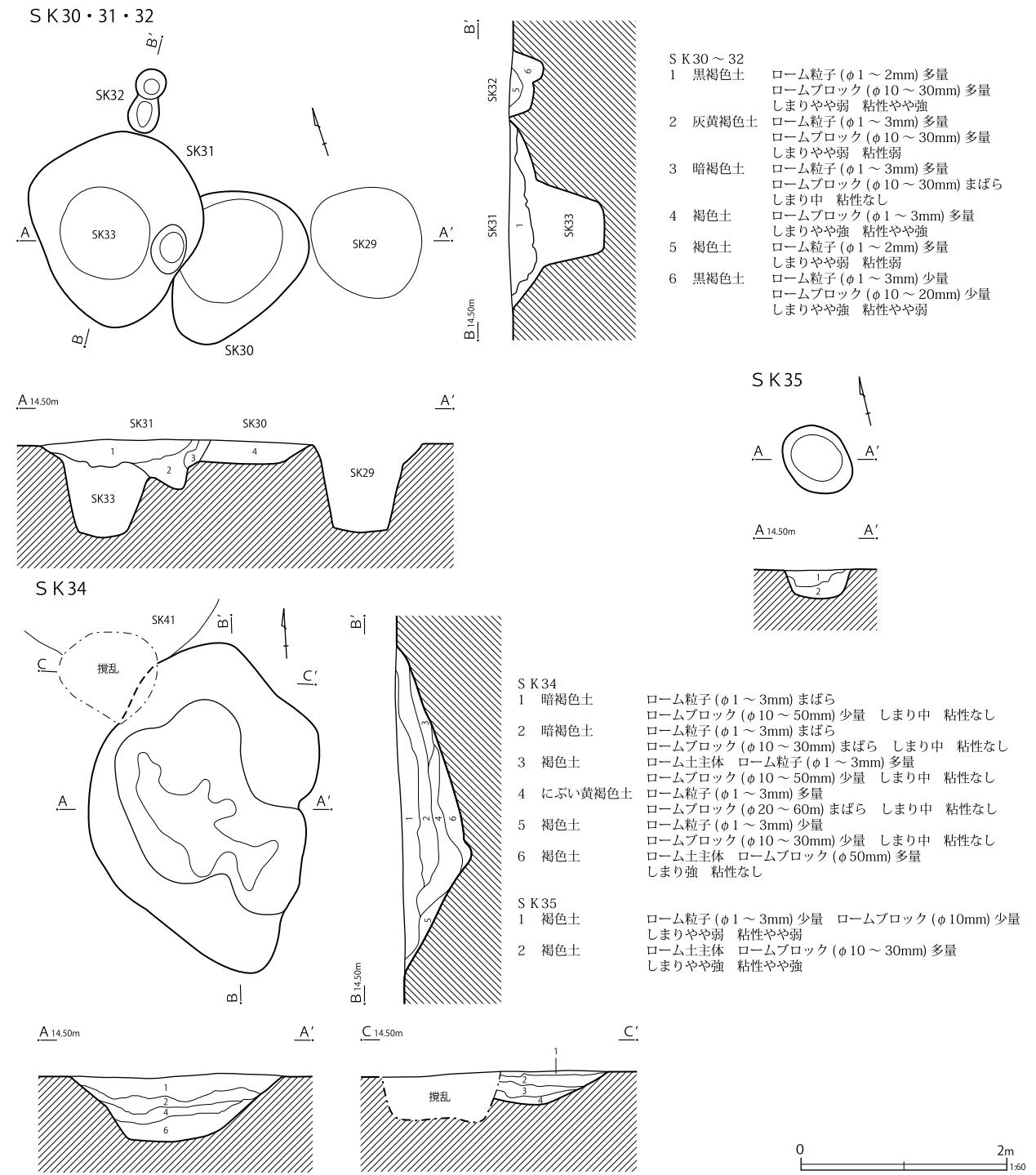
調査区中央のA-3グリッドに位置する。第31号土壌の北側に接している。ピットが連結したような不整形の平面形で、断面形は底面に段差を有する不整形である。規模は長軸長0.63m、短軸長0.20m、深さ0.34mで、長軸方位はN-34°-E

を指す。

遺物は出土していない。

第34号土壌 (第62図)

調査区中央のA-2・3グリッドに位置する。第41号土壌と接するように重複する。平面形は不整形、断面形は逆台形である。規模は長軸長3.20m、



第62図 土壌 (4)

短軸長2.02m、深さ0.78mで、長軸方位はN-8°-Wを指す。

遺物は、縄文土器と近世のかわらけの破片が少量出土した。

第35号土壙（第62図）

調査区中央のA-3グリッドに位置する。平面形は楕円形、断面形は鍋底形のピット状の土壙である。規模は長軸長0.74m、短軸長0.60m、深さ0.26mで、長軸方位はN-36°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第36号土壙（第63図）

調査区北西側のA-2グリッドに位置する。第37・38号土壙と一列に並び、西側に第37号土壙が接している。北側が調査区域外に延びているため平面形は明確でないが、おそらく楕円形であろう。断面形は皿形である。規模は長軸長1.88m、短軸長0.51m以上、深さ0.28mで、長軸方位はN-86°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第37号土壙（第63図）

調査区北西側のA-2グリッドに位置し、第36・38号土壙の3基が並列する。北側が調査区域外に延びるため平面形は明確でない。おそらく略円形と思われる。断面形は皿形である。規模は長軸長1.44m、短軸長0.82m以上、深さ0.27mである。

遺物は出土していない。

第38号土壙（第63図）

調査区北西側のA-2グリッドに位置する。西側に第37号土壙が近接する。北側が調査区域外にかかる。平面形は不整形、断面形は皿形である。規模は長軸長1.54m、短軸長0.88m以上、深さ0.20mで、長軸方位はN-89°-Eを指す。

遺物は出土していない。

第39号土壙（第63図）

調査区北西側のA-2グリッドに位置する。土層断面の観察から埋没後に、第40号土壙が掘り込まれていることが判明した。平面形は不整形、断

面形は皿形である。規模は長軸長3.22m、短軸長3.14m、深さ0.21mで、長軸方位はN-4°-Eを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第40号土壙（第63図）

調査区北西側のA-2グリッドに位置する。大型の第39号土壙が埋没した後、その覆土を掘り込んで構築している。平面形は不整形、断面形は鍋底形である。規模は長軸長1.23m、短軸長0.90m、深さ0.24mで、長軸方位はN-8°-Wを指す。

遺物は出土していない。

第42号土壙（第63図）

調査区北東側隅のA-3グリッドに位置する。第4号住居跡の南西壁の一部を壊している。第4号住居跡の調査を優先したため、本土壙の平面形と規模については把握できなかった。本来の平面形は楕円形に近く、断面形は逆台形と考えられる。規模は長軸長1.25m、短軸長0.82m、深さ0.25mで、長軸方位はN-11°-Wを指す。

遺物は、縄文土器の小片が出土したのみである。

第43号土壙（第63図）

調査区北東側のA-3グリッドに位置する。第3号住居跡の北西壁に接するように第44号土壙と並んで重複している。前後関係は第44号土壙が最も新しい。平面形は略円形、断面形は筒形である。規模は長軸長0.95m、短軸長0.78m、深さ0.84mmである。

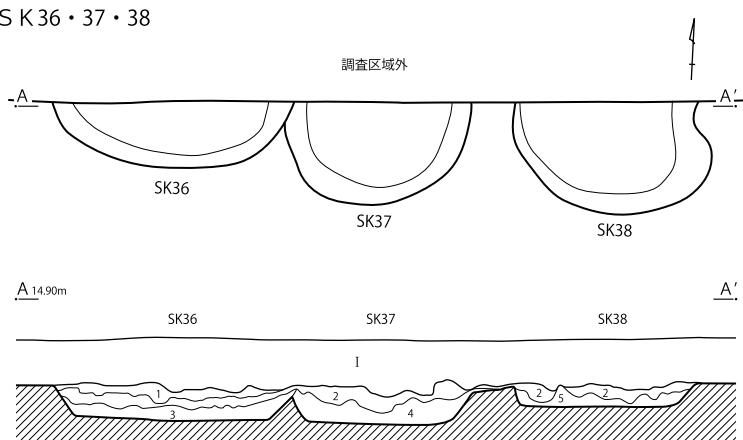
遺物は、覆土中に第3号住居跡からの流れ込みと考えられる縄文土器の小片が含まれていた。

第44号土壙（第63図）

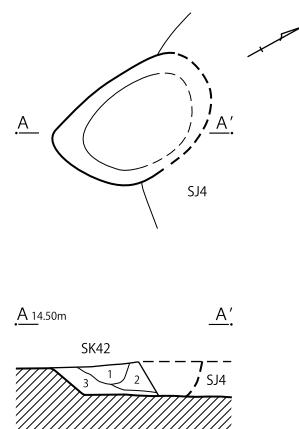
調査区北東側のA-3グリッドに位置する。第3号住居跡、第43号土壙と重複し、それらを壊している。平面形は長方形、断面形は筒形である。規模は長軸長1.08m、短軸長0.55m、深さ0.51mで、長軸方位はN-69°-Eの東西軸に近い。

遺物は、覆土中から縄文土器の破片が出土したが、第3号住居跡からの流れ込みと判断した。

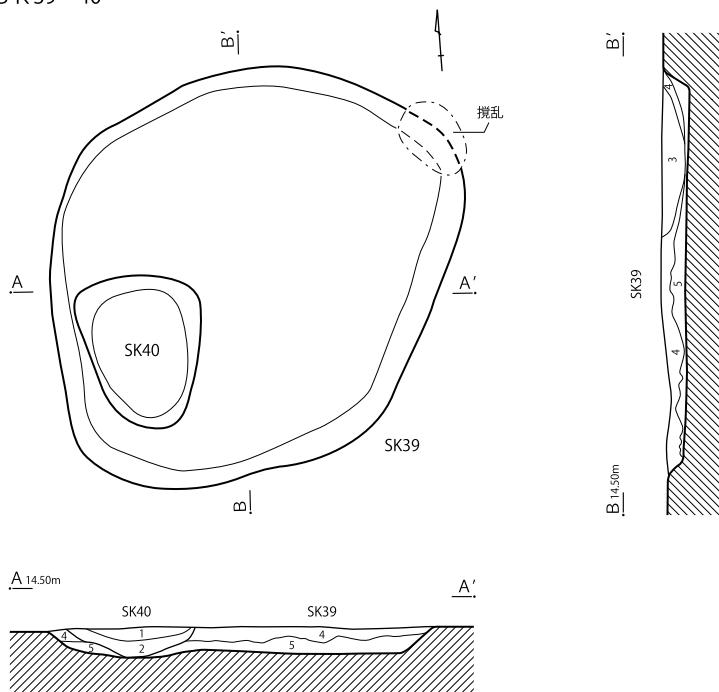
SK 36・37・38



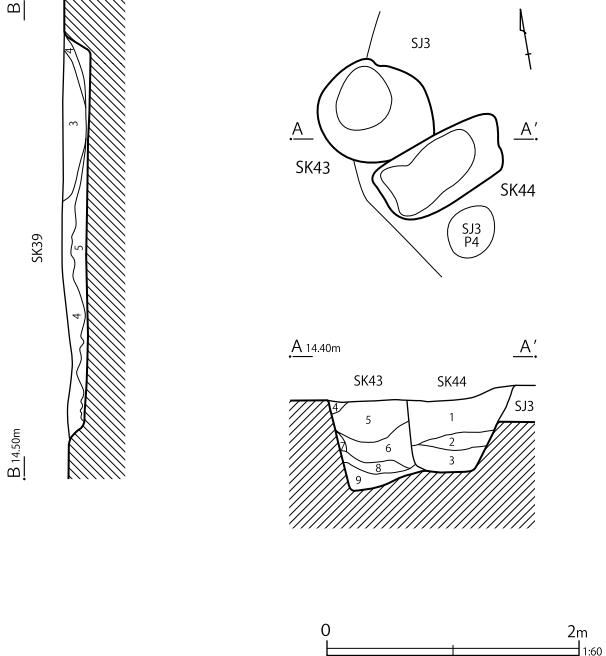
SK 42



SK 39・40



SK 43・44



SK 36～38

I	黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3mm$) 少量	しまり弱	粘性弱
1	黒色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) 少量	しまり弱	粘性やや弱
2	暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) 少量		
3	褐色土	ロームブロック ($\phi 10 \sim 20mm$) 少量	しまりやや弱	粘性やや強
4	褐色土	ロームブロック ($\phi 10 \sim 20mm$) 少量	しまりやや弱	粘性やや強
5	褐色土	ロームブロック ($\phi 20 \sim 30mm$) 少量	しまりやや強	粘性強

SK 39・40

1	黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 1mm$) 少量	しまり弱	粘性弱
2	暗褐色土	ロームブロック ($\phi 10 \sim 30mm$) まばら	しまりやや弱	粘性やや弱
3	暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) やや少量		
4	褐色土	ロームブロック ($\phi 10 \sim 20mm$) 少量	しまりやや強	粘性やや弱
5	褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) 少量	しまりやや弱	粘性やや強

SK 42

1	黒褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) 少量		
2	暗褐色土	ロームブロック ($\phi 20mm$) 少量	しまり弱	粘性なし
3	暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) まばら		
4	暗褐色土	ロームブロック ($\phi 10mm$) 少量	しまり中	粘性なし
5	暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) 少量	しまり中	粘性なし

1	暗褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) まばら		
2	にぶい黄褐色土	ロームブロック ($\phi 10 \sim 20mm$) 少量	しまり中	粘性なし
3	にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 2mm$) 少量	ロームブロック多量	
4	褐色土	ロームブロック しまり強	粘性なし	
5	にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3mm$) 少量	しまり中	粘性なし
6	にぶい黄褐色土	ロームブロック ($\phi 10mm$) 少量	しまり中	粘性なし
7	暗褐色土	ロームブロック しまり強	粘性なし	
8	にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3mm$) まばら	しまり中	粘性なし
9	にぶい黄褐色土	ローム粒子 ($\phi 1 \sim 3mm$) 少量	しまり強	粘性なし

第63図 土壌 (5)

第15表 土壙一覧表 (第55・59~63図)

単位: m

遺構名	時期	グリッド	重複	長軸方位	長軸	短軸	深さ	平面形	断面形	遺物
第1号土壙	近世	C-3	—	—	1.08	1.02	0.34	略円形	擂鉢形	
第2号土壙	近世	C-2・3	—	N-15°-E	1.49	0.82	0.32	長方形	鍋底形	
第3号土壙	近世	B-3	—	N-42°-E	1.05	0.79	0.29	楕円形	鍋底形	
第4号土壙	近世	B-3	SK5	N-8°-E	2.03	1.16	0.24	不整形	皿形	
第5号土壙	近世	B-3	SK4	N-81°-W	[1.64]	0.79	0.33	長方形	鍋底形	
第6号土壙	近世	C-2	SJ1・SK7	N-50°-W	1.27	0.91	0.20	不整形	皿形	
第7号土壙	近世	C-2	SJ1・SK6・20	N-36°-W	1.34	0.90	0.32	不整形	不整形	
第8号土壙	近世	B-3	—	N-6°-W	2.37	2.13	0.70	楕円形	鍋底形	擂鉢
第9号土壙	近世	B・C-2	—	N-48°-E	2.48	1.91	0.54	不整形	鍋底形	
第10号土壙	近世	B・C-2	SK11	N-85°-W	1.07	0.39	0.27	不整形	鍋底形	
第11号土壙	近世	B・C-2	SK10	N-27°-W	1.24	1.14	0.42	不整形	鍋底形	
第12号土壙	近世	B-1	—	—	1.20	1.17	0.34	略円形	略円形	
第13号土壙	近世	C-1	—	N-79°-W	1.03	0.71	1.06	不整形	鍋底形	
第14号土壙	近世	A-1	—	N-9°-E	2.14	[0.70]	0.52	楕円形	鍋底形	
第15号土壙	近世	B-1・2	—	N-39°-W	1.99	1.97	0.46	不整形	鍋底形	
第16号土壙	近世	B・C-3	SK17	N-45°-W	0.73	0.65	0.23	楕円形	鍋底形	
第17号土壙	近世	B・C-3	SK16・18	N-51°-W	1.50	[0.57]	0.16	楕円形	皿形	
第18号土壙	近世	B・C-3	SK17	N-44°-E	1.53	1.37	0.32	不整方形	鍋底形	
第19号土壙	近世	C-2	SK20・21	N-35°-W	1.10	0.76	0.19	楕円形	逆台形	
第20号土壙	近世	C-2	SK7・19	—	0.45	[0.36]	0.17	略円形	鍋底形	
第21号土壙	近世	C-2	SK19	N-26°-W	0.65	0.55	0.20	楕円形	鍋底形	
第22号土壙	近世	B-2	SK23	N-2°-W	1.26	1.15	0.57	不整形	皿形	
第23号土壙	近世	B-2	SK22	—	0.90	[0.32]	0.18	円形か	皿形	
第24号土壙	近世	B-3	—	N-65°-E	1.17	0.60	0.21	長方形	逆台形	
第25号土壙	近世	B-3	SK26	N-6°-E	1.24	0.59	0.29	長方形	箱形	
第26号土壙	近世	B-3	SK25	N-3°-E	2.19	0.73	0.13	長方形	皿形	
第27号土壙	近世	B-3	—	N-14°-W	1.57	0.92	0.15	長方形	皿形	
第28号土壙	近世	C-2	—	N-15°-W	0.71	0.66	0.34	楕円形	鍋底形	
第29号土壙	縄文	A-3	—	—	1.06	1.06	0.88	略円形	筒形	
第30号土壙	近世	A-3	SK31	N-37°-E	1.54	1.17	0.23	不整形	鍋底形	
第31号土壙	近世	A-3	SK30・33	N-17°-E	1.89	1.65	0.59	不整形	不整形	
第32号土壙	近世	A-3	—	N-34°-E	0.63	0.20	0.34	不整形	不整形	
第33号土壙	縄文	A-3	SK31	N-17°-W	0.85	0.78	0.63	楕円形	筒形	
第34号土壙	近世	A-2・3	SK41	N-8°-W	3.20	2.02	0.78	不整形	逆台形	かわらけ
第35号土壙	近世	A-3	—	N-36°-W	0.74	0.60	0.26	楕円形	鍋底形	
第36号土壙	近世	A-2	SK37	N-86°-E	1.88	[0.51]	0.28	楕円形	皿形	
第37号土壙	近世	A-2	SK36	—	1.44	[0.82]	0.27	略円形	皿形	
第38号土壙	近世	A-2	—	N-89°-E	1.54	[0.88]	0.20	不整形	皿形	
第39号土壙	近世	A-2	SK40	N-4°-E	3.22	3.14	0.21	不整形	皿形	
第40号土壙	近世	A-2	SK39	N-8°-W	1.23	0.90	0.24	不整形	鍋底形	
第41号土壙	縄文	A-2・3	SK34	N-40°-W	2.34	(1.88)	0.31	楕円形	皿形	
第42号土壙	近世	A-3	SJ4	N-11°-W	1.25	0.82	0.25	楕円形	逆台形	
第43号土壙	近世	A-3	SJ3・SK44	—	0.95	0.78	0.84	略円形	筒形	
第44号土壙	近世	A-3	SJ3・SK43	N-69°-E	1.08	0.55	0.51	長方形	筒形	

(2) ピット

ピットは、調査区南東隅を中心に4基検出された（第9図・第16表）。

B 3グリッドに所在する土壙群の周囲に3基、C 3グリッドの北西隅寄りに1基が分布していた。

直径40cm前後の円形のピットが多く、深さは30cm程である。土層断面には、柱痕の確認されるものはなかった。

遺物は出土していないが、所属時期は覆土の特徴から近世以降と考えられる。

第16表 ピット一覧表（第9図）

グリッド	番号	長径	短径	深さ	重複
B 3	P 1	0.43	0.40	0.24	
B 3	P 2	0.48	0.45	0.32	

単位：m

グリッド	番号	長径	短径	深さ	重複
B 3	P 3	0.47	0.41	0.37	
C 3	P 1	0.42	0.36	0.29	

VI 石器の石材分析

磨製石斧の岩石種

高木氷川遺跡から出土した磨製石斧（第58図41）の岩石種について検討した。

前提

岩石種を決定する場合には、産状と肉眼観察の知見を基に、薄片の偏光顕微鏡観察結果に基づいて判定が行われることが多い。またEPMAによる定住的なデータが参照されることもあり、最終的な造岩鉱物種の決定には粉末法X線回折が必要となる。しかし、石器の材料となった岩石種を決定する場合には、非破壊が前提となるために、このような方法を探ることができない。

ここでは並行ビーム法X線回折で得られた鉱物名を勘案して、妥当と思われる岩石種を判定した。

被験試料

試料は、磨製石斧1点である。

機器の取り扱いと設定

X線回折装置は理学電気製RINT2100ultima+ / pcを使用し、分析時には集中法光学系から平行ビーム法の光学系に設定を変更した。

なお、装置の設定を第17表に示した。

回折結果の解析

X線回折の結果は、回折角度毎のX線強度として得られるが、この解析にあたっては、判別のための専用ソフトでデータベースとの照合を行い、候補となった物質名を羅列させた上で、専用ソフトが示してきた各鉱物名候補について、データベースに登録されている回折線の位置と強度を測定値と比較して、候補の中から同定を行った。

なお、判別のためのソフトはJAED6.0を、データベースはICDD-PDF DataSets 1-15plus70-

89Release2001を利用した。

X線回折結果と岩石種の判定

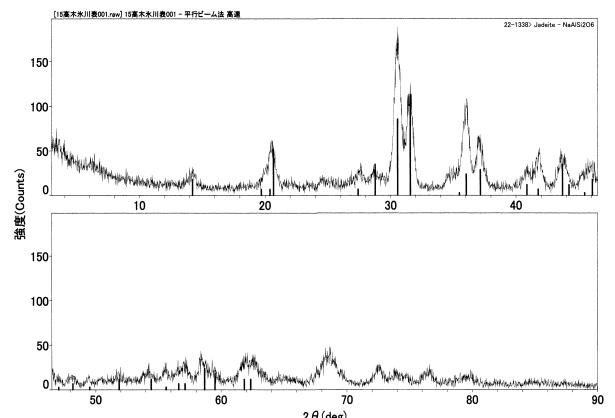
X線回折のプロファイルを第64図に示した。

試料からはjaditeが検出されたことからヒスイ輝石岩と判定した。

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧については、関東各地で縄文時代中期から後期にかけて検出されており、群馬県下仁田町下鎌田遺跡が製作遺跡として想定されている（上野ほか2016）。

第17表 X線回折装置の設定

ターゲット: Cu	モノクロ受光スリット: なし
管電圧: 40kV	走査モード: 連続
管電流: 40mA	サンプリング幅: 0.01°
カウンタモノクロメータ: 固定	走査範囲: 3~90°
カウンタ: シンチレーションカウンタ	積算回数: 1回
発散スリット: 0.5mm	スキャンスピード: 1°/min
発散縦制限スリット: 10mm	走査軸 2θ / θ°
散乱スリット: 解放	θオフセット: なし
受光スリット: 解散	光学系: 平行ビーム法



第64図 X線回折のプロファイル

VII 調査のまとめ

1. 調査の成果

滝沼川流域における遺跡群の動態については、大木戸遺跡や清河寺前原遺跡などの左岸域の遺跡によって、これまで語られることが多かった。近年、高木地区を中心とした右岸域の調査の進展によって、その実態が明らかになってきている。

ここでは、既に報告書の刊行されている高木道下遺跡・高木道下北遺跡の成果（福田ほか2013）をもとに、滝沼川流域右岸域の遺跡群の様相について、現状での知見を簡単にまとめておく。

（1）高木稻荷前遺跡の調査成果

今回の高木稻荷前遺跡の調査で検出された遺構は、縄文時代後期の住居跡2軒、古墳時代後期の住居跡2軒、近世の溝跡6条・土壙38基・ピット44基である。出土遺物は、縄文時代の土器・石器、古墳時代の土師器・須恵器、近世の陶磁器・石製品・土製品・鉄製品・錢貨である。

調査の成果としては、縄文時代では、主軸方向を90°ずらした2軒の柄鏡形住居跡が重複して見つかっている。それぞれの住居跡は主体部と張り出し部の先端に埋甕が埋設されたもので、住居跡の時期は後期初頭に位置づけられる。特に第2号住居跡の張り出し部に埋設された深鉢形土器は、東北地方南部の土器型式の影響の見られる特徴的な土器であった。

古墳時代では、滝沼川流域において初めて後期終末、7世紀中葉頃の住居跡が2軒検出された。まだ開発の進んでいない内陸部に進出した、小規模集落の実態を明らかにすることができた。

（2）高木氷川遺跡の調査成果

高木氷川遺跡は、東西約200m、南北約120mの範囲に広がる縄文時代中期の集落跡である。滝沼川の低地から200m程内陸に入り、高木氷川神社境内地を含む遺跡の西端は中釣川の谷奥に面していることから、谷奥の湧水を生活用水や水辺空間

として利用していたことは想像に難くない。

今回の高木氷川遺跡の調査で検出された遺構は、縄文時代中期後半の住居跡4軒・土壙3基、近世の土壙41基・ピット4基である。出土遺物は、縄文時代の土器・石器・土製品、近世の陶器である。

調査の成果としては、縄文時代中期後半の加曾利EⅢ式期を中心とした住居跡が検出され、土器や石器がまとまって出土したことが挙げられる。このうち第1号住居跡では、大型の深鉢形土器の破片を用いた土器片囲い炉が見つかった。当該期は、大規模な環状集落から分散型集落に転換しはじめる時期にあたることから、本遺跡もそうした小規模集落のひとつと考えられる（金子2006）。

出土遺物には、群馬県下仁田町周辺を原産地とするヒスイ輝石岩で製作された磨製石斧が出土しており、遠隔地との交通関係の実態をうかがわせる資料として重要である。

（3）滝沼川流域右岸の遺跡群

次に、これまでの調査成果を踏まえ、滝沼川流域の遺跡群の動態について概観したい。

旧石器時代では、高木道下遺跡から、立川ロームⅢ・Ⅳ層に相当する層位から礫群が2箇所検出されている。このほかにナイフ形石器や槍先形尖頭器も出土しているが、隣接する遺跡では旧石器時代の遺構・遺物は今のところ発見されていない。

しかし、対岸の清河寺前原遺跡や大木戸遺跡・西大宮バイパスNo.5遺跡では、大宮台地では発見例の少ない後期旧石器時代前半の石器群がまとまって出土しており、注目に値する。滝沼川流域が大宮台地では最初に人が住み始めた地域のひとつであることは確実で、今後の調査の進展によっては、右岸域においても旧石器時代の遺構・遺物が検出される可能性は高い。

縄文時代では、高木稻荷前遺跡から早期の撲糸

文系土器や押型文土器・条痕文系土器が出土しており、生活適地として人々の活動の痕跡が認められる。対岸の清河寺前原遺跡では、台地縁辺部から早期の炉穴群が、大木戸遺跡でも、滝沼川の低地を望む斜面部から炉穴群が検出されている。

現状では、定住活動をうかがわせる住居跡の出現は、高木道下遺跡で検出されている前期末の住居跡が最も古い。ただし、遺構は発見されていないものの、高木稻荷前遺跡では前期後半の諸磯a式、高木氷川遺跡では前期末の諸磯c式と十三菩提式などの土器片が出土している。また、高木道下遺跡では、西日本からの搬入品と考えられる北白川下層系の土器片が出土しており、注目される。

滝沼川流域における中期前半の様相は、明確でない。わずかに高木稻荷前遺跡から勝坂式土器の土器片が出土しているだけで、大木戸遺跡でも中期前半の土器の出土量は極端に少ない。現状では滝沼川流域における大規模な環状集落の存在は知られていないが、近隣では、東方約2.5kmに位置する鴨川左岸の下加遺跡が拠点的な集落である。

中期後半の加曾利EⅢ式期には、右岸域では高木氷川遺跡と高木道下遺跡で住居跡が検出されている。面的に調査された高木道下遺跡では、台地のやや奥まった地点に5軒の住居跡が列状に点在し、周囲から埋甕や土壙・集石土壙が見つかっている。それとは対照的に、大木戸遺跡では加曾利EⅢ式期の住居跡は見られず、土壙や集石土壙が検出されているだけである。住居跡は、加曾利EⅣ式期にならないと見られず、東側台地部分を中心に分布している。一方、後期初頭から後期中葉にかけては台地上を集落域が移動し、滝沼川の低地を望む台地西側縁辺部に集落域が形成され、眼下の低地には水辺空間が展開している。

右岸域でも、高木道下遺跡と高木稻荷前遺跡で柄鏡形住居跡が検出され、低地に面した台地先端部へ集落が移動しており、対峙する大木戸遺跡との密接な関連がうかがわれる。

滝沼川流域における弥生時代の様相は明らかでないが、高木道下遺跡では弥生時代中期に多く見られる磨製石鎌が出土しており、弥生人の足跡を辿ることができる。

弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭にかけては、大木戸遺跡に比較的規模の大きな集落が形成されるとともに、沖積地を見下ろす台地縁辺部に墳丘を残す4基の方形周溝墓が列状に造営され、鉄釧やガラス小玉を副葬する有力者層の出現を物語っている。集落は、前期末まで継続しているが、中期の初めには途絶してしまう。

一方、右岸域では弥生時代後期から古墳時代にかけての様相は詳らかでなく、高木稻荷前遺跡に小規模集落が出現する古墳時代後期終末まで、長い空白期間が存在する。ただし、分布調査の成果から、高木小明遺跡や清河寺西原遺跡が古墳時代後期の集落跡と考えられており、周辺にも小規模集落が点在する余地は残されている。

奈良・平安時代の様相については、遺構・遺物が検出されておらず、不明な点が多い。自然堤防上に営まれた集落への集住や条里水田の施工などが、大きく影響しているのであろう。

中世は、周辺に中世開基と伝わる寺院が分布しており、有力武士団による地域開発が進められたことをうかがわせる。高木道下北遺跡では、部分的な調査であったが、かなりまとまった量の中世遺物が出土した。陶磁器類は、13~14世紀代の常滑焼甕・龍泉窯系青磁蓮弁文碗をはじめ、古瀬戸後期様式の天目茶碗・折縁大皿・縁釉小皿・摺鉢等と、瀬戸美濃大窯段階の天目茶碗・摺鉢が見られ、15~16世紀代を中心としている。

この地は、江戸時代には差扇領に属し、各遺跡の所在地は、それぞれ高木氷川遺跡が木下村、高木道下遺跡・高木道下北遺跡が北貝戸村、高木稻荷前遺跡が法願寺村、大木戸遺跡が差扇村、清河寺前原遺跡が清河寺村にあたっている。

高木地区の各遺跡を縦断するように台地の中央

部を南北に走る「大道」は、南は法願寺村・差扇村を経て与野町・浦和宿に通じ、北は上尾領平方・川越町に通じている。沿道に沿って開発の手が及

び、近世初期には、畠地として、あるいは屋敷地として、土地利用されていたことが、各遺跡で見つかった区画溝や土壙などから推定される。

2. 縄文時代について

(1) 高木氷川遺跡住居跡出土土器

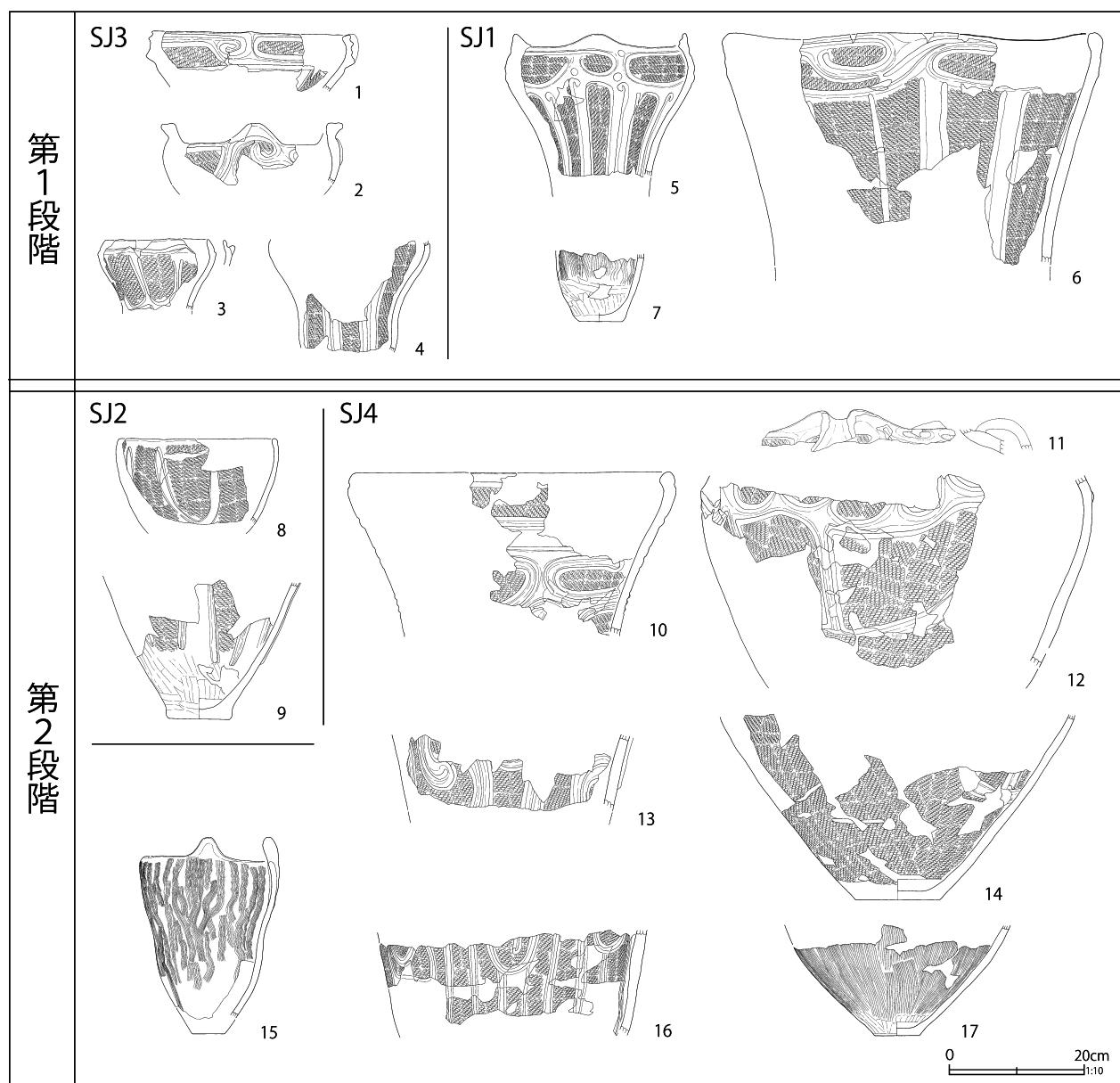
高木氷川遺跡では、縄文時代中期後半の住居跡4軒と土壙3基が検出された。特に住居跡からは比較的まとまった土器が検出されていることから、ここでは、各住居跡の土器を検討し、時間軸を設

定することとした。

第1段階

第65図1～4の第3号住居跡出土土器と、5～7の第1号住居跡出土土器を第1段階とした。

第3号住居跡からは1・2の口縁部文様帯を有



第65図 高木氷川遺跡縄文土器変遷図

する土器2点と、3の胴中位を境に、上下に文様が描かれる土器が出土している。1は幅の狭い口縁部に渦巻き文と長方形の区画文が配される文様構成で、2は口縁部文様帯が前者に比べてやや幅広く、渦巻き文を挟んで下方が弧状となる区画文が配されている。いずれも胴部には沈線による懸垂文を持ち、沈線間が磨消されている。

3は胴くびれ部を境にU字と逆U字状のモチーフが配されたものと推定され、モチーフ間が磨消されている。

第1号住居跡からは、5～7が出土した。

5は2に近似しているが、文様が沈線主導で描かれており、胴部の懸垂文間に単沈線による蕨手状の沈線が垂下している。6はやや大型の土器で、器形に比して幅の狭い口縁部文様帯には渦巻き文と長方形の区画文が配されるが、全体の構成は横S字状となっている。胴部の懸垂文間は磨消されている。

第3号住居跡と第1号住居跡出土土器は、様相に差異を持つものの、口縁部文様の描き方や磨消しを有する点などから、加曾利EⅢ式の古い部分に相当するものと考えられる。

第2段階

第65図8・9の第2号住居跡出土土器と、10～17の第4号住居跡出土土器を第2段階とした。

8の文様は、3の第3号住居跡出土土器と近似するが、口唇直下の縄文施文が羽状となっている点や、胴上部の湾曲が強い点などから、3よりも新しい特徴を有している。9は胴下部のみであるが、断面三角の隆起線による懸垂文であることや、底部の形状などから、第1段階よりも新しい時期と考えられる。

10～17に示すように、第4号住居跡からは、まとまった土器が出土している。このうち口縁部文様帯が残る深鉢形土器は、10の1点のみである。10は口縁部文様帯が幅狭く、胴部には渦巻き文が描かれている。文様は、1条の幅広く扁平な隆帶

で描かれるが、部分的に断面三角形の2条の隆起線で描かれている点が特徴である。13は2条の隆起線で渦巻き文が描かれる土器である。12は大型の土器で、渦巻き文の土器であろう。文様は隆起線で描かれている。

16は恐らく胴部の渦巻き文が沈線で描かれた土器と考えられ、渦巻き文に接して沈線が垂下している。

11は橋状の把手が突出していることから、両耳壺と考えられる。

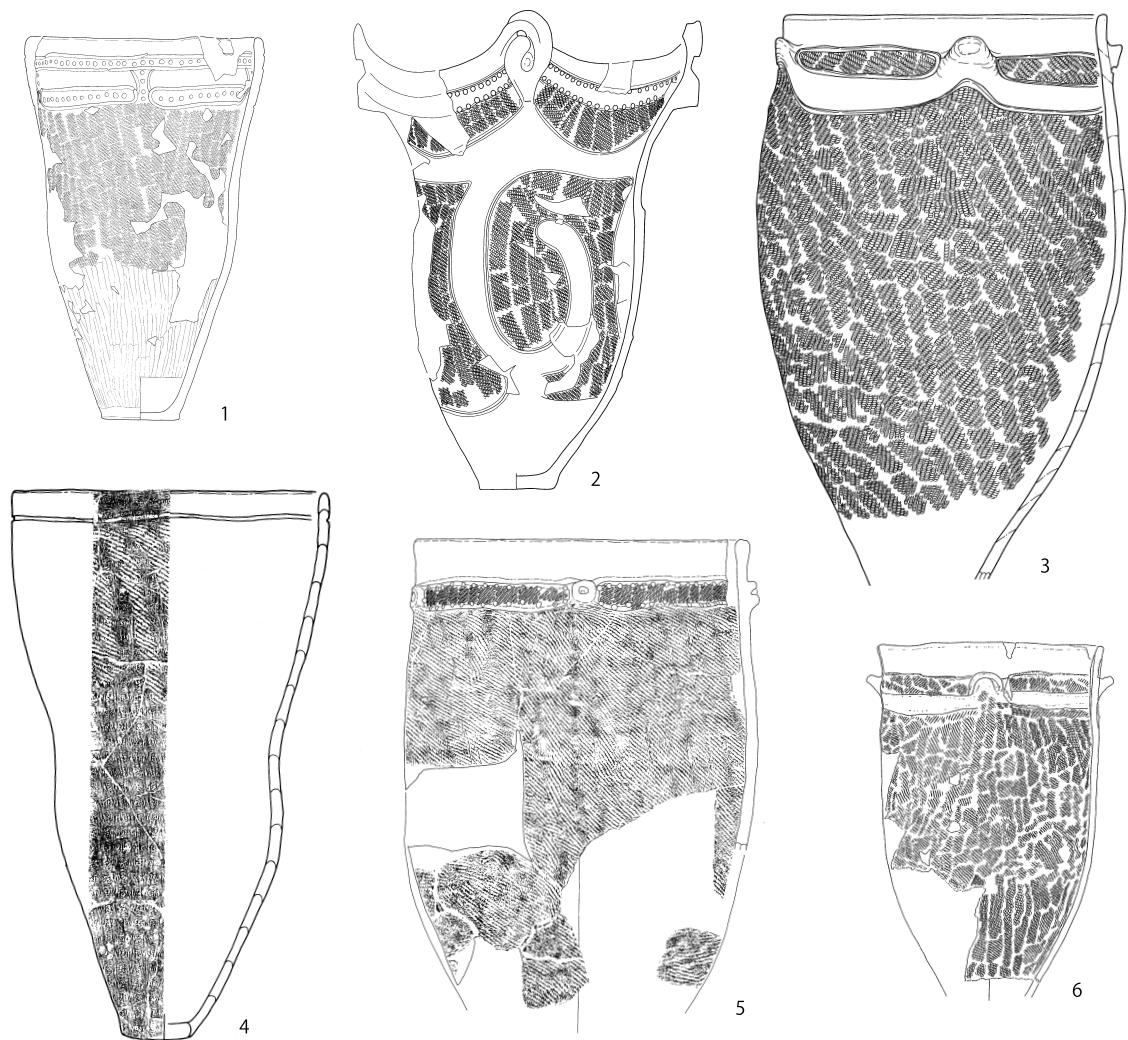
第2号住居跡と第4号住居跡の出土土器は、第3号住居跡と第1号住居跡とは様相が異なる。特に第4号住居跡出土土器に見るよう、隆起線による胴部渦巻き文の土器が認められる点、両耳壺が伴う点、8のように口唇直下に羽状の縄文施文が見られる点など、全体に後出的な要素が認められることなどから、第2号住居跡と第4号住居跡出土土器は、加曾利EⅢ式の新しい段階に位置づけられる。

(2) 高木稻荷前遺跡住居跡出土土器

高木稻荷前遺跡では、柄鏡形と推定される2軒の住居跡が重複した状態で検出された。各々の住居跡には、主体部と張り出し部に埋甕を伴っている。このなかで、第2号住居跡の張り出し部と推定される部分から出土した埋甕は、かなり特徴的な土器である。ここでは、この土器の系統的な分析を通じて、その背景を探り、併せて住居跡の前後関係を考えてみたい。

第66図1は、第2号住居跡の張り出し部と考えられる部分に埋設されていた埋甕である。全体に細身の作りで、無文の口唇下には器面を全周する平行沈線文と、その下部に5単位となる長楕円形の区画文がある。平行沈線文と区画文内には、円形刺突が施されている。また、平行沈線文と長楕円形の区画文間には円形刺突が施され、このうち2箇所には弧状の沈線が垂下している。

器形は口縁や胴部の張りが弱く、称名寺式とは



1 高木稻荷前遺跡 第2号住居跡 2 市場I遺跡 第3次調査第1号住居跡 3 越田和遺跡 3号土器埋設遺構
4 貫井二丁目遺跡 J2号住居跡 5 清左衛門遺跡 第1地点第2号土壤 6 寺野東遺跡 第192号土拵

0 20cm
1:8

第66図 高木稻荷前遺跡出土土器関連図

異なっている。4の東京都貫井二丁目遺跡例に酷似し、称名寺式よりもむしろ加曽利E式の器形であると思われる。一方、区画文直下から胴張り出し部には、撚りの細かいLR縄文が密に縦回転施文されており、張り出し部から底部にかけてミガキが施されている。このような施文手法は、称名寺式に伴う粗製土器に共通している。

ところで、口唇下を巡る平行沈線文や長楕円形区画文は、どのような系統を想定すべきであろうか。

称名寺式に平行する加曽利E式系の土器は、緩い4単位波状口縁と平縁とがある。いずれも、沈

線や微隆起線で区画された口唇無文部を持っている。一方、1の高木稻荷前第2号住居跡の埋甕は、口唇無文部直下に平行沈線が全周している。無文部を持つ点は、加曽利E式系と共に通する。しかし、平行沈線による区画を有する点は、2に示した北本市市場I遺跡から出土した、関沢類型の口唇部とその直下が主に微隆起線で区画され円形刺突が施される文様構成に類していると考えられる。

それでは、平行沈線下部に施される梓状の区画文の由来はどのように考えられるであろうか。

南東北では、後期初頭に3に示したような牛蛭式が出現する。牛蛭式は、加曽利EIV式と大木10

式の要素が融合して成立した土器と考えられている。口唇無文部下に突起を挟んで4単位の枠状区画文があり、その下部には弧状の区画線が器面を巡っている。器形は異なるが、関沢類型とも共通する部分が存在することに注目したい。

栃木県寺野東遺跡では、6のように突起下の沈線が直線化した例も存在することから、高木稻荷前遺跡例や貫井二丁目遺跡例などを介した影響関係も想定される。

5の白岡市清左衛門遺跡では、牛蛭式の影響を受けたと考えられる土器が出土している。口唇無文部下に突起を挟んで微隆起線による枠状区画文が配され、区画内には微隆起線に沿って円形刺突が施されている。突起状にも円形刺突が施されていることから、関沢類型の影響が指摘されている（松崎2008）。加曾利E式や称名寺式では、口唇無文部下が多段に区画される土器は存在しないようである。一方、関沢類型では口唇無文部下に刺突列を伴う区画があり、頸部に弧状の区画線を有するなどの特徴が認められる。牛蛭式はこの影響を受け、関沢類型に特徴的な波頂部の突起と枠状区画とを一体化させ、平縁に構成したと考えられる。

高木稻荷前第2号住居跡出土土器は、このよう

な土器変容の在り方を反映している。例えば、寺野東遺跡出土土器のように、胴下部にまで施文域が伸長した加曾利E式の影響を受けたと考えられる器形の系統上に、この時期に特徴的な縄文地文の施文手法を取り入れ、関沢類型や牛蛭式の要素を加味して生み出された土器と想定される。

高木稻荷前第2号住居跡は、掘り込みが検出されなかったが、確認時に住居跡と推定される範囲から少量の土器が出土している。これらを見ると、第12図2の加曾利E式系の土器や、第13図8～15の称名寺式土器が含まれている。混在している可能性も否定できないが、称名寺式の段階区分に照らせば、第2段階から第4段階までの範囲に比定できそうである。

最後に、高木稻荷前第4号住居跡との前後関係について考えてみたい。

第4号住居跡は、主軸を異にするが第2号住居跡と重複関係にある。第4号住居跡の張り出し部に埋設されていた土器は、関沢類型（第16図1）である。第4号住居跡も遺物量が少ないため、両住居跡の前後関係は決めがたいが、第2号住居跡とは時間的な隔たりは小さいようと思われる。

3. 古墳時代について

（1）高木稻荷前遺跡出土土器の年代

ここでは、高木稻荷前遺跡第1号住居跡から出土した古墳時代後期の土器（第21図）について、年代的な位置づけを中心に検討したい。

土師器（壺・鉢類）

土師器の壺・鉢類が供膳具の主体となる。

1は口径10cm以下までに縮小した口縁部が短く直立する模倣壺である。2はS字状の口縁部を呈し、赤彩が施された比企型壺である。口径11cm程度であり、やや扁平な形態で口唇部内側に浅い沈線が巡っている。3は大きく外反した口縁部で、体部が浅く扁平になった赤彩が施された壺である。

このほかに比企系とした4の鉢がある。口縁部と体部の境に明瞭な段を持ち、口縁部は内傾気味に立ち上がり、口唇部の内面に沈線の巡るものである。

土師器（甕類）

煮沸具は、5～11の土師器の甕が出土している。胴部が長く伸びた、いわゆる長胴甕である。

5・6は口縁部が緩やかに外反し、胴部との境に明瞭な稜が作り出されている。調整は胴部上位に横方向のヘラケズリが施された後、縦方向のヘラケズリが施されている。

7～10は口縁部が大きく外反し、胴部に縦方向

のヘラケズリを施されたもので、形態の違いから2種類に細分される。7・10は胴部最大径をやや上位に持ち、口径と胴部最大径がほぼ等しいものである。これに対し、8・9は胴部の膨らみの弱い、口径よりも胴部最大径の小さい、寸胴形の器形である。このほかに、11の木葉痕を残す長胴甕の底部破片が見られる。

須恵器（甕類）

須恵器は、12の甕の底部片が出土した。底部の形態は丸平底で、外面には叩き整形の後、ナデが施されている。底部内面には同心円文の当具痕が良好に残る。胎土の特徴から在地産であろう。

まとめ

本住居跡から出土した土器群の所属時期は、小型化した模倣壺や比企型壺、長胴甕の形態的特徴から、7世紀中葉に位置づけることができる。

周辺では、さいたま市根切遺跡（宮瀧1993）・札之辻遺跡・小井戸遺跡（宮1986）、上尾市領家・宮下遺跡（小宮山2011）などで、7世紀中葉から後葉にかけての良好な土器群が出土している。

模倣壺の類例は少ないものの、口径が11cm程度に小型化した比企型壺を主体に、北武藏型壺と呼ばれる浅い半球状の壺と、湖西産須恵器の壺H・壺Gが併出する段階に併行すると考えられる。

引用・参考文献

- 新屋雅明ほか 2013『大木戸遺跡Ⅱ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第405集
- 磯野治司 1997『市場Ⅰ遺跡 第3次調査』北本市埋蔵文化財調査報告書第5集 北本市教育委員会
- 上野真由美 2016「県内における縄文中期集落のあり方」『縄文中期の大環状集落を探る！－桶川市諫訪野遺跡を中心に－』
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 上野真由美ほか 2016「ヒスイ輝石岩製の磨製石斧」『研究紀要』第30号 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 江原 英 1999『寺野東遺跡Ⅱ』栃木県埋蔵文化財調査報告第224集 栃木県文化振興事業団
- 大谷 徹 2016「さいたま市大木戸遺跡（第18・20次）の調査」『第49回遺跡発掘調査報告会発表要旨』埼玉考古学会
- 金子直行 2006『縄文中期環状集落解体への序章－「時（クロノス）」としての土器からみた「場（トポス）」としての集落変遷－』
『ムラと地域の考古学』同成社
- 小金井靖・本橋恵美子 1985『貫井二丁目遺跡』練馬区遺跡調査会
- 小宮山克己 2011『領家・宮下遺跡』上尾市文化財調査報告第93集 上尾市教育委員会・上尾市遺跡調査会
- 田代 治ほか 1989『西大宮バイパスNo.5遺跡』大宮市遺跡調査会報告第24集
- 田代 治ほか 1995『西大宮バイパスNo.6遺跡』大宮市遺跡調査会報告第48集
- 立木新一郎ほか 1985『西大宮バイパスNo.1・No.2遺跡』大宮市遺跡調査会報告第11集
- 立木新一郎ほか 1986『西大宮バイパスNo.4遺跡』大宮市遺跡調査会報告第16集
- 田中広明 2004「それからのさきたま」『幸魂—増田逸朗氏追悼論文集—』北武藏古代文化研究会
- 西井幸雄・鈴木孝之 2008『大木戸遺跡Ⅰ』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第355集
- 西井幸雄 2009『清河寺前原遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第366集
- 秦野昌明 2002「足立郡誕生への一考察」『埼玉考古』第37号 埼玉考古学会
- 福島雅儀ほか 1996『三春ダム関連遺跡発掘調査報告書8』福島県文化財調査報告書第322集 福島県文化センター
- 福田 聖ほか 2013『高木道下／高木道下北』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第406集
- 藤野一之 2012『下田遺跡1－下田遺跡1区－1発掘調査報告書』坂戸市
- 細田 勝 2008「加曾利E式土器」『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション
- 松崎慶喜 2008『新屋敷遺跡・中妻遺跡（第1地点）・鶴巻遺跡（第2地点）・清左衛門遺跡（第1地点）・赤砂利遺跡（第3地点）・第4地点）・大町遺跡』白岡町埋蔵文化財調査報告書17集 白岡町教育委員会
- 水口由紀子 1989「いわゆる“比企型壺”的再検討」『東京考古』第7号 東京考古談話会
- 宮瀧由紀子 1993『水判土壙の内・林光寺・根切』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第132集
- 宮瀧由紀子 1996「大宮市根切遺跡出土漆付着土器をめぐって」『埼玉考古』第32号 埼玉考古学会
- 宮 昌之 1986『札ノ辻・小井戸』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第55集